

平成21年度
明星学園 支援運営方針
<副読本>～クラス新聞『とちんこ』～

【資料1】

平成12年度 冬 クラス新聞「とちんこ」

『Kさんが泣いた』

Kさんが泣いた。頑固で意地っ張りのあのKさんが泣いたという。ぼろぼろ涙をこぼして泣いたという。『お母さん恋しい』と泣いたという。

これは、僕らが見る初めての彼女の涙だった。そしてこの日から彼女の生活は一変した。

僕らがKさんと知り合った三年前、彼女は、彼女を施設に置いて帰宅するお母さんと別れたその後、必ず玄関の下駄箱の前に陣取り、下駄箱にある手当たり次第の靴のひもを熱心に解き続けた。しっかり結んである靴ひもを次々と解いていく彼女の姿は、当然固く結ばれていなくてはならないはずの母親との関係が彼女の願いとは裏腹に、いとも簡単に解かれてしまうこの現実を一生懸命受け入れようとしているかのように見えた。

いつも彼女は、この作業を無言で行ない、ひとしきり納得するといつのまにか玄関から消えた。

そんなある日、僕らは、母親との別れ際、玄関口に座っている彼女を後ろから抱え込み、「お母さん、Kちゃんのこと大好きですよねえ、Kちゃんのこと嫌いで学園に置いていくんじゃないですよねえ、次の帰省の約束もきちんとできているし、さあしっかりここでお母さんとお別れしよう。」といつも一人で、靴ひもを解くことで、おそらく我慢していただろう別れの悲しさや辛さをちょっぴり分けてくださいというメッセージを込めながら、抱き続けた。

十分くらい経ったときだろうか、Kさんは「もういい」というかのように職員の手を払いのけると、靴のひもには一つも触れず玄関を後にした。

その頃彼女は、枕もとにマグカップを二つ必ず並べておき、床についた。僕らはそれを『二の法則』と呼んで、並べられたカップの一つがKさんで、もう一つがきっとお母さんであろうことを推測し、彼女の要求通りマグカップを用意し続けた。

昼間には、強迫的に折り紙を切り続ける彼女がいた。握力が乏しい彼女は、昔ながらの裁縫バサミを片手に「チョキチョキ」と紙を切ることを要求し、紙が途切れていれば、自分の髪の毛を切った。昼間中紙を切り、それは、食事の時間のときに途切れるだけで時には深夜までに及んだ。切る折り紙の色は、<赤>だけだった。僕らはこれを『赤の時代』と呼んで、受け止め続けていた。

カップでも折り紙でも、洋服でも、食事のふりかけでも言い出したら一步も引かない彼女である。手に入るまで、思い通りなるまで要求をし続けた。

洋服なら、行事用のジャージの上衣である。行事と保護者の来園とがイメージ上でくっついてしまっているのだろう。淋しい時には決まってそのオレンジ色のジャージを「ジャンパー」

と甲高い声で要求し、いつまでも着続けた。

食事の時のふりかけなら「パッパッパッ」である。家庭から持参した桃の缶詰の空き缶の中にふりかけを入れ、お湯をたし、お茶のようにして飲んだ。

どの行動も家庭や母親と切っても切れない関係にあるように思えた。

『チョキチョキ』の秘密の解く鍵は母親によって提供された。

「お父さんさんたらねえ、Kちゃんがいくら呼んでも盆栽に夢中だと返事もしてあげないんですよ」

僕らはとっさにひらめいた。<ア！これがKさんのチョキチョキだ！>

Kさんは来る日も来る日もまだ自分の声の届かぬ父親に想いを馳せながら、父親が盆栽をチョキチョキするように自分もチョキチョキ折り紙を刻んでいたのだ。

この三年の間に、お母さんからKさんへ、そして職員からKさんへたくさんのポジティブメッセージが届けられた。

『あなたは、あなたが決めたとおりに生きていきましょう。僕らはそのための支援なら労を惜しまない。ここは施設だけれどKさんが、お家でしたいなと思っているのと同じ暮らしをここで創ってみようよ。チョキチョキだって、ジャンパーだって、ぱっぱっぱだって全然変じやない。このままのKさんが大好きだよ』と。

その日、Kさんは、朝から「ポッポにのって、ポッポにのって」とお父さんが車に乗ってお母さんと迎えに来て、早く帰省したいことを職員に伝え続けていた。言葉を重ねるごとに目が潤み、泣き顔になった。昼休み、会議を終えた担当が彼女を訪ね「そうだよねえ、ポッポに乗って、お家帰りたいんだよねえ」と言葉をかけた途端、彼女の涙はもう止められなかった。

こうしてKさんは36年間の人生で、生まれて初めて泣いた。

その日位を境にして、彼女の生活は一変した。チョキチョキを全くしない。コップもパッパッパもない。偏食が少なくなる。食欲が増す。職員と積極的な係わりを持つようとする。何から何までが彼女の新しい旅立ちだった。

原因が何か知りたかった僕らは、家庭に電話した。

「何か前回の帰省の時に変わった事ありませんでしたか？」

電話に出た母親が答えた。

「ええ、お父さんが初めてKちゃんをお風呂に入れるときに一緒に吊って行ってくれたんですよ」

チョキチョキばかりだったお父さんが、Kさんのために、お母さんを助けてくれた日、それがKさんの旅立ちの日だった。

【資料2】

平成11年度 冬 クラス新聞「とちんこ」

『一人前の気持ち』

K子さんは、目が見えない。未熟児網膜症だということから、生まれたときから、光と陰、そして音の世界だけで生きてきたということになる。

そんな彼女も、もう二十六才だ。

一日の大半を好きな音楽を聞き、時には体を前後に振って調子をとりながら、あるいは座り込み、好きな雑誌を耳元でペラペラ小刻みにめくりながら穏やかに毎日を過ごしている。

さすがに思春期は、大変だった。どことなく押し寄せるエネルギーに、自分自身が持ちこたえれずに、怒りと衝動が彼女を支配した。椅子や机が宙を飛び、それでも収まらぬ衝動は、彼女の頭を壁に向かわせた。そんな嵐のあとの平穏が僕らと彼女との人生の格闘の結果だった。

*

本年、十月中旬、彼女の不眠は、三日目を迎えていた。

光の刺激が乏しい視覚障害の方にとって、昼と夜ときちんと認識し、生活リズムを整えていくことは、至難のことである。逆に言えば、本人にとっては、不幸なことなのだが、一日くらいの不眠は、職員サイドにしてみれば、取るに足らないこととして、受け取られる可能性が高いのである。

しかし、このときは違った。一日目、二日目、三日目となるにしたがって、「ワホッーワホッー」の大声は、次第に高まり、夜勤の職員がいくら寄り添ってもその怒りは静まるどころではなかった。

いくつかの仮説が立てられ、対応が協議された。＜生理痛がいつもより激しいのではないのか＞と常用薬よりも鎮痛効果の高い薬を服用した。＜保護者の来園する行事が近づきそのことで心配なことがあるのか＞と、予定通り来園することを電話で保護者の方に直接本人に伝えて頂いた。しかし、いずれも失敗だった。

彼女の怒りや心配は全く違うところにあった。それは、今までの彼女に対する理解を越えたところにあった。十月の始めから、彼女の担任は体調を崩し約一カ月の予定で入院加療を続けていた。もちろんそのことは、クラスの職員集団は充分承知していたし、クラスのメンバーさんたちにもなんらかの形で情報は伝えられていたように思う。

しかし、K子さんには、直接、個人的に担任からの説明がなされていなかったのだ。

僕らは、彼女の気持ちをこう推察した。

「なぜ ワタシノタンニンハ コンナニナガイアイダ シュッキンシテコナイノ？ダレカ

キチント セツメイシテヨ。シンパイデ シンパイデ ヨルモネラレナイジャナイ。ワタシヲ オイタママ ヤメチャッタ ワケジャナイヨネ。セツメイガナイナンテ マッタクワタシヲ バカニシテイルワ。チテキショウガイシャダトオモッテバカニシナイデヨ。」

不眠の続いた三日目の夜、入院中の担任から、彼女に電話が入った。入院は一ヵ月の予定だということ、退職したわけじゃないこと入院して三週間もたった今日の日まで、全く連絡もしないで申しわけなかったこと、三日も寝ないで心配していた彼女に感謝とお詫びの涙の電話だった。

果たして、次の日から、K子さんは、安心してぐっすり眠ったのだった。

さらにこの話には、後日談があります。担任が入院加療を終え、予定通り、無事に十一月一日より通常勤務に復帰したその二日後にまた不眠と大声が始まったのです。今度は職員集団もぴんとききました。

「K子さん、何か怒っているんだよねえ」

彼女はパチンと手を叩き、その通りだと答えます。いつにないはっきりとした受け答えです。

「職員のこと？」

またパチンとイエスの答えが返ります。

K子さんの怒りの対象は明確でした。漠然としたイライラ感でも取り留めのない衝動でもないのです。

「担任の さんのこと？」

ここでもK子さんからしっかりとしたパチンが返ったのです。

さんが入院した一ヵ月間、寝ないで彼女の病状を心配した人が さんの回りの人間関係の中に何人いたでしょう。しかもK子さんの場合は三日間も眠れなかったのです。病院からの電話がなかったら、もっと眠れなかったかもしれませぬ。それほどK子さんは、

さんを頼りにし、自分との関係が切れてしまうのではないかと心配だったのです。

世界中で一番、K子が さんのことを心配していたのです。

通常勤務に復帰してきた日、担任は、K子さんのその心配や信頼に見合った挨拶やお礼ができていたのでしょうか？答えは<否>でした。次の日、休日を返上して出勤してきた担任は、元気になって退院できたこと、これから今まで通りきちんと働けること、本当に心配してくれてありがとうの三点をしっかりと彼女に伝え、K子さんの部屋を感謝の気持ちを含めて、きれいに掃除して帰りました。そして、その日からまたK子さんはぐっすり眠ることができたのです。これがK子さんの僕らが今まで知らなかった一人前の気持ちでした。

【資料3 - 1】

平成11年度 夏 クラス新聞「とちんこ」

『幸福のかたち』

A子さんは、学園祭を前にしたある日、服を脱ぎ続けました。職員が数えただけでも13回だということから、1時間に1回以上のハイペースだったのです。もちろん、A子さんの服脱ぎには理由があり、歴史もあります。そして、それは、A子さんが求める『幸福のかたち』と大いに関係しているのです。

僕らがA子さんと付き合い始めた2年前の冬、やっぱり服を脱ぐ彼女がいました。緑ヶ丘中学の生徒が訪ねて来たといっちは脱ぎ、施設見学の人 came 来たからといって服を脱ぎました。突然の出来事がある度に脱いでいたのですが、それは、「私、こんなこと聞いていないわよ。ちゃんと教えてよ。びっくりしちゃうじゃない。」とでも言っているかのようでした。そんなA子さんの気持ちを推察する僕らの対応はこうなります。

1つには、絵カードを使って、彼女に解りやすいように1日の日課の流れを事前に説明します。そして2つ目には、特に彼女が気にしていると思われる外来者の来園については、口頭で何回も予告をします。

さて、この方法でどうなったかということ、ちゃんと服脱ぎは、少なくなっていくわけです。きっと1日の見通しが立つようになってくるんですね。僕らもちょっと安心し、A子さんもちょっと穏やかな気分になっていたに違いありません。

さて、年が明けて、しばらくたったある日、また彼女の服脱ぎが頻繁に見られるようになりました。前段のような働きかけは続けているのですから、今度の服脱ぎには、きっと違う理由があるはずです。今度は解明のヒントを彼女がくれました。「ひーつけるのー」と何回も言うのです。最初は何を伝えようとしているのかが解らなかった職員にも、度重なる服脱ぎにぴんと来るものがありました。『どんど焼きに行くのイヤだよー』彼女はそう言い続けていたのです。 (明星学園のどんど焼きは、毎年1月15日です)ライターの火でも怖い彼女にとって、どんど焼きの火は想像を超える恐ろしさでしょう。

しかし、「A子さん、どんど焼き行かなくてもいいんだよ」との職員の声かけだけでは、服脱ぎは少なくなりません。どんど焼きだけでなく、今までの人生のあらゆる場面で、イヤなのに、心から本当にイヤなのに、無理矢理にやらされた苦い経験があるのでしょうか。なかなか僕らの言葉を信用してくれません。そこで彼女の部屋に「どんど焼きに行きません」と書いた紙を貼り、どんど焼き×と書いた紙を貼りました。これで少し安心してくれたのでしょうか。服脱ぎは少しづつ少なくなっていきました。

この2つの出来事を通じて、僕らにはA子さんのお心のあり方が少しづつ解ってきました。まず『イヤ』と思うことがあって、それが職員を中心とした回りの人間に伝わらないという状

況があると服を脱ぐという起こるということです。

A子さんには、発語があります。「交流会イヤなの」とか「どんど焼き行かないの」レベルの発語はしゃべろうと思えば可能なのです。しかし彼女はそうしません。服脱ぎという持って回ったような、しかも強硬手段で自分の思いを伝えようとします。そしてそれは、とても危険な賭けです。だって普通だったら「服を脱ぐ」という行為を叱られるだけで、彼女の本当の気持ちに気づくことは難しいからです。余計に自分が傷つくことになりかねないのです。〈叱られる〉という悲しさと〈わかってもらえなかった〉という二重の悲しみで。

とにかくこの時も、僕らの係わりは効を奏して服脱ぎは無くなりました。

それから1年、彼女の服脱ぎは、消えたかと思うと現れ、消えたかと思うとまた現れるというようなことを繰り返しています。

次の服脱ぎは、ある晩、30幾つものおやつの名前を一気に「たべたいのー」と言った次の日から始まりました。それは『ずーと私、いろんなおやつを自由に食べたかったんだよー』と言っているかのようなのでした。さっそくカレンダーに一日1つずつ彼女の希望のおやつを描き、約束どうり提供することで服脱ぎは無くなりました。

それが解決した頃、次の服脱ぎは担任の職員がA子さん以外のメンバーさんと係わっている姿を見ながら始まりました。『自分だけの先生じゃないの？私を一番に見てよ』これが彼女の本当の気持ちでした。

そして今回の一日13回の服脱ぎ。これは『学園祭の花火イヤだよ』という訴えだということが段々解ってきて、僕らの対応も決まりました。1年半前のどんど焼きの時と同じように「花火いきません」と書いて貼りました。しかし状況は変わらないのです。

『突然の出来事イヤなの』から『イヤって言ったら本当にやめてよ』へ、そして『いろんなおやつが自由に食べたいな』へ。それから『誰よりも自分のことを大切にしてくれよ』というお願いに。彼女の求める幸福のかたちは、次々と質の高いものになっていきます。

そして今回の花火イヤイヤ事件、お母さんと「絶対に花火には行かない」と電話で約束ができたことでぴったりと止まりました。

本当の気持ち？それは『私の大好きなおかあさん、私のイヤなこと、ちゃんと解っていてよ』かな。

【資料3 - 2】

平成11年度 春 クラス新聞「とちんこ」

『幸福のかたち パート 』

『服を脱ぐ』という行動を通しての職員とのやりとりの中で、自分の求める幸福のかたちをなにがなんでも手に入れようとしたA子さんの物語は、今年の学園祭を前にしての母親とのやりとりの中で一旦は収束を見せたかのような静けさを取り戻していた。

「今日一日の予定くらいちゃんと私の解る方法で前もって教えてよ。」から始まったA子さんの幸福を求める旅は、1年半の期間を要して「私はどんどん焼きの火が本当に恐いの、私が行きたくないと言ったら絶対に連れて行ったり、誘ったりしないで」から「私には食べたいおやつが一杯あるの、自由に食べたいわ」へ、そして、「担当の先生、私を一番に見てよ」へ、そして今年の学園祭を前にして「私は、花火が恐いんです。それを本当に解って欲しいのは私の一番大好きなお母さんです。」へたどりついた。

A子さんは、とても伝えたい何か伝えられないときに、あるいは伝わらないときに必ず服を脱いだ。わがままを言いたい気持ち、ちょっと甘えたい気持ち、さびしい気持ち、言うことを聞きたくない気持ち、それが伝わらないときに脱いだ。

例えば、そんなときに「服を脱いではいけません」という対応はいったいどんな意味を持つのだろうか。それは「あなたは素直に自分の気持ちを伝えようとしてはいけません」ということを実は伝えているのに過ぎない。

したがって僕らは、そんなときに決して「服を脱いではいけない」とは言わない。「どうしたの？何かお心の奥にしまってあることがあるんじゃない？」というわけだ。

僕らは信じていた。僕らが彼女の「服を脱ぐ」行動に目を奪われることなく一生懸命に彼女の本当の気持ちに耳を傾き続け、ささやかな実践ではあるけれど確実に彼女の想いを具現化する努力を積み重ねていけば、「服を脱いではいけません」とひとことも彼女に伝えることをしなくても、いつかきっとA子さんは「服を脱ぐ」という方法を用いることなしに本当の気持ちを伝えることができるようになるだろうと。

7月の学園祭のあとA子さんの『服脱ぎ』は激減した。それを僕らは「本当に火が怖いこと」をお母さんに伝えられたことで、ある一定の到達点にたどり着いたのではないかと考え安堵していた。

まさかそんなに花火が恐いと思っていない母親に、あるいは少し嫌がる素振りを見せてはいても母親と一緒に花火を見学することができた娘に、少しでも花火の綺麗さを、夏の夜の楽しさを経験させようと、良かれと思って長い間努力してきた母親に「花火には絶対行きたくない」と伝えることは、とてつもない勇気のいることであることが想像できたからだ。

しかし、彼女の幸福希求の旅は、終わってはいなかった。A子さんのお付き合いが始まっ

て二年が過ぎようとしていた12月、再び彼女の頻繁な『服脱ぎ』が始まった。「クリスマス会にお母さん来るの?」「お正月は家に帰れるの?」「クリスマス会のローソクの火が怖いこと、ちゃんとお母さん知っていてくれる?」この二年間で蓄えられた彼女の本当の気持ちリストに沿って手立てが打たれた。〈母親と電話をする〉、〈クリスマス会、帰省日、帰園日をカレンダーに表示する〉、〈重ねて確認したいことがあると「おふろのじゅんぴするのー」という発語でそれを要求する彼女に何回となく「日はお母さん来るよ」と答える〉。しかし、これらの手立ての全てが無効だった。全くA子さんの『服脱ぎ』は減らないのだ。A子さんの本当の気持ちは、僕らの届かないところにあるのだ。

それでも僕らは、母親の言葉に頼った。何回かの帰省の確認の電話をかけた。そしてそんなあるとき突然解明のヒントが訪れたのだった。

A子さんが母親との電話を切った後、そのまま流しに向かい、そこで服を脱いで水に浸けたのだった。ここまでくれば明らかに原因は直前の母親との電話である。

「どんな電話だった?特に変わったことお母さん話していなかった?」電話口に一緒にいた職員が答える。「特にいつもと変わらないように思いますけれど……。頑張っただけとか、先生の言うことをちゃんと聞くんだよとか、服を脱いじゃいけないよとか……。」

A子さんは、施設という場所で頑張っていないだろうか?職員の言うことを聞こうとしていないのだろうか?人前で服を脱ぐことはいけないことだと知らないのだろうか?答えは否である。彼女は淋しさをこらえて良く頑張っているし、十分に職員の言うことを聞いている。そして、できるなら服を脱がないようにしたいと思っているに違いない。そんな気持ちに気付いた僕らは、その後A子さんにこう伝えた。

「お母さんいろいろうさよねえ、こんなにA子さん頑張っているのにねえ、ちっともわかってないよなお母さん。いろいろ言うなよって今度お母さんに頼んでみようよ。きっとお母さんも解ってくれると思うよ」と。

母親にしてみれば、頑張っただけの一言も、先生の言うことを聞くんだよや服を脱いじゃいけないよの注意事も決して悪意じゃない。娘がかわいいがための発言だ。しかし、今のA子さんには、その全てがおこごとに聞こえるのである。

7月の「花火行きたくない」は、ただ花火の恐さを母親に伝えたかっただけではないのだろう。〈花火に行きたい母親〉と〈花火に行きたくない自分〉、この別々の主体としての人生の在り方に、それは母親が期待しているA子像とA子自身が生きようとしている人生との違いにA子自身が気付き始めていることを、本当は伝えたかっただけじゃないだろうか。

母親には、電話を切った後のA子さんの状況を説明しながら僕らの考えを伝えた。そして、A子さんに「今電話でお母さんに伝えたよ。A子さんが十分に学園で頑張っていること、職員にとっても協力してくれていること、たくさんのことを我慢してくれていること、みんなみんな伝えたよ。お母さん、わかったって言ってたよ。もう小言みたいなことは言わないって言ってたよ。でもA子さんもお母さんのことわかってあげてね。お母さんいじわるで、A子さんの

こと嫌いであんなこと言ったんじゃないっていうことをね。」

A子さんの服脱ぎは、これで無くなった。

それから4ヶ月が過ぎようとしている今、ほとんど彼女の『服脱ぎ』見られない。

今彼女は、伝えたい何かがあるとき、職員の側に来てペタンと座り込む。そして、少し微笑を浮かべながら、ちらちらと職員の顔をうかがうようにして「おふろのじゅんびするー」とのたまう。

A子さんの幸福のかたちを求める旅はここでちょっと小休止だ。

僕らもここでちょっとお休みを頂けたらなあなんて思っている。

【資料4】

平成14年度 夏 クラス新聞「とちんこ」

『至福のとき、そんな夜は眠れない』

Tさん。41才。4年前の春、ボランティアの女子高校生に車椅子を押されて、レストランへ出かけ、チョコレートパフェをひとくちひとくち、スプーンで口へ運んでもらって食べてきたその日、嬉しさのあまり一睡もできなかったという前歴を持つ。

聞けばパフェも生まれて初めてならば、若い女の子と出かけたのも生まれて初めてだったらしい。その晩彼は、やたらニコニコと表情を崩し、十分には動かない手を胸の前で合わせ、パチパチと鳴らし、「パッパッパー」と何かをしゃべるように繰り返し声を出し続けながら夜明けを迎えている。もちろんその晩をともにした職員は、「寝ろ」の一言もなく、さぞ嬉しかっただろうその外出を思い出しながらいつまでも眠ることができない彼の幸せの表情をかけがいのないものだと感じ受け止め続けた。

* * * * *

Tさんのてんかん発作は厳しい。十代まで歩けたTさんが、次第に歩けなくなって、車椅子生活になり、次に上肢の運動機能にも厳しい障害が現れたのもまんざらこのてんかん発作と無関係じゃない。

* * * * *

遡ることその半年前、僕らは大きな過ちを犯している。

そう、5年前の冬、Tさんと初めて出会ったその頃、彼とコミュニケーションをとろうとするその努力は限りなく無駄に思えた僕らだったのだ。彼には怒りも喜びも少なく、具体的な要求や希望もなく、ただ穏やかに、てんかん発作もなく健康で過ごすことができさえすれば、それで半分以上は人生の合格点だと考えたのである。

しかし、彼の反撃（これはおそらく僕らのお仕着せの幸福感への反発なのだが）はここから始まった。

彼はまず、食事の用意が遅いと怒って見せた。不自由なコブシでテーブルをどンドン叩いたのだった。<ごめん、ごめん、何にも言わないからって気がつかなくてごめんね。さっきからずっと今か今かと待っていたんだよね。本当にごめんね>彼の怒りはこれで収まった。

しばらくして、次に彼は、短大の実習生が隣のK子さんばかりを支援してちっとも自分を支援しないのに怒って、テーブルの上の食器を腕で払い落とした。「そこまでするー？」僕らは彼の秘められた発信力の高さを、コミュニケートしようとするエネルギーの高さをやっと感じ始めていった。

ある日、担任が彼の大好きな大福を買ってきた。食事の後にと、食堂のロッカーにしまい込み、さあ食事と介助し始めたその時、口の中に入れたその食事を彼は全部吐き出したのである。

何回入れ直しても、メニューを変えても食事は吐き出されたのである。はたしてTさんの視線の先は大福が入れられたロッカーだった。「食事の後に大福」ではなく「大福の後に食事」、これが彼の求めた幸福の形だった。

一年が過ぎ、二年が過ぎ…。

長期の帰省が終って帰園したその日、母親はこう言い残して学園を後にした。

「次にお家に帰る日が決まったらまた電話するね」と。

しかし、その電話は、一週間たってもかかってこなかった。ちょうど一週間目のその日、彼を大きなてんかん発作が襲った。本当に久しぶりの大発作だった。職員集団も保護者の方も<かけられるべき電話>についていたって無頓着だった。Tさんは誰からの支援を受けられないまま、ただ一人電話のかかってくるのを信じて期待していたのであった。一日に何回もの発作が襲った。家庭にやっと電話が通じて、約束していた電話を忘れていたことを謝罪し、次の帰省日が決まったことでこのてんかん発作は止まった。彼のてんかん発作は、彼との約束を軽んじた周りの人間全てに対しての怒りの表現だった。

そして、先日。5年目の夏。

Tさんは、父親と母親と連れ立って近隣の大スーパーに買物に出かけた。もう選択など手馴れたものだ。ニコッと笑えばYES、むっつりして無表情ならNOである。

「おい、T。おまえ刺身大好きだろう。これ買っていくか？今日夕飯に食べようじゃないか。うん、どうだ？」

ニコッと笑顔が返る。

「それじゃ、これ車椅子のおまえの膝の上に置くぞ。ちゃんと持ってるよ」

「さて次だな。どこを見てるんだ？なんだ、ラーメンか。うん喜多方ラーメンがいいのか？味がわかるんだな。これは、じゃあ明日食べるか。これもおまえの膝の上に置くぞ」

またしてもTさんからニコッと笑顔が返る。

車椅子のTさん。膝の上に父親や母親の支援をかりて選択した刺身に喜多方ラーメン。

人がごった返す大スーパーの食品売場。そんな中での四十歳の息子と七十歳の父親と母親との暖かなコミュニケーション。Tさんの気持ちをまず第一に考え寄り添うところところ。Tさんが嬉しくないはずがない。

帰宅してさあ夕飯だ。

「Tが買ってきた刺身だぞ」

「ニコーツ」

「おまえが買ってくれたんだよな、この刺身」

「ニコーツ」笑顔が止まらない。

はたしてこの晩、Tさんは一睡もしなかった。
「パッパッパー」
嬉しそうな声がいつまでも響いていたそう。

【資料5】

平成13年度 冬 クラス新聞「とちんこ」

『私さえ我慢すればの幸せ』

「君は、私が仕事をしている事務室のとなり、宿直室に頻繁に出入りをする。そこには彼の大好きなビデオテープ（水戸黄門の録画したものとかNHKおかあさんといっしょとか）といつでも使用できるビデオデッキがあるからなのだが、誰もいない宿直室に入って、なぜか彼は落ち着けない。

「君、好きなビデオ見ていいんだよ。選んでごらん、選べるよね」の声かけにも大声で「アワワワ！」を繰り返し、ビデオデッキを指差すばかりである。

実は、この宿直室、小ぢんまりとした和室のせいもあって、家庭的な雰囲気が出て、人気が高いのである。君くん以外にも、MさんやYさんがよく訪れる。そして大概自分のお好みのビデオを見ている。Mさんなら帰省での家庭の様子を撮影した<お家ビデオ>だし、Yさんなら彼女の父親がちんどん屋を演じて大活躍した<収穫祭ビデオ>だ。

「君、どれを見ようか？」

なかなか決まらない。とんだり、跳ねたり、部屋の出入りを繰り返したり...、そして結局選んだのは<収穫祭ビデオ>だ。

「え！これでいいの？水戸黄門じゃないの？」君の答えは明快なYES、「アウ」である。

ところが、流れ始めたビデオを10秒も見ないうちに君は宿直室を出て行こうとする。君の身体を止めようとする私。振り払って出て行こうとする彼。数秒間のやりとりが続く。君の顔が苦渋で一杯になる。

「僕の本当の気持ちわかってよ！」彼は表情で身体でそう訴えている。.....そうか！.....。

「君。本当は水戸黄門のビデオ見たいんだよね。でもいつもこの部屋に来ると、MさんやYさんがいて君の見たいビデオと違うビデオを見ているんだよね。<収穫祭のビデオ>とか<お家ビデオ>とか。」君、待っててねっていつも言われちゃうんだよね。「そうだよね、君はこの部屋では自分の好きなビデオ見ちゃいけないんだって思っちゃったのかな？」自分の好きなビデオかけちゃうとMさんやYさんにわるいって思っているんだよね。迷惑かかるって」

君の身体がやっと緩む。

「この部屋はみんなの部屋だよ。皆が好きなビデオが見れるんだよ。今日はMさんもYさんもいない。君の本当に好きなビデオを見ようよ。」

君は、これで安心できたのか、ずっと水戸黄門のビデオを選ぶとデッキにテープを入れ、宿直室の出入口の戸をおもむるに閉めてどかっと腰を下ろした。

Yさんは、その日、担任の職員と一緒に出かけた外食から戻ったその後から目を硬く閉じ続け、大きく身体を前後に揺すり続けていた。

よく原因が解らぬまま、したがって彼女の状態も改善しないままもう一週間が過ぎていた。睡眠時間も短くなっていた。

「外食どんなだった？」

「前回オムレツで大変喜んだものですから、そんなに喜ぶんだったらと、今回もオムレツと違って、Yさんに聞いたら、ウンとうなづいてくれたものですから……。でもオムレツは食べてくれなかったんです。それじゃあと私の牡蠣フライをとあげたんですけど、最初口に入れて、その後全部出してしまいました。それじゃあと今度は店を替わって、うどんにしたら、こちらは全部食べてくれました。」

Yさんが目を閉じるときは、物事の解決を自分一人でやろうとしている時だということをお二人は今までの経験から知っている。外食のことで言えば、その気持ちは<せっかく外食に連れて行ってきているんだから、いろいろわがまを言っちゃいけない。これ以上の迷惑をかけちゃいけない。>ということになる。これを前提に遅ればせながら、Yさんと話しが始まった。

「Yさん、外食に出かけた時に、何か思うようにいかなかったことがあったかな？」

Yさんは、<もういいわよ、一人にしておいてよ、一週間も放っておいて>とでも言うように、余計に目を硬く閉じ、手を振り払って離れて行く。そこで今度は膝の上に座らせて…。

「Yさんさあ、いまYさんのお心の中にあること、とっても言いにくいことなんだよね。でもさあ、昔、Yさんと約束したよね。やってもらいたいこと、したいこと何でも言っていていいよって。これ以上言っちゃいけないって思っているかもしれないけれど、ぜひ教えて欲しいなあ。全然心配いらないよ。迷惑だなんてこれっぽっちも思わないよ。」「せっかく頼んでくれたオムレツを食べなくて、担任に嫌われたと思ったかな？お店を二つも行かせちゃって迷惑かけたって思ってるんでしょ。もうそんなわがまを言う人は連れて行ってもらえないって心配しているのかな？」「全然そんな心配いらないよ。おかげでYさんの思っていることがよくわかったって嬉しく思っているよ。」「だいたいほら、本当にオムレツとかうどんとか食べたかったの？違うんじゃない？」「本当はいなり寿司を食べたかったんじゃないの？」話は聞いているが、ほとんど表情が動かないYさん。

次の日、これを受けて担任との話。

「Yさんの本当の気持ちわかんなくてごめんなさい。オムレツもうどんもウンと返事してくれたから、いいと思って頼んだんだけど、ちょっと私の押し付けだった？きっとそうだったんだよね。ごめんなさいね。もっとゆっくり、じっくり聞いてあげればよかったんだよね。」「やっぱりいなり寿司が食べたかった？」

Yさんがウンとうなづく。

「そうなのかあ、ごめんね、気がつかずに。今度いっしょに食べようねえ。楽しみにしているよ。」「オムレツ食べなかったことも、お店二つ行ったことも全然迷惑じゃなかったよ。Yさ

んがそうやって教えてくれたから、Ｙさんのことがまた少し余分にわかるようになったよ。」「ありがとう。」

次の日、Ｙさんの目は開いた。

私さえ我慢すれば、みんなが幸せになれる。そんな幸せは嘘っぱちだ。

幸せというのは、みんなが少しずつの我慢をして、みんながほどほどの幸せをつかんでいく、これが本当の幸せだ。

僕たちも、そしてＪ君も、Ｙさんも、それをするために生まれてきている。

【資料6】

平成13年度 夏 『発達教育リレーエッセイ』

『僕らのお心主義』

知的障害者入所施設というところで、重い知的障害のある方々との係わりが始まって、いつしか10数年の月日が流れようとしています。その間、私の目の前には、いつでも40名の入所利用者の方々がいて、「宮下さんさ、もうちょっと勉強しないと、知的障害のある人の本当の気持ちなんかわかりゃしないよ。まあ、そうは言ってもそんなことは一朝一夕でできることでもないから、長い目で見てるけどね。でも、そんな私たちのやさしい気持ちに甘えて、さぼったりしたら承知しないよ。誰だってみんな幸福になりたいんだから。」と言われ続けてきたような気がします。

そしていま、こんなやりとりの中に僕らの実践があります。この実践の方法を、いつでもまず第一に利用者の方々の気持ちを大切にするという意味で、僕らは“お心主義”と呼んでいます。(S:スタッフ M:宮下)

S「昨日、Bさんの保護者の面会があったときに、Aさん大きなてんかん発作があったんですけど.....。何か怒っているような表情で、昨晚は一睡もしていません。」

M「あれえ、帰省の日が決まっていなかったっけ。この間保護者の方から電話あったよねえ。」

S「ええ、忙しくて予定が立たないのでまた電話するという話でした。」

M「そうなの、それからもう一週間もたっているじゃない。そりゃAさんだって怒るよ。さっそく電話して、日程を決めてくださいね。」

僕らはいま、どんなに障害の重い方でも直接電話に出てもらうことを原則にしています。Aさんは、職員の支援を受けながら、ニコニコして電話をし、その後とても穏やかな表情になり、その次の晩はぐっすり寝ることができました。僕らは、彼のてんかん発作を、また電話をするといって一週間もしてこなかった保護者の姿勢やそんな状態を放置し支援しなかった職員の姿勢に対する怒りの発信であると考えています。Aさんは「早く帰省の日を決めてくれよ、なにやってるんだ、お母さんや職員は!」と言いたかったのでしょう。

S「Cさんと外食に行ってきました。楽しかったはずなんですけれど、帰ってきてからすごく怒っているんです。なにを言っても的外れみたいで、どうしたらいいのかわからないんですけど...。」

M「何を食べてきたの?」

S「ラーメンです。Cさんの大好物ですから。おいしそうに良く食べていました。」

M「ちゃんと何を食べようかって事前に相談して出かけました?」

S「いえ、前もそのラーメン屋で食べてとてもご機嫌だったものですから、またそこでいいと

思って、特に相談していません。」

M「きっとそれですね。相談しないで出かけてしまったことをしっかり謝って、これからは必ず相談してから出かけることを約束してください。」

Cさんの怒りは、職員が謝った途端、ぴたりと止まりました。どんなに障害の重い方にとっても主体的な生き方を保障することは何をおいても重要なことです。Cさんは確かにラーメンが大好きです。しかし、だからと言って、相談もせずに出かけることは主体性の無視につながるのです。Cさんを怒らせているのは職員の安易な対応であり、Cさんはきっと「ちゃんと僕を一人前として扱ってよ。外食のメニューなんて相談してくれてあたりまえでしょ」と言いたかったに違いありません。

S「あのう、このところDさんの排便失敗が続いているんですけど、パンツの中に失敗して、そのままビデオを見ていることが多いんですが、原因が良くわかりません。」

M「他に変わったことはないんですか？」

S「ええ、他の利用者の方のおもちゃをよく窓の外に放ってしまいます。Eさんとか、Fさんとかのおもちゃです。」

M「何か共通な点はないんですか？」

S「二人とも最近4駆の大きな車のおもちゃを買ってきています。」

M「その辺ですかね。それでは本人に、今のあなたの窓の外におもちゃを放る行動は、4駆の車のおもちゃが欲しいということに感じられますと伝え、さっそく同じようなものを購入してみてください。」

その後、2台の車のおもちゃが購入されました。大便の失敗はぴたりと止まり、窓の外へのおもちゃの放り投げも激減しました。こんなとき、僕らはいつでも強い立場のものと弱い立場にいるものとのコミュニケーションを考えます。施設の中で言えば、明らかに職員は強者であり、その施設を利用している知的障害のある方々は弱者ということになります（実は親子もそういう関係ですが）。僕らはいくら注意をしても、<良かれと思って押し付ける>立場と<どうせ言っても聞いてもらえないからと我慢する側>という関係に陥りやすいのです。<どうせ言っても聞いてもらえない>と思っている方の発信は、どうしても真っ直ぐというわけにはいきません。Dさんのように、排泄の失敗だったり、反社会的な行動だったりするのです。

仕事を重ねるにつれ、僕らの人生の課題も知的障害と言われる人々の人生の課題もちっとも変わらないことに気がつき始めました。僕らと重い知的障害がある方々とはいっしょの道歩いているのです。そんなことに想いを巡らすとき、いつでも考えることは<大人になる>ということはどういうことなんだろうということです。またそれは同時に<自立>や<自律>のことを考えることにもなります。<自立>を<自分の人生は自分で決めながら自分らしく生きること>と考えたり、<自律>を<自分の決めた目標に向かって主体的に努力していく姿>と考えていくと、

僕らと重い知的障害がある方々との地平はつながったところにあります。<大人になる>ことだって、<じょうずに折り合いをつけることができるようになること>とか<たくさんの人とじょうずにつき合えるようになること>とか<たくさんの人を好きになるということ>と考えていくと、やっぱり僕らと重い知的障害がある方々との地平は同じところでつながってきそうです。

そして、さらに僕らは同じ道を歩いていることがわかります。<大人になる>ことや<自立>や<自律>のためのエネルギーは、自分を支えてくれている人間関係から注ぎ込まれるポジティブメッセージに他ならないからです。

この仕事のあまりにも大きな重さに、毎日、弱音を吐きたい自分がいます。くじけてしまいそうな自分がいます。しかし、この道は自分が選んだ道です。もの言えぬ重い知的障害者の方々の本当の気持ちをわかりたいと決めたのも自分です。彼らに負けぬような<じりつ>の道を歩みながら、<大人になる>道を探していきたいと思うこの頃です。

【資料7】

平成9年度 春 クラス新聞「とちんこ」

『お心はメロディーにのせて』

この3月18日、N君と久しぶりの「抱っこ法」があった。

こんなに「抱っこ法」の期間があいたことは、毎日のように手首を噛み、頭突きを繰り返し、足を踏み鳴らしていた何年前には、なかったことだ。その頃は、この自傷行動をどうにか減らし、彼をイライラの悪循環から救い出すためにと時間を無理に作り出しては毎月のように「抱っこ法」をしていたのだから。

いわゆる「問題行動」が、ないことが「抱っこ法」の必要性を減じさせていた。このところのN君は、ヘッドギアや手首のプロテクターの使用を拒否し、おむつの使用さえも拒否するようになっていた。その姿を僕たちは「お兄ちゃん」に成り行く彼の前向きな精神の現れとして感じ、受け止め続けていた。

今回の抱っこは、長い間彼の担任だったM職員の定年退職のこともあり、設定されたものだった。

抱っこが始まる。満面の笑みだ。N君の幸福感が部屋の空気いっぱい広がる。参加している職員の心の中まで浸透する。「僕、みんなのこと好きになったんだ」そんな風に語っているかのように感じる。流れるハミングは、やさしく歌われるひな祭りのメロディー。今日はたのしいひなまつり 彼の気持ちが、ぴったりと表現されている。

そして、この3月をもって退職されるM職員の話になる。

「ありがとうね、N君。これで、お別れだけどまた会いに来るからね」と涙ながらの話が続く。そして、それに対するN君の返答が、またやさしいハミングでメロディーにのせてやってくる。「デーデー、デー」表彰式に使われるあの曲だ。<そう、M先生は金メダルだよ。いっぱい頑張ってきたもの> N君の気持ちがメロディに乗せて、ピタリピタリとこちらに届く。

僕らとN君との間には言語というコミュニケーション回路のかわりに「歌」というコミュニケーション回路が生まれていた。

「N君、最後に今の気持ちを一曲歌ってよ」宮下の願いに応えて流れてきた彼のお返事のメロディーは、「デーデー、デーデ」……。 兎追いしかの山 ……。

「そうだよ。やっぱり故郷は良いよね」喋れないN君の精一杯の気持ちだった。

【資料8】

平成13年度 春 クラス新聞「とちんこ」

『 和解への道筋 』

Sさんは生真面目な方だ。今から十年以上も前のことだが、その童顔の真ん中のクリックリッとした瞳が何かを語ろうとすると、いつでもじっとこちらを見据えていたのを思い出す。そしてそれは今になって解ることなのだが、誰に教わったのでもない彼女の人に対する誠実さがそうさせていたのだろうことに気付くことができる。

彼女はいつでも潔癖だった。服をたたむこと、ほうきで掃くこと、雑巾がけをすること、例えば運動会のリズム体操の練習、そして小さなラッキョウの粒に紫蘇の葉を巻く受託作業まで。何から何まで、朝から晩まで一生懸命だった。

そんな彼女の頑張る姿は応援こそすれ、誰も彼女の人生にやがて爆発が来るとは考えてもみなかった。声をかければ必ず返ってくる「こんにちは」の元気な声は、いつでも僕らを励まし続けていたのだから。

小学生高学年の年令で入所して二十年、そう代わり映えしない施設生活とは別のところで確実に状況は変化しつつあった。

Sさんの家庭は二十年を経て、新しいライフステージを迎えつつあった。最愛の弟さんの結婚とお嫁さんとの同居、そして姪子さんの出産と続く一連の流れはSさんの母を姑に変え、祖母に変えた。Sさんは小さい頃から、この姉想いの弟さんに支えられてきたのだという。そんな弟さんの目がまずSさんから離れ義姉へ向かい、そしてお孫さんが生まれることにより母の目が、そして父の目がSさん以外の人間に注がれることになった。

Sさんの生真面目さは、頑なな一生懸命さは、そして過剰な潔癖さはいったいなんだったのだろう。それは、彼女を支えてくれた父や母、そして弟さんの期待を一身に受け、ならねばならない理想像を誰に言われたわけでもない、けなげにも自分の目標に掲げ、<愚痴をこぼしちゃいけない><弱音を吐いちゃいけない><みんなに迷惑をかけちゃいけない><ルールはきちんと守らなくてはならない><人の悪口を言っちゃいけない>と無意識裡に努力している姿だったんだろうか。

感受性の強いお心の持ち主ほど、相手の期待を知らず知らずのうちに受け止めて自分の実力以上に一生懸命生きようとしてしまうものだ。

しかし、彼女の誰かの期待に応えようとし続けたお心は、二十年を経て疲労困憊だったのだろう。さらに、期待に応えようとするその目標を失って、この新しいライフステージの変化についていくことができなくなっていた。

疲れ果てたお心は、こうして爆発した。

クリクリッとした瞳は閉じられ、明るさや素直さは、鬱と拒否にとって代わられた。

* * * * *

それからこの春で、もう四年の月日が流れようとしている。

一年目、一日の多くの時間をパジャマ姿のまま過ごす彼女に、僕らはこう声をかけた。「ずっと頑張ってきたんだね、ここいらで少し休もうか。ここでは、一日寝ていても誰も起きろなんていわないよ。働けとも言わない。Sさんの好きなように暮らしていいんだよ。」と。

そして「バカ!」「クライダ!」「アッチヘイケ!」と罵声が響いたときには、急いで駆け寄り、抱きしめながら「Sさんの言いたかったこと気がつかなくてごめんね。Sさんも　さんと同じことをしてもらいたかったんだよね。言わないからって気がつかなくてごめんね」と。

ある晩、担任の職員は彼女の部屋で一時間以上も続く彼女の泣き声と罵声に言い訳もできず身動きさえできなかった。「　　なんて大嫌いだ」担任を呼び捨てにする大声が館内中に響き渡った。それでも正当性は彼女側にあった。約束を破ったのは職員側だったから。

彼女のやり直しの人生は、言うまでもない「自分は自分の決めた道を歩く」という主体性回復への道筋だった。

* * * * *

そんなこんな三年目の秋、彼女は外出で『たい焼き』を買って帰った。それを僕らは心から喜んだ。何故って彼女の今までの買い物は、例えばスカーフ、サンダル、人形にちょっとかわいめな指輪など、つまりどこの女の子でも買いそうな、期待されている買い物の範疇を抜け出せていなかったから。『たいやき』はちょっと太めなSさんにとって、あるいは太ることに神経質になっている母親に対して、ちょっと勇気がいる買い物だったから。僕らはその行為を「ちっちゃな非行」と喜んだのだ。彼女はその晩のうちに全部の『たい焼き』をたいらげた。

次の外出ではケーキ、そして次はおはぎ、そして次は今川焼きというように彼女のちっちゃな非行は続いた。

そしてこの冬、買いなれたショッピングセンターの中をいつものように黙って歩き回り、買いたいなあと思うものの前で立ち止まっては買い物を続けた彼女が最後にたどり着いた場所は花屋さんの前だった。

僕らはこのところ感付いていた。たった月二回の職員との買い物外出であるけれど、ちょっと今までとはショッピングセンターでの歩き回る方向が違うことを。どうも年配の方々の衣料のコーナーが気になるのだ。彼女には伝えはしなかったのだが<お父さんかお母さんに何かプレゼントしたいのかもしれないね>と。

花屋さんの前で職員がこう聞いた。

「もうすぐお父さんの誕生日だね、お花買うの?」

「大丈夫、お父さん、Sさんからのプレゼントだったらなんでも喜んでくれると思うな」

もうSさんの目は涙でいっぱいだった。

思えば、週末帰省にと迎えにきた両親に「ばか」「でていけ」と叫んだ夜。辛かったのは、両親

ばかりではない。一番心を痛めていたのは、Sさんではなかったのか。

頭髪を抜き続けた三年目の冬、彼女の想いの伝わらなさに僕らも心を痛めたが、一番辛かったのは自分を責め続けていたSさんではなかったのか。

お孫さんを可愛がる母親を恨んだこともあっただろう。

結婚し幸せそうにしている弟さんを妬んだこともあっただろう。

その一つ一つが今は思い出だ。

Sさんは、花束の準備ができるまで、ちょうど店外に広がる雪景色を眺めていた。目にはこぼれんばかりにみるみる涙がたまった。その涙は、「ありがとう、お父さん、ありがとう、お母さん、こんなに大変な私だけどいつまでも宜しくお願いします。おかげで最近だんだん元気です」とでも言っているようだった。

明日の帰省日、今度はお母さんとSさんは花束を持って帰る。

【資料9】

平成8年度 春 クラス新聞「とちんこ」

『本当の気持ち』

宮下家の次男坊N、ただ今4才と6ヵ月。小学校1年生の超内弁慶長男Tと暴れん坊將軍の異名をとる末娘K1才6ヵ月の間に挟まれて、苦悩の毎日を過ごす。

* * *

「ナオ、今日の夕飯何にする？」

「カレーがいいな」

「だめ、いつも同じでしょ」

「じゃあ、ラーメン」

「それもだめ。お昼に食べたばっかし」

「じゃあ、お菓子！」

* * *

こんな楽天家の次男坊Nにも、去年の夏頃、誰にも言えぬ寂しさが訪れた。

兆候は、すぐに見て取れた。あれほど完全に自立していた排便が突然、便所で、できなくなったのである。来る日も、来る日も、部屋の隅、食堂のテーブルの下で、座り込んだままパンツの中へ、『うんこ』をしてしまう日が続いた。

子どもは、誰でもそうなのだが、心の中に<お兄ちゃん>になりたい気持ちと、<赤ちゃん>になりたい気持ちとが同居している。特に、上と下とに挟まれた、真ん中のNちゃんには、その気持ちが、とても強い。ある時には<お兄ちゃん>気分であるし、また、ある時には<赤ちゃん>気分というように、目まぐるしく激しく変わる。

『僕は、お兄ちゃんだから、箸を使って、上手に食べれるんだ』と言ったかと思うと、『お父ちゃんの上で食べたいな』というような具合の、調子の良さである。

そして、次男坊Nにとっては、<お兄ちゃん>になることは、長男Tへの憧れであり、<赤ちゃん>になることは、末娘Kへの羨望であった。

ウンコパンツは、紛れもない、末娘Kとの愛情獲得競争に敗れ、戦いに疲れたナオの姿だった。

その頃、末娘Kは、次男坊Nの持たぬ、つぶらな瞳と満面の笑み、そして、女の子ゆえの柔軟な対人関係とで、大人の注意を十分にひく存在になっていた。母親の治療的接近が始まった。

朝食が終わると、すぐに、お便所へ連れていく。お便所には、何冊もの絵本が置いてあり、Nはその日のお気に入りの本を選んで、母親に読んでもらうことができる。

最初のうちは、お便所に出ることは、まれだった。失敗のほうがるかに多いと言っていい。それでも、毎日のように母親の便所図書館は続いた。夏が過ぎ、秋も過ぎた頃失敗の回数は、めっきり減った。そして、新しい年を迎え、この2月某日。次男坊N、新しい旅立ちの日。

* * *

「おかあちゃん、うんこ行くよ」

「ワァ！ナオちゃん、一人でうんこへ行けるんだ。えらいねえ。お兄ちゃんだねえ」

「あたりまえじゃんうんこは、ちゃんと言ってから行くんだよ」

* * *

昨日まで、渋々、うんこへ行っていた人間かと思えぬ発言があつて、半年以上に渡ったウンコパンツ事件に、ピリオドが打たれた。

次男坊Nは、長男をTと呼び捨てにして、決して、お兄ちゃんとは呼ばない。そして、末娘Kに対してもK子ちゃんなどとやさしく話しかけはしない。もともと独立心の強い彼である。その彼にして、この試練である。いかに、愛情を獲得することは、大変なことなのか？

2月になって、次男坊Nは長男Tと同じようにサッカーボールを追って走り回ることができるようになった。そして、Kとは、上になったり下になったりしながらも、楽しく絡み合うようにして遊べるようになった。彼は、長男Tへの憧れや末娘Kへの羨望を自分のものとして、手に入れたのだ。

* * *

その間、母親も父親も、保育園の先生も誰も、次男坊Nに対してウンコをお便所ですることについて長々とお説教をしたものはいない。もちろん、失敗の度に、叱ったわけでもない。ただ、再び自分でできるようになる日が来ることを信じて労を惜しまなかつただけだ。

朝の忙しい時間に、なだめすかして、お便所まで連れていき、時には、3冊にも4冊にもなる絵本を希望通り読み聴かせ、失敗のウンコパンツを黙々と洗濯しただけだ。

人間とは、そういうものだ。

たとえ、つまずいても、きちんと愛情をそそぎ込まれさえすれば、勝手に卒業していく。

つまずいている時、本当に助けてもらいたいと思っていることに、きちんと、こちら側が気付くことができさえすればそれでいいのだ。

次男坊Nは、お説教してもらいたかったわけじゃないし、もちろん叱られたかったわけじゃない。ちょっと末娘Kと同じように手をかけてもらいたかっただけだ。

* * *

僕らの目の前には、本当に助けてもらいたいことを、上手に伝えられない何人もの人がいる。僕らは、その人たちの手を何本つかむことができるのだろうか？

【資料 10】

平成 10 年度 夏 クラス新聞「とちんこ」

『わかっちゃいるけどやめられない』

「わかっちゃいるけどやめられない」かの植木等が唄うがごとくこの世には、やめようと思っ
ているのにやめられないこと、悪いと思っ
ていてもやってしまうことのなんと多いことか。

アルコール、たばこ競輪、競馬、パチンコ買い物、過食.....数え上げればきりが
ない。どれも度を過ぎれば病気となる。アルコール依存症、ギャンブル依存症、買
い物依存症摂食障害等々。

しかし、今日の「やめられない」は、もっと身近な話。

例えば、いつでも締切りの前の日にならないと仕事に取りかかれ
ない人いませんか？。どんなに大変で苦しいと解っ
ていても、ぎりぎりでないとなんか手につかない人、いますよねえそんな人。
そしてそれを十年たっても二十年たっても苦し
みながら続けている。

さらにこんな人、定刻の十分前には出勤しようとい
つも心に決めているのに、気がつくとい
つもぎりぎりの滑り込みセーフ。毎朝毎朝ドキドキの出勤である。スピードの出し過ぎで、ハ
ッとするようなことも度々である。ただ
けどやめられないこのぎりぎり出勤。

さて、見わたせば施設にはこんなことばかりが目につく。

さぞ苦しいだろうに、おしっこやうんこをぎりぎりまで我慢している人。汗をダラダラ流
して、暑いことは誰の目にも明白なのに「暑くない」と言い張り7月の声を聞くまでズボン下、
長袖肌シャツを着続けている人。何杯でもコーヒ
ーを飲みたい人、何杯でもジュースを飲
みたい人、何杯でもお茶を飲みたいひと。あげればあげるほどご飯を食べてしまう人。.....。みんな
な(いけないと)わかっちゃいるけどやめられない。

さて、こんなわかっちゃいるけどやめられない心の奥底に、「誰か止めてよ、自分一人じゃ止
められないんだ誰か助けて！」という心の叫びが隠されているとしたらどうでしょう。

わかっちゃいるけどやめられないのは、何も重い知的障害のせいではないのだとしたらどう
だろう。

アルコール依存、ギリギリ提出、ギリギリ出勤、原因は知的障害なんかではない。

* * * * *

* * * * *
君は、片付け衝動が止まらない。洗濯物に残飯処理、食器の片付けにゴミ袋出し、
やると決めたら自分流にきちんとけじめをつけるまで、終わらない。「だめ！」「いけない」
「やらなくていいの」「あとで」どんな制止の言葉も無力である。そして体での張り合いもほ
とんど無力である。

何が彼をしてそうさせるのか？

本当に彼のしたいことは片付けなのか？ 彼の表情をよく観察する。眼球はギラギラし、

とてもお片付けを手伝っているよというような思いやり漂う表情ではない。息は荒く行動は、鬼気迫る。

そう、彼の表情から知ることができるのは片付けをしながら苦しんでいる彼の姿である。彼は、片付けの衝動に突き動かされながら叫んでいるのだ。「誰か止めてよ。本当にしたいことは片付けなんかじゃないんだ。本当はみんなに迷惑なんかかけたくないんだ。だけどほら、自分一人じゃ止まんないんだよ」と。

それは、ギャンブルにはまりながら、山のような借金と家族の泣き顔を何回も見て、今度こそ足を洗おうと決心をしながら、気がつけばまた競馬場の前に立っているギャンブラーの心の叫びにあまりにも酷似していないか。

そんな時、彼は、抱っこ法のセッションの中でその時の思いをこう表現した。

「いつもめいわくをかけてばかりでつらいです。」

「お母さんをくるしめていてつらいです」

「せんせいたちとめてくれますか？」

「とめてくれればいっしょにがんばります」

「ほんとうにとめられますか？」

女子職員では、三人がかりでもJ君をとめられない。絶対止めるという約束は、命懸けの約束だ。

それでも僕らは、J君の想いを大切にしたい。クラスは、清水の舞台から飛び降りることを決心した。

* * * * *
* *

片付けを我慢している時のJ君の表情は、本当に辛そうだ。J君の大好きな<街角ビデオ>をいっしょに見ながら、そばにいる職員もそのJ君の表情に辛くなる。

我慢する方も我慢させるほうも一緒に辛いのだ。

そんな二日目、ちょっとした隙が生じ、J君は片付けに走った。止められなかった職員は、自分の無能さ、無力さに涙がこぼれた。先輩方の努力を私一人のために台無しにしてしまったと自分を責めた。余計に涙が止まらなくなった。涙を一杯溜めたままJ君の待つ訓練室に戻った。

J君がやさしく寄ってくる。その職員の肩をやさしく2回3回とポンポンと叩く。余計に涙が止まらない。

「俺のために迷惑かけるなあ、泣くなよ、悪いのは俺なんだからこれからも頼むよ、お願いします」きっとJ君はこう言いたかったに違いない。

【資料 11】

平成20年度 夏 クラス新聞「とちんこ」

『あしたのために その3 見捨てられ不安 』

親に見捨てられそうな不安のことを分離不安と言います。しかし、我が子のことが気に入らないからと言って、実際に橋の下に捨ててくるというようなことが起こり得るのかというと、あったとしてもこれは極めて低い確率ですので、ここで言う分離不安というのは、現実に関に<捨てられる>というような不安ではなくて、心理的に親に<捨てられる>という心の中のできごととして、誰の心の中にも生じていることを説明している概念となります。例えば、親との関係で、<嫌われる>とか<口をきいて貰えない>とか<怒られる>とか<だめだと言われる>というような状況が生じたり、時には、そのような状況が生じそうなことが想像される時に、見捨てられ不安は高まるということになります。

さらに、そのような場面で実際に<叩かれる><殴られる>というような身体的虐待、また<出て行け><こんな子は家の子じゃない><死んでしまえ>というような心理的虐待といわれるような暴力的な発言があるならば、見捨てられ不安は、取り返しのつかない心の傷として、いつまでも心に貼りついてしまいます。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

分離不安が高まると、様々な行動が生じます。

一般的に有名なのは、夜尿、つまり寝小便ですね。ちょっと寂しい気持ちの時に、チョロッと出てしまいます。<赤ちゃんがえり>という言葉、聞いたことがありますよね。すっかり排泄が自立していた三才のお兄ちゃんが、下に赤ちゃんが生まれたとたん寝小便が始まってしまったり、指しゃぶりが始まってしまったりと。これが分離不安の高まりです。最愛のお母さんが、ひょっとしたら自分よりも赤ちゃんの方がかわいいのではない、好きなのではない、自分は嫌われているのではないのか、見捨てられるのではないのかというわけですね。

しかしこの程度の分離不安は、それに気付いた母親が、もう一度きちんと三才のお兄ちゃんの甘え心を受け止めることができさえすれば、あっという間に解決なのですが...

ところが、この寝小便を「お兄ちゃんのくせになんですか」と叱ったり、指しゃぶりを「みっともない、止めなさい」と怒鳴り飛ばしたりしていると状況はすっかり変わってきます。自分の<甘えたい>という自己主張を否定され傷ついた心は、その次には絶対に傷つかまいとして、そして親に捨てられるのを恐れて、親の期待や希望を無意識に取り入れて、明るく、元気な、そして素直な子どもになろうとする努力を始めるのです。

そんな努力が当たり前姿になってしまうと、まずはその人らしい自己主張が失われます。回りからは、素直な良い子として評価され続けるかもしれませんが、その方の心の中では、出口を失った自己主張がドロドロと渦巻き、さらには沈殿して、真っ暗な闇となります。

悲しいかな、知的障害や自閉症の方のその努力には、正当な結果がともないません。そのよ

うな努力がうまくできないのがその障害の本質であるからです。当然の帰結として、その姿は破綻します。

✧ ✧ ✧ ✧ ✧

A男さん、二十五才。母親に隠れて冷蔵庫の納豆を食べていたところを、ちょうど母親に見つかって、大きく叱責されたその日から、納豆を食べるたびに、彼を下痢が襲います。「納豆を食べた自分は、母親から見捨てられる」と、叱責と結びついた不安と恐怖は、彼の体を下痢へと導きます。母親に「納豆を食べた時に、大きな声で叱ってしまっておめんなさいね。あなたのことが嫌いで、叱ったんじゃないんだよ。これからも納豆食べていいからね」と謝罪されたその日から、彼は納豆を食べても下痢には襲われなくなりました。納豆を食べて叱られたことくらいで、彼の見捨てられ不安は最高潮に達してしまいます。

B男さん、五十三才。外出にて初めてのズボンの購入。今まではずっと父親が買っていた。「ぼく、くろいのきらいなのう」とグレーのズボンを購入。そのことを八十を過ぎた父親に報告すると「私が買うと、いつも黒っぽくなっちゃって」と申し訳なさそうな返事、母親を三十年以上前になくし、そこからは父一人、父の買うズボンはいつも黒色、B男さんはずっと黒いズボンが当たり前と思っていた。そして五十を三年も過ぎた今、「くろはきらいなのう」の自己主張、三十年以上押し殺していた自分の気持ち。黒色ではないズボンをはきたいと自己主張すれば、父親から見捨てられる不安が高まるが故に、彼は無意識的に素直な良い子を演じ続けていたのでした。

C男さん、二十七才。中学生との交流会では、いの一にお気に入りの女子生徒の手を握り締め、笑顔で散歩へ出かけていきます。その姿は誰が見ても交流会を楽しみにしていると思えません。ところが彼は、十分もしないうちに散歩からもどってしまいます。手にはどこの畑から引き抜いたのか、長ねぎの切れっ端を握っています。同行した女子中学生に聞けば、いきなり畑から長ネギを引き抜いて、ムシャムシャとかじったかと思うと、直ぐに戻って来てしまったとのことでした。

中学生との交流会といえ、定番の活動は<散歩>です。彼は職員や中学生の期待を無意識に受け入れて(良い子を演じようとしています) まずは<散歩>に出かけてしまいます。しかし、その活動は本来の希望とは異なるのでしょうか。偏食の強い彼は、野菜が大嫌いなのですが、しかもその中でも最も嫌いだと思われる長ネギを、しかも生で食い荒らしてしまいます。おそらくヤケ食いでしょう。そこでC男さんに希望の活動を写真カードを用いて相談します。彼は、ビデオを見るカードを選択して、女子中学生の膝の上でウトウトし始めるのです。「みんなと違うことをしてはいけないんだ」と思った時に彼の見捨てられ不安は急激に高まるのです。しかし、彼の散歩嫌いに気付くまで、職員集団は十年以上の月日を要したのでした。

D子さん、二十才。一週間に一度の帰省のたびに、彼女は母親にコンビニでリップクリームをせがみました。購入したリップクリームは一ヶ月で都合四本、しかし、あれほどせがんで購入したリップクリームは、ほとんど使用されることはありません。不思議に思った職員は、筆

談で彼女に相談します。十分日常的な会話が成立する彼女ですが、本音トークは紙に書くことが一番良い彼女です。「ほんとうにほしいものはなんですか？」悩んだ末の彼女の答えは「くちべに」でした。

<口紅>の要求は、彼女の見捨てられる不安を高めます。<口紅>は少女が大人になっていくための必須アイテムだからです。大人になっていくということは、親から分離していくことです。そうでなくても、初めて出す未経験の要求は少なからず見捨てられ不安を高めます。すると彼女の要求は<リップクリーム>に置き換わってしまうのです。より心の安全を求めているのがこれでわかります。

E男さん、二十五才。彼はなぜか大好きなはずのコカコーラをチビリチビリと飲みます。確かに炭酸入りで、ゴクゴクと飲むのは大変かもしれませんが。しかし、他の食べるもの、飲むものは速攻、完食の彼の行動にしては、やはり様子が変わるのです。答えは、意外な所にありました。彼のお母さんが、コカコーラを飲むことには骨が溶けるといって絶対反対だったのです。母親も決して無茶を言っているわけではありません。標準的な身体発達に比べれば、おそらく半分にも満たない彼の体躯、それに幼い頃から肝臓を病み、糖尿があるといえ、コカコーラに神経質になるのは十分わかることです。問題は、にもかかわらず、E男さんがコカコーラが大好きになってしまったことです。その後、一日の摂取量を決め、それを絶対を守ることで、母親はコカコーラを許してくれました。彼は、その日からコカコーラをグイグイ飲むことができるようになりました。見捨てられ不安が、彼の行動にストップをかけ、チビチビ飲むことをさせていたのです。一口飲んで、彼は自分を責め、見捨てられ不安と戦っていたのでしょ

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

いかがですか？見捨てられ不安？見捨てられ不安を越えたところに、本当の幸福がやって来るのですが...

あなたの親子関係は、もう越えられていますか？

【資料 12】

平成12年度 夏 クラス新聞「とちんこ」

『汗だく三様』

H君はその晩一睡もしていない。二、三年前の彼であるならそんなことは珍しくないのだが、明らかに今回は違った。汗だくなのである。額に背中に噴き出る汗である。そして食事さえも全く座ってられないほどの落ち着きのなさなのだ。始まりは、前日夕刻、週末帰省していたYさんが母親と帰園した頃であるという。来園した折りには、必ずH君に親しく話しかけてくれているはずのYさんの母親がすぐに帰らなくてはならなかったのでH君と話をしていないというのである。H君はいつもこんな時いつもの調子で「Yさんのお母さんはきっと僕のこと嫌いになったんだ。だから話していってくれなかったんだ」と必ず一方的な勘違いをして必要以上の心配をするので、早速僕らは昨晚のうちにYさんの母親に電話して、今日H君と話していけなかった理由(ただ忙しかっただけでH君のことを嫌いになったわけではない)の説明とそうは言っても話ができるのを楽しみにしていたのに話しかけていかなかったのは悪かったねえという謝罪を直接電話口でH君にしてもらっていた。

しかし、H君は寝れなかった。発語というコミュニケーション形態を持たない彼のお心は行動を通してしか僕らに伝わらない。一睡もできないほどの心配、一晩中汗だくになりながら歩き続けなければならなかった不安、それはいったい何なんだろう。

次に僕らはこう考えた。H君はYさんの母親を大好きになっちゃったんじゃないか。そして、そうってしまった自分をいけない人間だと思っているんじゃないかと。『自分には自分のことをとても大切にしてくれている母親がいる。なのにYさんのお母さんを好きになるなんて！お母さんはこんな僕を許してくれるだろうか』というわけだ。

早速僕らはH君の母親と連絡を取った。母親は電話口でH君にYさんのお母さんを好きになってもいいこと、そんなこと全然気にならないこと、たくさんの人を好きになることはとても素敵なことなんだよと一生懸命伝えてくれた。

H君の汗はこれでぴたりと止まった。

J君は朝から汗だくになって星組と月組との間を行ったり来たり忙しく動き回っていた。水戸黄門や大岡越前のビデオが見たい彼が、それが常にかかっている月組との間を行ったり来たりすることはちっとも不思議ではないのだが、明らかにその日は様子が違っていった。汗だくなのである。季節は夏とはいえ、いくら行ったり来たりしているからといっても不可解なほどの汗の量である。何でこんなに汗だくなんだろう。担任に話を聞いた。「そういえば少し様子が変なんです。私が近くを通っても決して目を合わそうとしないし、なんか避けているみたいなんです。」J君は担任が大好きだ。避けている感じだとはこれはよっぽど変である。僕らは

汗だくの感じからJくんには大きな不安があると推察した。

実はJ君は、何日か前に星組に助勤で来ていたT職員に軽バンでのドライブを強く要求していた。残念ながらその日はメンバーさん達の都合で、J君は一番隊ではなく二番隊になった。しかしその悔しがりぶりが尋常ではないのである。その後出勤してくるT職員を捕まえては、軽バンを動かせと強く要求するのである。その様子は< J君はT職員のことを大好きである >と仮定しなければ理解できないほどの一心不乱さだった。そこで先ほどのH君と同じ心の動きである。『自分には自分を大切にしてくれている担任がいる。なのにT職員を好きになるなんて！担任はこんな僕を許してくれるだろうか』である。

早速担任はJ君に話した。T職員を好きになってもいいこと、たくさんの人を好きになることはとても素敵なことなんだよと。

やっぱりJ君の汗はこれで止まった。

K君は、急に食堂のコップをめざして流しの上の窓から飛び出した。担任の職員が他のメンバーの通院に出かけた直後だった。窓から外へ出ることがいけないことであることは百も承知の彼である。

しかし特に説明をしなければ、通院に行く風景は二人で楽しくドライブに行く微笑ましい光景に映る。それを眺めていたK君の感じたものはいったい何だったんだろう。その後K君は、H君やJ君同様、担任の職員が通院から戻るまで汗だくだったのだ。

K君には通院の風景が、担任が自分を置いて、他のメンバーと仲良くドライブへ行く風景に見えた。K君は『好き』が上手に伝えられない。通院に行ったメンバーが羨ましくて悔しくてしょうがないほど担任の職員のことを好きなのに。通院から帰ってきた担任の職員にK君は勇気を出して走り寄った。担任は「ありがとう、そんなに私のこと待っていてくれたんだね、嬉しいなあ」と答えた。それでK君の汗はぴたりと止まった。

みんなの『好き』が少しずつ少しずつだけれど確実に広がっている。

【資料 13】

平成 16 年度 夏 クラス新聞「とちんこ」

『お父さん、僕は本当はニンジンが嫌いです』

「I さん、どうして明星学園に入ったの？もうずっと前のことだけど覚えている？」

I さんは、もう三十年近く前のことになるその日のことを、まるで昨日のこのように、いつもの明るい笑顔で答えてくれる。

「お友だちをつくるためえー」

脳性麻痺のために十分な構音運動が伴わない彼の発語は、どんな時でも、いくらか間延びをして僕らに届けられ、同じ理由で、その調整のできない、やや強めの平板なイントネーションと合わせて、僕らはいつでも彼の一生懸命さを感じ取ることができる。

そしてちょっと意地悪な質問。「それで、お友だちできたの？」

彼はまたいつもの笑顔で答える。「できないのお」

* * * * *

脳性麻痺の方は、いくつもの表情を感情の変化に合わせて作り出すことが難しい。表情をつかさどる顔の筋肉が上手に使いこなせないのだから、考えてみれば当然のことなのだが、悲しいときでも悲しい表情が作れずに、一生懸命作った表情が笑っちゃっているんだとしたら……。それこそ、悲しい。いくら自分が悲しくても、それとは裏腹に作り出す表情は運動障害のせいだ笑顔になる。このギャップ、この辛さ、この諦め。

さて、「お友だちができないのお」と答える彼の笑顔は本当に本物？

さらに、彼の笑顔に関しては、こんなエピソードがある。面会の後などでの玄関での父親との別れ、無表情の彼。そんな時、父親は必ずこう声をかけた。

「元気を出せ、笑顔でいなきゃだめじゃないか。そうでなきゃ、また会いに来ないぞ」

途端に彼は表情を変えた。不自由な顔面の筋肉を操って、たった一つ彼が準備できる表情笑顔へと。

そして、そんな彼には胃潰瘍があり、逆流性食道炎があり、そして親指や鼻の両脇や前頭部の皮を剥く自傷が一年中あった。そのどれもが彼の人生がうまくいっていないことを伝えていた。

* * * * *

父親との面会、そして外出。この六年の間、彼は決まったようにディズニーのキャラクターを中心としたおもちゃを買い、マクドナルドでコーヒーを飲み帰園した。それが最高の喜びだった。気がついたら彼の居室はおもちゃにあふれ、まるでおもちゃの国に行ったようなそんな空間になっていた。父親も僕らも、いったいいつまで買い続ければ満足するのだろうかと思いな

がらも、小遣いの不足などで思い通りおもちゃを買えなかった時には、自傷がさらにひどくなったりするので、彼の想いは強くおもちゃの収集にあるのだろと絶え間ない支援を送り続けたのだった。そして、その結果、彼の部屋は確かに夢の国になった。面会のかたちを決めるのも彼、購入するおもちゃを決めるのも彼、自己選択と自己決定の先には自傷のない生活が待っているはずだった。しかし.....。

* * * * *

僕らは自傷行動をこんなふうに理解している。

伝わらない想いがある。もちろん当人には知的障害というハンディキャップがあるのだから、伝わらない想いは僕らの何倍もある。残念ながら彼らは、自己像が否定的な故に、伝わらないときに解ってくれない相手を攻めることができないで自分を責める。それが自分で自分を傷つけるという行動、自傷行動になると。

Iさんの伝えたい想い、そして伝わらない想い、それはいったい何なのか。

この六年間の実践でわかったこと、それは彼の本当に欲しいものはおもちゃではなかったということ。だって六年間おもちゃを買い続けたことは決して自傷を減らすことには繋がらなかったから。

そこで僕らはもう一度考え直す。

彼の自傷は、左手の親指に向かっている。彼の自傷は親指の皮を因幡の白ウサギのように、一皮全部向いてしまうほど厳しい。そこまで痛い思いをして、彼はいったい何を誰に伝えたいのか？待てよ、親指はまたの名を<お父さん指>と言うではないか。お父さん指への自傷、それは紛れもないお父さんへの想いが伝わらないことを示しているのではないのか？

さらに....

おもちゃは所詮<もの>だ。部屋いっぱいにおもちゃが溢れても決して彼の心は満たされていないのだ。<もの>はいくら買ってもらっても<もの>以上にはならない。とすれば彼の本当に欲しいものは？

.....

<愛?>

* * * * *

ほとんど食べ物の好き嫌いを表現しなかった彼が、「ぼく、ニンジンきらいなのお」とどんなに小さく刻んだにんじんでさえも残すことを主張した四年前、そして「おさしみ、なまはきらいなのお、電子レンジでチンしてえ」と言い出した三年前、僕らはそれをやさしく受け止め続けていた。

そして、ここへ来て....

「お父さん、Iさんにんじん大嫌いなんです。学園では完璧に全部残します。」

「えっ！そうなんですか？そんなこと初めて聞きました。家ではそんな素振りも見せずにニコニコしながら全部食べていますよ。」

そこで本人を呼んで父親の前で意志の再確認。

「Iさん、にんじん大嫌いなんだよね」

向けられた職員の質問に彼はすぐに答える。

「ぼく、ニンジンだいすきい」

* * * * *

そして、一ヶ月ほどがたったある日、近く行事（父子一緒の会食がある）を控えた僕らは、彼に一つの提案をした。

「Iさん、今度、お父さんににんじんを残すことをお願いしない？」彼は答える。「お願いしないのお。ぼく、ニンジンすきなのお」今度は彼の本心を知る職員も負けちゃいない。「だってIさん、どう考えたってにんじん嫌いでしょ。お父さんきっと解ってくれると思うよ。頼んでみようよ。Iさんは知らないかもしれないけれど、にんじん嫌いな人なんか、この世の中にいっぱいいるんだよ。みんな食べずに残しているんだよ。次のお父さんとの電話のときにお願ひしてみよう。職員はIさんの味方だよ。きっと応援するからね。」彼は渋々答えた。「おねがいするう」

明日が電話というその前の晩、彼は一睡もすることができなかった。そして、電話でにんじんを残すことについて父親からOKをもらったその日の晩も彼は寝ていない。ずっと（おそらく四十年以上もの間）彼を支え続け、父親の前で演じ続けた<偏食をしない良い子>という理想とする人間像が壊れていくことに、Iさんは押し潰されそうだったに違いない。

* * * * *

次の面会日を前にして、彼は職員の応援を受けながら、ついに言い放った。

「鉄板チャーハンきれいなのお」

鉄板チャーハンは、彼の面会日における外食の定番で、ここ数ヶ月の間、面会日といえば鉄板チャーハンというくらい彼のお好みのメニューであるはずだった。しかしよく考えてみれば、鉄板チャーハンはにんじんだらけなのである。嫌いで当たり前なのである。

彼の精一杯の発信を受けて、僕らは動き始めた。本当は何を食べたいのかと問えば「そばろごはん」という答え。その希望は即座に父親に伝えられ、面会日の準備が整った。そして、めでたくも、そばろ御飯を食べてきた日、彼はまたまた一睡もできなかった。

* * * * *

それから一ヶ月、今では彼の頭も鼻の横も、そしてあれほど痛々しかった親指の皮膚も艶々と光り輝いている。そこには自傷のかけらもない。

「僕は本当はニンジンが嫌いです。」父親が息子の「イヤ」を受け止めてくれたその日から、彼は自分を責める必要性が全く無くなっている。

【資料 14】

平成10年度 春 クラス新聞「とちんこ」

『どっちが支えられているのかわかりゃしない』

A子さん、68才。頑張り屋で、気丈夫な彼女は常に笑顔絶やさず、そして愚痴をこぼすこともなく今までの人生を歩んできたに違いない。(たぶん)

平成九年、我々の前に現れた彼女は、ここ何ヵ月か続く体重減少のせいで顔にしわが増え、加齢による衰えをやや感じさせてはいたが、そんな心配をよそに肉が落ちたせいで浮いてしまった入れ歯が大笑いする度に飛び出しては逆に皆を大いに笑わせた。

そして不当に振戦してしまう我が身に苦戦しながらも、誰にも頼らずに衣服を着替え、食事をし、車椅子をあやつり、排泄をした。見事な自立ぶりだった。暗い顔、寂しい表情甘えるしぐさ、自分の弱みを垣間見せるような何もかもが彼女には無縁だった。

しかしその自分を甘えさせない厳しさは、時に外へ向かうと自分よりも自立のレベルの低い仲間に罵倒と言っていいほどの小言を浴びせることにもなっていたのだが……。

そんな彼女の明るいたくましさとは逆に、その後も体重は減少し続けた。血液検査、レントゲン検査、エコー検査、転院、投薬、たどり着いた結論は、神経因性膀胱、膀胱に収縮して尿を押し出す力がないために、尿道にカテーテルを挿入し、太腿につけた集尿パックに導尿をすることしか選択肢がない疾病だった。

集尿パック取り付け第一日め。さすがにピンとこないのか、何回か便所に通り職員に「もう、お便所に来なくても大丈夫だよ。このパックの中にオシッコが溜まるから」と説得されている。それでも次第に導尿生活にも慣れ、カテーテルも上手に扱うことができ、カテーテル交換と膀胱洗浄の通院も嫌がらずと全てが順調そうに見えた。体重も増加に転じ始めていた。

そんなある日……。彼女の頭に<大きなストレスあり>の証拠である円形脱毛が発見された。思い当たる原因は全てが順調にしていると思っていたカテーテルしかなかった。即座に、抱っこ法的なアプローチが始まった。担当が皆が寝静まった就寝後の時間に彼女を訪れる。

「ねえ、A子さん、何か心配ごとか一人で我慢していることがあるんじゃない？ちょっと膝枕してあげるからゆっくりお話ししようよ」

<膝枕なんかしてもらわなくても、おれはいい。なにも我慢していることなんかありません。心配ごと何もありません>

「でも、ほら、頭に小さなハゲができちゃったでしょう。絶対何かあると思うんだけど」膝枕を嫌がるA子さんを少しずつ、無理をせず誘う。

「今日はねえ、A子さんの話、何でも聞こうと思っているんだよ。私の知らない話、き

っと一杯あると思うな。今までA子さんの話、ちゃんと聞こうとしなくてごめんなさいね。なにか、ほら、イヤだけど我慢してやっちゃっていることあるでしょ。」

彼女の身体だが次第に緩み、安心して担任の膝に横たわる。ポツリポツリと彼女の口から言葉が漏れる。

<おれなあ、我慢しとるんな。このオシッコのくだ、本当は抜きたい。自分でオシッコへ行きたい。でも病院の先生が絶対ぬいちゃいけんと言ったもんで、一生懸命、我慢しとるんな>

初めて伝わるA子さんの本音の言葉に、担任の目から涙がこぼれる。

「ごめんね。こんなにA子さんが我慢して頑張っていることを全然、私知らなくて。オシッコの管のこと、A子さん、病気が治るって喜んでばかりいると思っていた。何にも知らなくて本当にごめんね」

知的障害の方々と係わる仕事に身を投じながら、A子さんのつらい気持ちにこれっぽっちも気づかなかった自分のいたらなさ涙がますますこぼれる。

ところがA子さんはそんな担任の無理解を責めようもしない。<先生、泣いちゃいかに。おれのこと泣いちゃいかに。おれ一人我慢すればそれでいいんで。それで済むんで。先生おれのこと泣いちゃいかに>

いったい知的障害のある彼らと健常と言われる僕らとどちらが立派な生き方をしているのだろうか。思いやりがあり、やさしさがあるのは、いったいどちらなのだろうか。担任の目からはもう涙が止まらない。この話を次の日の朝聞くことになった宮下の目からも涙が止まらない。

僕らの仕事はこの涙を実践に移すことだ。

『この人たちは何のために生まれてきているんだ。一人で我慢するために生まれてきているんじゃない。悲しいとき、寂しいとき誰かがそっとそばに居てくれる。嬉しいとき、自慢したいとき、誰かが一緒に喜んでくれる。それをするためにこの人たちも、そして僕たちも生まれてきているはずだ。A子さんにこんな立派すぎる言葉を吐かせているのはいったい誰なんだ。これじゃ、どっちが支えられているのかわかりやしない。』

この夜から九ヵ月。僕らの実践は、A子さんの心に少しは近づくことができているだろうか？

【資料 15】

平成14年度 冬 クラス新聞「とちんこ」

『父さん、母さんと「電車」に乗った日』

今年で三十才を迎える彼の半生は、繰り返し襲うてんかん発作との戦いの歴史だ。時には重積となり、入退院を繰り返したことが過去十五年の間に何度もある。

てんかん発作のその度に食欲は減退し、睡眠時間は逆転し、時に、その意志とは反対に動き続けてしまう体は、鎮静剤や安定剤、睡眠剤でも止めることができなかった。

固く閉じてしまった口は、どんなに押し込んでも食事を受け付けず、スプーンを強く噛んだまま何十分もそのまま、ただギョロリと職員を睨む目だけが彼の確かな意志を伝えていた。「どうしたの？ 食べないの？」と瞳を覗き込めば電光石火の平手打ちが職員の頬を襲った。

今になって、初めてわかるのだが、彼は怒っていたのだ。

ずっと、ずっと、ずっと…。

< 職員の無理解 > を。

何ヶ月も続く入院の介護者用ベットの上で何度も母親は思ったはずだ。「こんなに苦しむんだったら、いっそ死んだほうがましなんじゃないか」と。

父親だって兄弟だって思っていたはずだ。「どうして病気が良くならないの？ 専門の病院にだってかかっているし、専門の施設だって入れているのに」と。

二年前の四月。確認されているだけでもひと月で三十数回のてんかん発作が彼を襲っている。

< 季節の変わり目だから >

< 担当が替ったから >

わたしたちの彼を理解する目はまだまだこんなものだった。

発語ををコミュニケーションの手段として用いることができない彼の生き様を（しかも言われていることはわかっているのだからなおさら）その悲しさを、その辛さを、どれだけ共感的に感じ取ることができていたのだろうか。重い知的障害がある方々にとって行動全てが、何らかの気持ちを伝えようとする発信であるとは一方では感じていながら、彼のてんかん発作はその難治性、数の多さから例外とされていたのだった。わたしたちの彼に対する態度は、彼の人格を全く軽んじた、彼の人生を全く敬愛しようもしない百点満点の0点であったのである。

細やかな試みが始まった。

うどんが好きだからと、外食といえぱうどん屋と、ステレオタイプに職員が無意識のうちに決めていた外食メニューを、返事があっても無くても「今度の外食のメニュー、ねえ、どうする？」と尋ね続けること。

たとえ不眠、多動、夜間徘徊に陥っても極力、身体拘束や安定剤の服薬を廃し、お心主義の基本にそって、丁寧に、その居ても立ってもいられないという気持ちに添い続けること。

さて、そんなわたしたちの遅かりしといえども新しい係わりにさっそく彼は答えをくれたのだった。

ある母親の面会日の後、てんかん発作が止まらないのである。一日に三回、四回とてんかん発作が続く。ここに来て、やっとわたしたちは彼のてんかん発作を、彼に内在する心配や不安、葛藤や切なさの発信であると考えることができるようになっていた。

仮説の構築が始まった。

保護者の面会は、たいがい今までは父親と母親とが揃って来ている。ところが今回は母親だけの面会である。「お父さんにも会いたかったか？」その線に沿って実践が重ねられる。状況が好転しない。きっとそんな単純なことではないのだ。

知的障害がある多くの方々は自分のことを否定的に捉えていることが多い。そんな方々は全ての出来事を自分にとって悪く悪く、被害的に捉えることが多い。それなら「お父さんが面会に来なかったのは自分のことを嫌いになったから？」と考えればどうだろう。今度はその仮説に従って手が打たれた。

母親に電話する。「お父さんは会いに行くのが嫌で行かなかったんじゃないよ、仕事だったんだよ」父親に電話する。「ごめんな、仕事だったんだよ、次は絶対行くからな、お父さんも会うのを楽しみにしているよ」

これで彼のてんかん発作は止まった。

「ねえ、どうする？」が始まって半年、選択は口答からカード使用へと進化して行った。

ある日職員が叫んだ。「わかったんです。彼のイエスの意思表示は目を大きく見開くことです」と。

うどん、刺身、カツ丼、空揚げ…。いくつかの写真にとられたメニューカードが彼の前に順番に提示される。「今度の外食なにを食べようか？」確かに彼は、食べたいメニューのときにカッと目を見開いた。

選択がうまくいき、外食の形が彼の希望通りになればなるほど、確実にてんかん発作の数は減っていった。

この六月下旬。彼は力無く、床に横たわり続けた。食事拒否した。歩けるはずの身体に全

く力が入らないのである。目は空ろに宙を彷徨った。職員の指し示す写真カードにも無表情な視線を向けるだけだった。職員は焦った。もうすぐ面会日なのだ。一ヶ月に一回しかない、その面会の形を彼の希望通りにしようと一生懸命なのだ。

しかし、彼には返事ができない。彼は次の幸福を探していたから。既存の写真カードのなかには、きっと彼の探している幸福の形が無いのである。

答えの見つからない職員はこの半年の実践を振り返った。その中から次の幸福を探し出そうと試みた。

「彼の幸福は、お父さんとお母さんの三人が、揃って仲良く過ごすことにある。」

「彼の幸福は、自分の決めたメニューで外食することにある。」

「彼の幸福は、電車に乗ること、電車を見ること、電車の本を買うこと、電車のビデオを見ることにある。」…。今までにわかった幸福の形。

考えた末、職員は一つの提案を彼にした。

「今度の面会日には、お父さん、お母さんが一緒に来るよ。いつもと同じように美味しいものを食べに行こうね。きっとみんなで楽しめると思うよ。そしてさ、もう一つお父さん、お母さんをお願いをしようと思うんだけどいいかな？ お父さん、お母さんと一緒に電車に乗ってみようよ。」

彼の表情がピクリと動いた。

「Mさん、電車大好きだよ。それはみんな知っているよ。何回も何回も乗りたいと思っているよね。でも、いつもMさん、車椅子だから、電車に乗りたいなんてことをお父さんやお母さんに迷惑がかかるからと頼んじゃいけないって思っていなかった？」

「大丈夫、きっとお父さんもお母さんもMさんの希望をかなえてくれるよ。勇気を出して頼んでみようよ、初めてのお願いをしてみよう。職員も手伝うよ。」

彼は目をカッと見開いた。

今、彼がお父さん、お母さんと「電車」に乗ったその日から半年を過ぎようとしている。

彼のてんかん発作記録簿には、六月からずっと0回の数字が並んでいる。

さらに、この十一月には、ずっと服薬し続けていた睡眠剤が必要なくなった。

彼のやり場の無い「怒り」は、いま少しずつ溶け始めている。

わたしたちも彼の幸福を支えるために、進化を止めない。それが彼の「怒り」に対するせめてもの償いだ。

【資料 16】

平成 8 年度 夏 クラス新聞「とちんこ」

『不幸にしてバレー部のキャプテン』

高校の頃、バレー部のキャプテンって、カッコよくなかったですか？。背が高く、二枚目で、時折見せる笑顔が、さわやかで、しかも、みんなにやさしくて。女子生徒には、モテモテで、誰もが、声をかけてもらいたいと願っているような、そんな奴。……………

R子さんやK君、M君やN君への対応に、困ってしまっている実習生などに、僕はこんな説明をする。『僕らは、この施設の中じゃ、好むと好まざると、バレー部のキャプテンなんだよ。どんなに、心のアンテナが低くて、メンバーの気持ちが、汲み取れない職員でさえも、ここでは、バレー部のキャプテンなんだ。どうしてって、見てごらんなさい。彼らは、知的障害という幸福になるためには、ちょっとばかり負担のハンディキャップを背負っている。しかもその障害は重い。たとえ、学園での生活が、気に入らないとしても、自分で逃げ出す力はない。自分が、誰かの援助を受けなければ、食事や排泄でさえもうまくいかないのを一番知っているのは、彼ら自身なんです。哀しいかな、頼るべきは、一番身近な職員なんです。』

『月組なら、二十人を二人の職員で、星組なら二十人を三人でみているでしょ。七～十人を一人の職員でみるわけですよ。職員のほうでは、そんな風を感じてないのかもしれないですけど、そのみんなの目が、僕のほうを見て！私に話しかけて！と叫んでいるわけです。バレーボールのキャプテンを見るような眼差しで。』

『そう考えていくと、いかに職員が、彼らにとってかけがえのない存在かが、想像できますよねえ。』

『あなたが、そのバレーボールのキャプテンに憧れる女子生徒だとするでしょ。＜私、チビでブスだから、だめだわ。絶対振り向いてくれない＞と思っていたとする。しかし、ある日、大決心をして今日は、絶対話しかけてみようと思って、思い切って駆け寄って、「あいう…」と言ったとする。そうしたらキャプテンは、「あ！おはよう」とそれだけですたすた去って行ってしまった。その時のあなたの気持ちは、どうでしょう？＜やっぱり私はチビでブスだからだめなんだわ＞と思うでしょ。』

『ところが、みんなと一緒に、あなたが、キャプテンを見つめていたときに、あなたにだけ「あ！おはよう」とキャプテンが言ってくれたら、あなたの気持ちはどうですか？この世のものとは思われないほどの幸福が、心一杯になるんじゃないですか？＜あ！キャプテンは、私を見ていてくれたんだ＞と。同じ「あ！おはよう」の一言でもこんなに違うんです。』

『僕らは、天性のバレーボールのキャプテンじゃない。この限られた施設空間の中で、知的障害という立場の弱い人たちとの関係の中で、たまたま、キャプテンに祭られているに過ぎないんだよ。能力や、魅力がなくてもキャプテンなんだ。ある意味では、それは、不幸かもしれ

ない。しかし、拒否できるような役回りではないんだ。』

『彼らが、精一杯な気持ちで、話しかけてきた時には、もう遅いんだよ。どんなに、精一杯答えても、彼らの気持ちを満たすことができないんだ。さっきの女生徒のようにね。彼らが、熱い眼差しでこちらを見ていると知っていたなら、いつでも、こちらから、声をかけてあげることが、大切なんだ。そうすれば、同じ<おはよう>でも、重い意味を持ってくる。<やっぱり自分を見ていてくれたんだ>とね。』

『意を汲んで、先回りするって言うんだけどわかるかなあ』

彼らは、集団生活の中で、誰がかわいがられていて、誰が、みんなから疎まれているかをよく知っている。知っているという言葉が不適當ならば、きっと感じている。問題行動というような行動を示す多くの人たちが、<自分は、みんなから疎まれている>と感じていることについては想像に難くない。また知的障害というハンディキャップをもっている以上、<自分は、だめな奴なんだ>感じている可能性は、かなり高い。彼らは、それを喋らないだけだ。

僕らは、祭り上げられたキャプテンであるにしろ、全力で、キャプテンを演じなければならぬ。そうしなければ、彼らの自分に対する悪いイメージは、変わらない。

<やっぱり自分を見ていてくれる>

<それは、自分にも良いところがあるからなんだ>

<ひょっとしたらかわいいのかもしれないなあ>

<それじゃ、ちょっと頑張ってみようかな>

僕たちの人生も、彼らの人生もちっとも変わりゃしない。

【資料 17】

平成 18 年度 夏 クラス新聞「とちんこ」

『今あなたは、あなたのことを一番大切になさい』

その日、彼女は突然布団を中庭に持ち出し「ここでねる！」と言い出した。六月も初旬だとはいえ、真夏の夜の暑さを思えば、まだまだそんなに寝苦しいというはずもなく、その行動は職員には、ただただ訳の分からないものに見えた。

「どうして中庭に寝たいの？」職員の質問に彼女は大きな声で「きもちいいからです！」とはっきりと答えた。彼女の布団が部屋の外と中を行ったり来たり、職員は部屋の中に寝てもらおうと布団を部屋に戻す、いったん納得したかのようだった彼女だが、5分もたたないうちに布団は再び中庭へ、それは結局イタチゴッコだった。彼女の譲らぬ意志の強さを感じた職員は、最後に止む無く中庭にブルーシートを敷き、その上に布団を敷くことを選択した。時は梅雨の真っ最中、今にも降り出しそうな真っ黒な空だった。

実は彼女はこれから一週間後、再び部屋に戻って寝てくれることになるのだが、この日を皮切りに彼女はたくさんのことを私たちに教えることになるのだった。

* * * * *

彼女はこの五月の連休明けの新入所である。定員一杯の在籍だった星組からNさんに雪組への移動をお願いし、その空いた席に入って頂いたというわけである。

そんな彼女、入所当初はきっと誰でもそうだと思うのだが、寂しさを受け止めてもらうために、度々母親に電話をしている。

ある日、朝から何回もかけている電話に母親が出られず、やっと夕方になってつながった電話に、いつもは上手に受け答えができるはずの彼女が「でんわ！うるさい！！」と叫んで、とてもやりとりにならないのである。職員は、受話音量を小さくしたり、着信音量を小さくしたりと慌てて対応したが、いっこうにこの「でんわ、うるさい！」は無くなることがなかったのである。

彼女の心の扉を開ける鍵は実はここにある。職員の対応は「でんわ、うるさい」をこう解釈している。【かの女が「でんわ(の音をあるいは声を)うるさい」(と感じている)】と。しかし、前述の通り、この解釈ではことはうまく運ばない。彼女の意図しているところとは全く違うからだ。彼女の伝えたいことは本当はこうなのだ。【(わたしの)でんわ、(おかあさんは)うるさい(ですか?)】である。一日何回となくかけた電話、母親の声を聞きたくて聞きたくてかけた電話、その電話に母は出ない。私たちがその電話に出ない状況を「忙しいのだろう」とか「携帯電話を傍に置いてないだろう」とか「マナーモードになっているのかな」とかで十分処理をしていくことができる。しかし、彼女は、入所してわずかこの時期に、そうは解釈できないのである。母が電話に出ないことは、おそらく自分のことを嫌いなのではないか、邪魔だと思

っているのではないかと感じるのだろう。私からの電話が鳴っているのを分かっている、わざと出ないのではないかと勘ぐっていたのだろう（だって彼女の立場に立ってみれば、現在の置かれている状況は、家族と離されて、自分の意志とは裏腹に施設に入所させられてしまっているというのが実態である）それが彼女の言う「でんわ！うるさい！！」なのである。「おかあさん、わたしのでんわうるさかったですか？」「わたしのでんわめいわくだったですか？」これが彼女の一番確かめたかったことなのだろう。

彼女は自閉症という大きなハンディキャップを背負っている。しゃべることができるなんて言っただって、微妙な言い回しなどとても無理である。その上、物事の感じ取り方は超被害的である。自分のことを悪く悪く考える。その結果がこのようなコミュニケーションのすれ違いを生んでいるのである。私たちはこのことをもっともっと知るべきなのである。

この「でんわうるさい」事件は彼女の生き方、コミュニケーションの方法の根本を私たちに垣間見せてくれた。そしてこれが中庭事件への大きなヒントになっていくのである。

* * * * *

彼女の心はいつも否定的な気持ちで満たされている。自分さえいなければ...、自分はいつでも邪魔にされている...、自分の存在は迷惑である...

* * * * *

実は、人間が何かを伝えたいとき、その多くは自分が利益を得るための行動として表現される。赤ちゃんだって「おっぱいが欲しい」「オムツを替えろ」、みんな自分の利益のためである。彼女が中庭で寝たとき、私たちはまずその行動が何の利益を彼女にもたらすのかを考えた。

「もっと帰省をしたいのではないのか？」

「なにか帰省時に母親や父親に要求したいことがあるのではないのか？」

「静かなところで寝たいのではないのか？」

「一人になりたいのではないのか？」

いろいろの仮説が考えられ、実行に移された。しかし、彼女は中庭に寝たまま、三日が過ぎ、五日が過ぎた。

雨の降る夜があった。職員は慌てて布団を屋内に引き摺り入れた。それでも彼女は、再び雨の降る中庭に戻っていった。中庭に簡易テントが張られた。彼女の頑なな主張を引き受けるためだった。

* * * * *

彼女の心はいつも否定的な気持ちで満たされている。自分さえいなければ...、自分はいつでも邪魔にされている...、自分の存在は迷惑である...

* * * * *

彼女の行動が、自分の利益を得るためでなく、誰かの利益のためになされているものだったら、いったいどのように理解できるのだろうか？発想のコペルニクス的転換だった。

彼女が明星学園星組に入所したことで、Nさんは雪組に異動になった。時々星組を訪ねてく

るNさんに職員は「ごめんね」とか「さびしくない?」とか「元気にやっている?」とか盛んに声をかけている。それを見ている彼女の感じ方はこうに違いない。

「自分が星組に入ったばかりにNさんはクラス異動になった。させなくてもいい辛い思いを私のせいでさせている。私さえいなければ、私さえ部屋を出て中庭で暮らせば、一部屋は空く。そうすればNさんは星組に戻ってくることができる。Nさんには星組に戻ってきて欲しい。そうすることができるんだったら私は中庭で寝る。どうせ私は、みんなに迷惑をかけているんだから」と。

彼女の発信行動は、決して自分の利益のためではなかった。彼女は自己犠牲の道を歩んでいたのだ。

私たちは彼女に話す。

「Nさんはあなたのせいで異動になったんじゃないよ。Nさんも今から十年も前は今のあなたと同じように、とても苦しい時期があったんだよ。誰にも自分のことをわかってもらえなくて。

それから十年、職員全員が一緒になって、お母さんやお父さんの力も借りながら、どうやったら幸福になれるか考えてきたんだ。そうやって、もうすっかりお兄ちゃんになれたNさんは星組を卒業なんだよ。決して追い出したわけじゃないんだ。

今度はあなたの順番なんだ。今度はあなたがこの星組で、職員みんなと一緒にいながら、お母さんやお父さんの力を借りて、どうやったらみんなと仲良くなれるのか、どうしたらみんな幸福になれるのかを考えていくんだよ。今の星組にはあなたが必要なんだ。職員全員があなたのことを一緒に考えたいと思っているんだよ。いろいろのことを教えて欲しいな。あなたと一緒にいろいろなことを勉強していきたいと思うんだよ。ここはあなたの星組です。あなたの今一番大切にしなければならないのは、Nさんの幸福ではなくて、あなた自身です。」

こうして、この夜から彼女の就寝場所は中庭から部屋へ戻った。

【資料 18】

平成14年度 春 クラス新聞「とちんこ」

『握り締めた手の向こうに』

重度棟での実習を終えたばかりの学生さんが質問する。

「Hさんと離れて別の方とも係わりを持たなくてはと思うのですが、なかなか握り締めた手を離してくれないので、困ってしまいます。そんなときはどうしたらいいんでしょうか？無理に離してもいいんでしょうか？」

いくら頼んでも手を離してくれないHさんに対する苛立ちと保育士を目指す実習者として、少しでも知的障害のある方々の気持ちを理解しなくてはいけないという努力の間で学生さんの気持ちは揺れ動く。

そう言えば、Hさんと体験研修の方との間には、10年ほど前にこんなエピソードがある。体験研修が終わったその後のミーティングでのこと、

「今日、体験研修が終了の全館放送が入って、これで終わりにしようと、ずっと握っていた、そう一時間以上かなあ、Hさんの手を離そうとしたんですが、もう絶対に離してくれないんです。実は、わたし何もすることができなくて、しょうがないのでHさんの横に座ったら彼から手を握ってくれて、それでずっと彼のそばにいたんです。ただそれだけなのに、終わりという時になって、手を離してくれないので、こんな自分も役立っていたんだと思ったらうれしくてうれしくて…。考えたら他人の手をこんなに長い時間握っているという経験も普段の生活の中ではできることではないし…。本当に今日は思い切って来てみて良かったです。」涙ながらの話だった。

実はHさんには、長い間、人間不信に陥っていた辛い過去がある。一日の多くの時間を大便所のブースの中に座り込んで過ごし、終始怯えた目で周りを窺い、職員が近づけば、両手で頭と顔をかばい、食事といえば、脱兎のごとく大便所から飛び出して来て2、3分で全食を食べ終え、また大便所のブースにズボンを下ろしながら飛び込んで行く、頬は四六時中唾を両手で擦り付けているので真っ赤に腫れ上がり、不眠と下痢が毎日続く。15年前、僕らが出会った時のHさんの生活はこんなだった。

下痢が続くために、食事を制限される。お腹が空くから残飯に手が出る。当然職員に叱責されるからその恐怖心がまた下痢へと繋がる。果てしなく続く悪循環の中に彼はいた。しぶり続けるお腹を抱え、大便通いをしているうちに、何時しか彼の安住の場が、大便所のブースの中となっていくのだろう。ここなら誰にも脅かされないと。

みんなが寝静まった夜でさえも、彼には安寧の時間帯ではなかった。何人分もの布団を集めてきては、バリケードのようにうず高く自分の周りに積み上げた。その当時彼の居室は八人部屋だ。そのバリケードの中で彼はやっと寝付いた。

24時間続く対人緊張を何とか緩和しようと、彼の両手は掴んだり、揉んだり、擦ったりと強迫的に動くようになったのだろう。重度棟の中でその材料を見つけられなかった彼が、最終的に頬への唾塗りへ行き着いてしまったのは決して重い知的障害のせいではない。

僕らは、下痢が続いてもいいからと整腸剤を活用しながら、食事制限を撤廃した。満腹の保障の方を優先したのである。夜間にはベニヤ板で高さ60cmのパーテーションを彼の布団を囲うようにして設置し、個別的な空間を保障した。腰には、紐やビニール袋を下げていつでもどこでもそれを両手でこね回すことによって彼の編み出した緊張緩和の方法がとれるように保障した。そして、頭ごなしの叱責は、それが行動の改善ではなく、存在の不安までに高じてしまうHさんの心的特性に配慮し、全く禁止された。これが始まり。

実習生がクラスに入ると必ず服を脱いだ。僕らはそれを実習生と散歩に行きたい姿だと受け止めた。

また、隣のクラスの軽バンが動くたびに服を脱いだ。僕らはそれをもっとドライブに行きたいという発信だと受け止めた。Hさんのニーズを受け止めるためにクラスの日課を変更し、火曜日、木曜日にミニドライブを設定した。

外食先でコーラをがぶ飲みする彼に職員は小言を言った。その日彼は、学園に帰って来た車を降りた途端座り込んで動かなかった。次回コーラの量を信じて任せると彼は二杯飲んだ後自分でコップを片付けた。すると帰園後、ニコニコしてクラスに戻った。

そんなこんなの15年、様々な実践があって現在のHさんがいる。今のHさんには、不眠もなければ下痢もない。頬もすっかりきれいだし、食事もマイペースでゆったりだ。こぼれる笑顔は百万ドル以上の価値だし、フロアーの真ん中でスキップするその姿は、彼の最上の喜びの表現になっている。写真カードを用いて、外食メニューの選択を行ない、コンビニでは落ち着いて買い物かごに好きなお菓子を選択して入れることができる。まあ、ちょっとずつ職員を、周りの人間を、環境を信じて受け入れつつあるってということなのです。

さあそこで最初の質問です。

「握り締められた手は無理に離してもいいですか？」

「Hさんは、あなたに行かないでくれって言ってるんですよね。きっと。こういう状態をすがりつく」と言ってもいいと思うんだけど、あなたは今までの人生経験の中で すがりついた

ことありますか？あればHさんの気持ちがとってわかると思うんだけど」

「そう、ないですか。まだ若いから難しいかな。じゃあ、恋人とのデートの後のお別れの場面で、想像でもいいから考えてみましょうか。」

「お別れの場面では何て言ってもらったら一番うれしいですか？」

「そうですね。今日は楽しかったねとか次のデートの予定とかまた行こうねとか今日はきれいだったねとか言われるともう最高で、安心して別れられるという感じですよ。」

「じゃあ、今日の実習のおさらいね。Hさんにはどういう話がありましたか？一緒に楽しかったとかHさんの笑顔素敵ですねとか実習初日で緊張してたんですけどHさんのおかげで助かりましたとか明日もまた来るから散歩しましょうねとか。何かさっきのデートの後のお別れの場面のような話がありました？」

「こういう話しかけのこと、ポジティブメッセージというのね。とても大事なことから覚えておいてね。」

「Hさんのような過去にとっても辛い経験をしている人たちは、いつでも自分は好かれているか、疎まれているかがとても気になるし、今離れて行ってしまったら二度と戻ってこないのではないかととても不安が高くなるんですよ。そういう方々には一層のポジティブメッセージが必要とされるんですよ。」

次の日から実習生の挑戦が始まった。無理にHさんの手を離そうとせずに、逆に近づいていく。そしてすかさずポジティブメッセージ。

そしてその日の実習ノート。

自分の気持ちを素直に表現することはとても難しいけれど、努力してやってみると相手の人の笑顔が余分に見られてとてもうれしい。昨日教えてもらったポジティブメッセージだけど、やってみて感動した。

僕らも素直な気持ちを忘れずに、いつまでもポジティブメッセージを！

【資料 19】

平成 15 年度 冬 クラス新聞「とちんこ」

『そう、彼女は怒っていたのだ』

夜、7時、携帯電話が鳴った。「K子さんが発熱です。三十八度五分の熱があります。」

学園の職員からの連絡である。ほとんど風邪をひくこともないK子さんの発熱に、職員の声も慌てている。

「珍しいね。どうしたのかな？他の症状は何かある？咳とか、鼻水とか。」

前触れなしの発熱には二本立ての対応が必要だ。ひとつには単純な医療的ケア、例えば風邪による発熱なら総合感冒薬に解熱剤だ。しかし重度の知的障害者が対象の場合、さらに大切なのは、その発せられた身体症状を何かの伝達だと捉える心のケアの立場である。

「咳も鼻水もありません。ただ顔が真っ赤です。食後、突然顔が赤くなったので、おかしいと思って熱を測ったら八度五分だったんです。」

K子さんとのやり取りは難しい。単純なイエス、ノーでさえもなかなか表情からは読み取れない。さらに彼女の要求でさえも僕らは読み取れないでいる。<大きな声が出ているときには、おしっこが出たいときかな？>なんて言ったりして。

「体はぐったりしていませんか？」

発熱の原因が重大な病変で、対応が手遅れになることを避けるために全身症状を確認する。

「どちらかという活動的です。元気です。苦しそうということもありません。」

数日前、彼女は指を口の奥まで突っ込んで強く噛んだのか、ちょうど指の股の所に大きな傷ができ治療中だった。彼女は普段からそうなのだが、指を口に入れて遊ぶので、傷口が濡れてしまいなかなか完治しないのである。そこでここ数日、食事以外の時間は車椅子の手すりに手が口に行かないように縛らせてもらっていたのである。もちろん彼女に事情は説明しながら。

「咳も、鼻水もなく、元気もある。不思議な熱ですね。顔が赤いんですね。怒っているのかな？」

彼女の食事方法は、運動障害のある左手を精一杯使った手づかみである。皿も工夫され、縁が高くなって手に押された食物がこぼれないようになっている。彼女はみごとにきれいに食べ尽くす。左手一本で本当にここまできれいになるの？というような完璧さである。その姿をみて、人はスプーンの練習をしてみたら？とか手づかみでしか食べられないのだったら介助してあげたらと言うのかもしれない。しかし、食事時の彼女の満足そうな表情を知っているのならとてもそんなことは言い出せない。彼女の満足そうな表情は、いかに食事というものがそれぞれのペースや方法を大切にされ、たとえそれがマナーや通常の食事方法と離れていても、本人の喜びに通じているのかを教えている。

「夕食はどうでしたか？食欲はありましたか？」

夕食の直後に発熱があったというから、その周辺の情報収集である。

「介助で完食しています。」

「介助したの？指示は確か食事だけは手を自由にさせて、好きなように食事をしてもらい、食事後に傷の治療をして再び拘束させてもらうことだったはずじゃないですか？」

手を四六時中拘束すれば、確かに傷は早く治るだろう。しかし、誰だって拘束は嫌だ。だからと言って拘束をしないで彼女に手を口に入れられないことを守ってもらうことは難しい。全く拘束しなければ、唾液から傷口に様々な雑菌が入り治癒は望めないだろう。しかし、僕らは彼女が自分の手で食事をしたいと思っていることを常日頃の彼女の表情から確認している。結論は難しいのである。

「介助だったんですね。彼女はたぶん自分の手で食事をとりたかったと思いますよ。昼食の職員は引継ぎどおりに手を自由にしてくれたのでしょ。K子さんは怒ってるんじゃないかな？なんで手を自由にしてくれないのって。私は介助じゃなくて自分の手で食べたいのよって。」

重度の障害者相手の支援の仕事は、実は全面的に介助してしまうことが一番楽な支援なのである。この場合、食事の時に彼女の手を自由にすることで(彼女の主体性を大切にすることで)どれだけの手間が増えるのだろう。食後に手をきれいに洗うこと、バンソウコウをとること、消毒すること...忙しい食後の時間帯に圧倒的に仕事量が増えるのである。

「まず彼女に謝ってみてください。自分の手で食事を食べたいと思っていたK子さんの気持ちにちっとも気が付かなかったこと、縛られている手を自由にする時間を取れなかったことを。発熱の原因が他にあれば他の対応も考えなくてはならないのでまた一時間ほどしたら状況を報告してください。」

食事も排泄も着脱も全面的な職員の支援がなければ暮らせない彼女である。そんな支援の中で彼女は今までに不満や抵抗をほとんど示したことがない。あくまでも従順だったのだ。

電話が鳴った。

「熱、下がりました。謝って、次から気をつけることを話したら、みるみる顔の赤身がとれてきて、熱を計ったら三十六度五分でした。申し訳ありませんでした。K子さん怒っていたんですね。」

食事時に手を自由にすることは、彼女にとって、手を車椅子に縛ってしまうことの引き換え条件にも似た約束だったに違いない。そう、彼女は確かに怒っていたのだ。職員に手を上げることも文句も罵声も拒否もできない彼女にとって、その怒りを伝える手段はわずか三十分ばかりの間に体温を二度も上げてしまう荒業だったのだ。

また職員が示す謝罪にも彼女はすばやく反応した。謝られた瞬間に体温が二度も低下したのだから。彼女は気のいいやつなのだ。

「こんなにちゃんと怒りを職員に伝えたことは今までに無かったんじゃない？ひょっとしたら初めてかもしれないね。引継ぎがうまくいってなかったことは、決して良いことではなかったけれど、そのミスが彼女の怒りを誘い出したんだね。K子さんには<教えてくれてありがとう>

と伝えてくださいね。」

実はK子さんの暮らしは、この日を境にゆっくりと動き始める。

長期帰省の後の学園でのお別れ、さよならをする母親の前に、がっくりとうなだれる彼女、初めて見せた彼女の涙。

なかなか決まらない次回の帰省日、彼女はざっくりと指を噛んだ。今まで見せたことがなかった自傷の姿。

頻回にてんかん発作が続くある日、同室のT子さんのカレンダーをじっと見つめる彼女。そのカレンダーにはT子の帰省や家庭との電話や外出日などの予定がぎっしりとシールで埋め尽くされている。K子さんにはまだ用意されていないカレンダー。そこで急いで用意したカレンダー。途端に激減したてんかん発作。

必ず一眠りしてしまう午前中。今日は夕方担任と外出という日には、その外出を心待ちにしてか彼女は昼間一睡もしないという。

僕たちは、こうして<初めて>の彼女に2003年、何回も出会っていることになる。

ここでもう一度確認しておきたい。彼女は最重度知的障害者と世の中で言われている人である。難治性のてんかん発作を抱えてもいる。上下肢の運動障害も併せ持っている。最重度、最重度……なのだ。

閉じ込められていた気持ちは、まず初めに怒りの発信によってその蓋が破られる。その怒りが周囲に受け入れられた時、寂しさや辛い気持ちが溢れ出る。そして、その気持ちが受け入れられれば、ささやかな希望や期待が形として伝えられる。叶えられていく希望や期待は、穏やかな気持ちを作り出す。

彼女は今急ぎ足で幸福の階段を登ろうとしている。

そして今僕らは、もっともっと彼女にわがまを言ってもらいたいと思っている。(但し、僕らの付いて行ける力量に合わせてだけだね。ゴメン。)

【資料 20 - 1】

平成 18 年度 冬 クラス新聞「とちんこ」

『名探偵コナンへの道（ホップ編）』

Y男さんが、もう何時間も玄関に立っている。手には主婦が台所で使うあの厚手のビニール手袋、おそらく職員の便所掃除用のものを持ち出してきたのだろう、そのピンク色が新築になった真新しい玄関の風景からやたらに浮いている。そして足元は2年程前に買ってきたお気に入りの長靴だ。これはかなり本格的なもので、以前は外出時でもこれを履いていそいそと出かけていたものだ。もちろん冬でも夏でも、雨の日でも晴れの日でも、それは変わらない姿だった。

「食事だよ～」そう呼ばれて、食堂へ、気がつけばまたこの姿で玄関だ。

「ちょっとそのビニール手袋貸してくれる？便所掃除しなくちゃいけないから」渡してくれた手袋は、またいつかちゃんと彼ののもとへ、そしてまた玄関だ。

???

宮下智著【お心主義辞典】の第一条には<新しい常識>とあり、その第一項には『行動全てが何かを伝えようとする発信である』とある。とすると、ビニール手袋の意味は？長靴の意味は？そして玄関に立つことの意味は？というわけだ。

???

僕らの支援はいつでもこんな謎解きパズルの中にある。

まず『玄関に立つ』のイメージ連想をして行こう。知的障害の方だったら、自閉症の方だったら、Y男さんだったら...と、『玄関に立つ』イメージを彼らの気持ちに添って、できるだけ誠実に想像してみる。その方が入所施設で長い間暮らしているとしたらなんていうファクターはとても重要だ。どうだろう？ここでは<外出><帰省><面会>などというキーワードを引っ張り出すことができる。

さて、次は『ビニール手袋』である。入所施設というところで多様な手袋を持ち出してくることは不可能だから、『ビニール』にはさほどこだわることなく『手袋』でイメージを追ってみた方が近道だろう。さて連想ゲームだ...<軍手><働く>なんていうところまで連想してくると、彼の家族状況を背景にして僕らは突然、彼の心に近づくキーワード思い浮かべることができる。それは<お兄さん>である。お兄さんの職業は土建屋だ。いわゆる土方、一年中休みもなく働いている。

父母が離婚したのが、15年程前、妹は母親に引き取られ、彼と兄は父親に引き取られる。そして母親と会うことはこのときに禁じられている。その後父親を事故で亡くし、言わば兄はたった一人の身寄りなのである。

その頃、Y男さんは、父母の離婚とそれにもなった帰省、面会の機会の消失をきっかけにして、精神の変調をきたしている。不眠、多動、...大量の精神安定剤の服用にもかかわらず、

一日に数十分の睡眠しかとれず、最後には止めに入る女子職員3人を引き摺って、職員室に入り込み、自傷した傷に絆創膏を貼れと、それこそ一日中強迫的に要求した。結局その後の1年間、彼は精神科閉鎖病棟で過ごしている。

実は、<お兄さん>とは僕らには約束がある。一年中休みもなく働くお兄さん、自家用車もなく経済的にも時間的にも帰省や面会が困難なお兄さんに、僕らは「少なくとも1年に1回は、彼に会いに来てください。お兄さんは彼にとってたった一人の家族なんです。1年に1回でも、それをずっと続けて下されば、それは定期的な面会ということになります。彦星と織姫が1年に1回の逢瀬を楽しみにして、逢えない残り364日、逢えないことを忘れるように、また子どもたちが1年に1回のサンタクロースを楽しみにするように、1年にたった1回の面会であっても、それを楽しみにして暮らすことができるのです。大切なことは続けることであって、回数の多さではないのです。同じ1回なら、サンタクロースのように12月がいいですね。学園のクリスマス会の日ではなくてもいいですから、是非お願いします。」と無理を承知でお願いし、結局お兄さんの了解を頂けることになって今に至っているのである。10年たった今でも、二人の面会は自家用車を持ってぬ兄の代わりに担当職員が兄の送り迎えをし、ファミリーレストランへの外食に、大型店への買い物と彼の幸せを支えているのである。

そして最後に『長靴』ですね。これには職員集団も考え込みました。ぴったりフィットする答えが見つからないのです。そんなとき、ある職員が、「今村さん？」と呟いた。<今村さん>、それは彼の大好きだった職員の名前である。現在は定年退職して彼の前に姿はない。50代後半の年令で、彼の父親代わりとして担当職員でもないのに本当に頑張ってくれた。そう言えば、<今村さん>、軽トラックに乗って作業服を着てやってきて、<長靴>をはいて土手の草刈りをする姿は、とても格好良かった。

実は、あんなに大量に服薬していた精神安定剤が現在のようにゼロになったきっかけをつくってくれたのも<今村さん>である。

その頃、弄便や脱衣を繰り返す彼に、<今村さん>は辛抱強くつきあい、ついに彼の《イヤ》のサインを発見したのだった。彼の右手がずっと動いて、口の周りを手のひらでさっとなでる、これが彼の《イヤ》のサインだというのである。さっそく僕らはこのサインのとりこになった。だって彼の弄便は、まさに手のひらに大便が乗っかっていれば、これと同じ状態、口の周りがウンコだらけになることの繰り返しだったからである。

排泄に誘う、手が動き口の周りをサっとなでる。「そう、イヤなんだよね。また後でね。」

排尿に付き添って、職員が近くに立っていると、また手がサッと動いて口元へ。「あっ！ごめん、ごめん、近くにいちゃイヤだよね。見られたくないもんね。向こうへ行っているね。」

睡眠薬が入った眠前薬を持参した職員の前で、やはり彼は口元をなでる。「そうか、飲むのイヤなんだよね。今日は飲まなくても眠れそうなんだ。よくわかったよ。じゃあ飲むの止めにしよう。」

そんなかんので、精神安定剤の服薬はいつのまにか無くなった。どんな小さな《イヤ》から

でも、《イヤ》を受け止め続けることの誠実さを教えられた一件だった。

そんなわけで、『長靴』は<今村さん>で、その意味は<愛着>である。

ここでやっと、最初の行動理解の方法へ立ち戻ることができます。つまり、Y男さんの『ビニール手袋をして、長靴をはいて、玄関に立っている』姿は、<大好きなお兄さんに面会のときに大事なお願いがある>という姿と考えることができるのです。

僕は言葉の意味がわからないとき、例えば三省堂の国語辞典を引きます。引けば答えはそこにあります。ところがY男さんにはコミュニケーションの手段として有効な発語がありません。あるのは、目の前に繰り広げられる行動だけです。彼とのコミュニケーションのツールとして三省堂の国語辞典は全く役立たないのです。必要なのは『ビニール手袋』と引いたら、<兄のこと、または働いている人のこと>と書いてある辞典、『長靴』と引いたら<今村さんのこと、または愛着を感じる人を代表している>と書いてある辞典、『玄関に立っている』と引いたら<面会、帰省または外出のこと>と書いてある辞典なのです。この世の中に立った一冊しかない【Y男さん辞典】をつくるのが僕らの仕事になるのです。

ここまでたどり着いた職員は、さっそくY男さんに、お兄さんとの面会でやりたいことを写真カードを使って相談していきます。彼はお兄さんとの関係では初めて選ぶ<温泉カード>をまずは選択し、次に、これも珍しい<とんかつカード>を選択して、職員に希望を伝えることができます。その希望が今度は彼のスケジュールカレンダーにシールとして貼られます。

これで、『彼のビニール手袋をして長靴をはいて玄関に立つ』行動は、ピタリと無くなりました。

ねえっ、これって、名探偵コナンですよ。絶対に。

【資料 20 - 2】

平成 18 年度 春 クラス新聞「とちんこ」

『名探偵コナンへの道（ステップ編）』

もう昔のことだけど、そう 7、8 年前のことだろうか、A 子さんがしゃべる言葉といえば、これはもうのべつまくなしに「おふろのじゅんびする～」のひと言で、これは、もちろん入浴日であろうが、なかろうが一日中繰り返されていたものだ。女性にしてはちょっと低めのトーンで、皆さんご存知のあの自閉症的な平板なイントネーションで「おふろのじゅんびする～」とのたまうのだった。

もちろんその当時、なす術もない職員集団は、本人の気持ちを傷つけないようにと気遣いながら「ありがとね、A 子さん」と応えてみたり、きっと違うんだろうなと思いつつも、ちょっと説明的に「お風呂は、明日だよねえ」なんて応えてみたり、あるいは、あまりのしつこさに「今日はおふろ入ったよね」なんて意地悪な冷たい対応だったりして…。今になって思えば本当にちんぷんかんぷんなやりとりを、一生懸命にしていたのだった。

さて、いま宮下智著【お心主義辞典】の<反復される行動>の項目を紐解いてみることにしよう。そこにはこう書かれている。『繰り返される行動の裏には必ず本当の気持ちが隠されている』と。

もちろん前段のような対応では、彼女の「おふろのじゅんびする～」は止まらない。それは「おふろのじゅんびする」ことが彼女の本当に伝えたい気持ちではないからなのだ。ただしその気持ちは、例えばこうすることで受け止めることができる。

キャンプに出かけた A 子さん、一泊してよいよ帰りのマイクロバスの出発である。

「おふろのじゅんびする～」と彼女がのたまう。

職員はすかさず応える。

「あーあ、楽しかったキャンプも終わりだね。イヤだなあ、もっとここにいたいよねえ」

これで彼女の「おふろのじゅんびする～」はピタリと止まる。

それでも残念ながら、彼女の意志とは裏腹にマイクロバスは学園に向かって出発である。しばらくして、バスはセブンイレブンの前を通過する。すると彼女、再び、「おふろのじゅんびする～」とのたまう。

さて今度は職員の返答は、「ジュース買ったかったな、学園に戻ってからまた飲もうね」

彼女はこれで「おふろのじゅんびする～」をもう繰り返すことはない。

さあ、バスはまたまた彼女の意に反して学園へ。そしてよいよ学園に到着である。学園の入り口を入ったところで彼女はまたのたまう。「おふろのじゅんびをする～」

ここでの職員の受け答えはこうだ。「イヤだよ。大嫌いな学園に着いちゃったねえ。またいつもの生活が始まるねえ。ああ、イヤだイヤだ」

これで、彼女の「おふろのじゅんびする～」はもう繰り返されない。

彼女の「お風呂のじゅんぴする～」は万能の会話術である。「キャンプ帰るのイヤだ」にも使えるし、「ジュース買いたいな」にも使えるし、「学園嫌いだよ」にも使えるのである。傍から見れば、全くバッドチューニングな会話、お風呂にキャンプ、お風呂にジュース、お風呂にイヤな学園、どう見たってへんてこりんなこんな会話がどうして成立するのだろうか。

だから、この読み解きにこそ僕らの専門性が存在するのである。これが今回の名探偵コナンへの道である。

まずは根底に彼らのネガティブセルフイメージ（否定的自己像）を仮定する。従って彼らの感じ方は超被害的だ。つまり物事を悪く悪く考える。あるいはその起きていること全てが自分が至らないことが原因のように考える。<迷惑をかけているに違いない><こんなことを言ったら（やったら）きっと嫌われる>というわけだ。

さらに、彼らの成育歴がそれを二重に三重に補強する。

「良い子にしていなくてお迎えに来ないよ」「わがママを言っちゃいけないよ」「ちゃんと先生の言うことをきくんだよ」「言うことをきかないと連れて行ってあげないよ」…。

どうだろうか？

彼らは次第に<わがママ>と主観的に感じてしまう物言いに慎重になっていくのである。そして最後にはその気持ちを抑圧して黙り込む。

「お風呂のじゅんぴする～」もう解りますよね。お風呂の準備をすることはA子さんにとって究極の<良い子>表現だということが。お風呂の準備をすることは、特に入所施設内にあって、積極的、主体的に職員のお手伝いをすることです。着替えを出したり、服をたたんだりするのでしょう。これはもう<良い子>の証明ですよ。

さて、彼女の心の中に、悪い子の、そしてわがママな子の気持ちが湧き起こります。<キャンプから帰りたくない><ジュースを買いたい><学園は嫌いだ>、みんなそうですよね。するとそれを打ち消すように今度は彼女の心には瞬時に<良い子>のイメージが湧き上がります。<私は悪い子なんかじゃじゃない、絶対良い子ですよ。わがママな気持ちなんか持っちゃいけない>というわけです。すると、彼女の口からはもう「お風呂のじゅんぴする～」の言葉が発せられているのです。半分オートマティックですよ、きっと。

というわけで、彼女の本当の気持ちは、いつでも「お風呂のじゅんぴする～」の言葉の後ろに隠れてしまい、何十年もの間、常に回りの人間に伝わることなく心の底に沈黙していったのです。

職員集団は、頑張ります。彼女が「お風呂のじゅんぴをする～」と言い出すたびに、その心の奥にある「わがママを言いたい気持ち」「言ってしまったらきっと嫌われてしまう気持ち」を推測しては言語化をしていきます。（現場ではそれを否定的な感情の言語化と言います。）Aさんは、そんな言語化を受けて、そのような否定的な感情を感じてもいいこと、そして表現してもいいことを安心感とともに学習していきます。

二年もたった頃でしょうか、彼女の口からは、もう「お風呂のじゅんぴする～」は全く発せ

られることが無くなったのでした。A子さんは、次第に本当の気持ちをそのまま素直に表現する術を身につけていきます。

寂しいとき、彼女はこういいます。「おとうちゃ～、おかあちゃ～」

心がざわついて落ち着かないときにはなんと「ふあんていになっちゃった～」です。

帰省したい夜には、もちろん「おうちかえる～」です。

食べたいものなんかは、もう自由自在です。「つけもの～、りんごジュース～、プリン～、…」と、とめどもなく溢れ出ます。

こうして彼女が、自分の気持ちそのままを、感じたまま表現することができるようになったとき、もう「おふろのじゅんぴする～」は死語となりました。何故なら彼女にはもう無理して<良い子>を演ずる必要がなくなったからです。そして、もちろん彼女には、否定的な感情を表現することで、彼女が心配した職員やお父さん、お母さんに<嫌われるかもしれない><怒られるかもしれない>というような状況は生じませんでした。ある意味、全てが彼女の取り越し苦労だったのです。

寂しいときに、寂しいと言うこと、お家に帰りたいと言うこと、お父さん、お母さんに会いたいと言うこと、それはわがままなことでしょうか？それを言うことは悪い子でしょうか？それを表現しないで<良い子>を演じ続けることは果たして幸福へ通じる道でしょうか？彼女の「おふろのじゅんぴする～」はそのことを私たちに突きつけます。

今年度になって、彼女は運動会、秋まつり大会と参加を拒否し、居室で父母と一緒に過ごしました。もともと火と大きな音が大嫌いな彼女です。考えてみれば運動会は、聖火に花火、スタートの鉄砲に、風船割り、彼女の大嫌いなもののオンパレードです。秋まつり大会は、グラウンドの真ん中に焼き芋のための大きな焚き火です。ライターの火でも怖い彼女には、とても耐えられないほどの火の大きさです。

その時の彼女、私のところへ来てこうのたまうのです。

「えんちょうせんせい、ぶらじゃーする～」

さすがの名探偵もこれにはたじたじです。

答えですか？

それは「わたし、みんなと違ってても良い？」なんですよ。

私は答えます。「みんなと違ってても良いんだよ。君は君の人生じゃないか。運動会も秋まつり大会も出なくても全然変じゃない」と。

【資料 20 - 3】

平成 19 年度 夏 クラス新聞「とちんこ」

『名探偵コナンへの道（ジャンプ編）』

「このカニ、なんメートル？」

独特のイントネーションで Y 子さんが職員室まで、今朝の新聞の折り込み広告を手にして訊ねに来る。お中元の宣伝なのだろう、産地直送の文字の下にカニ、エビ、アジ、イカ...と海産物が所狭しと並んでいる。

「このカニ、なんメートルにすんどる？」彼女の質問は、こちらの知識レベルとは関係なくいつも鋭い。伸ばされた人差し指で強くカニの写真をポンポンと何回も指差して、語気鋭く問いたす。

そう、もう七、八年前の夏のことである。

実はこの質問、正解を瞬間的に引き出すことにはかなりの困難が伴う。

なぜって、まず第一に、<カニが水深何メートルのところに住んでいようが、そんなこと俺には関係ねえだろう>であるし、次には<このカニだって、生きていたときには、きっと動き回って生活していたのだから、いつも決まった水深のところにいるわけではない>だろうし、さらには、たとえ、およその生活圏の水深が確定できたとしても、例えば 100メートルから 200メートルの間という答えがとて Y 子さんを満足させるような正解のように思えないからである。

彼女は自閉症スペクトラムの範疇に入る。したがって思考回路はデジタル。アナログ、ファジー回路の返答は許されない。デジタル思考回路で発せられた質問には、デジタルレスポンス（応答）である。そこで即座に答える。

「200メートル！」

さてこれで、問題は解決したか？イヤイヤ彼女は次の質問を畳み掛ける。

「200メートル、海、ふかい？」

さて、この質問にも正解がないですよ。わかりますよね。海って、何メートルまでが浅くて、何メートルからが深いんですか？そんなことは誰にもわからない。もちろん Y 子さんにだってわからない。

第一、100メートルだの、200メートルだのとしゃべっている Y 子さんには数の概念が乏しい。しかし、ここでもデジタルレスポンス（応答）即座に答える。

「ふかい！」

ところが、彼女の質問は果てしが無い。「このエビ、なんメートル？」「ふかい？あさい？」「アジ、なんメートル？」「ふかい？あさい？」……。ひとしきり質問が終わって、やっと彼女は帰っていく。

<いったい今のはなんだったんだろう？>頭の片隅に軽い徒労感を覚えながら、パソコンのキ

ーボードを叩き始めると、また彼女の登場である。先程居なくなってから、まだ五分もたっていない

「このカニ、なんメートル？」「200メートル、ふかい？あさい？」

再び同じ質問が繰り返される。

さて、ここで宮下智著【お心主義辞典】の登場である。そこにはこう書かれている。『繰り返される行動の裏には必ず本当の気持ちが隠されている』と。

しかし、謎はさらに深まります。ひとしきり質問したその後、また彼女はやってくる。今度はカニの話じゃない。

「キャンプ場までトンネルいくつある？」

この質問にも困りますよね。私たちにとっての正解は「行ってみなきゃわからない」なんでしょうが、彼女にとっての正解はおそらくそうじゃない。

こうなりや適当に「ふたつ！」

元気よく返答するがすぐ質問が戻ってくる。

「そのトンネルなんメートル？」やけくそで答える。

「125メートル！」

するとまただ。

「125メートル、ながい？みじかい？」

さらに「でんき つく？」「くらい？」

普通ならこの当たりでムラムラと心の底から怒りがこみ上げてきます。「勝手にしろ！」と心が叫びます。

しかし、名探偵コナンになりたければ、ここで冷静にならなければなりません。さあ、謎解きパズルの始まりです。

彼女にとっては、カニの住んでいるところが水深何メートルであろうが、あるいはトンネルがいくつって、それが何メートルの長さなのはおそらく切実な問題ではない。それは200メートルと答えようが、125メートルと答えようが、質問は澁みなく進み、結局深いか浅いか、あるいは長いか短いかへ行き着くからである。しかし、深いか浅いか、長いか短いかの絶対評価も彼女にとってはどうも切実ではないのである。時に返答者の気分の違いで、返答が深いかから浅いへぶれたにしても彼女からの反論は全くないからである。

つまり彼女の話の中核は、海やトンネルにあり、水深や全長は枝葉末節なのである。

とすれば、海にトンネル、違っているようだが二つの話の骨格はほぼ同じであることに気がつくことができる。共通点は海もトンネルも「深い」あるいは「長い」、そして「暗い」。そしてヒントはおそらく「キャンプ場」だと。

八月下旬に予定されているキャンプを一ヵ月後に控えて、Y子さんにはたくさんの希望があるに違いない。来るべき行事のことを隅々まで決めておかないと不安が高じる彼女である。今回のキャンプ計画はどこまで進んでいるんだろう。

「Ｙ子さん、キャンプでなにをしようか？」

「はなびだなあ」

「花火、楽しいよねえ。他に何をしたい？」

「コーヒーもってく？」

「インスタントのカップコーヒーを持っていくよ」

彼女と話しながら、ひとつひとつメモを取っていく。決まったことは紙に書いて渡されると安心が高まるＹ子さんである。また、その紙は私から計画担当者へ渡されて、キャンプ参加者のニーズの把握へとつながって行く。

「ごはん何作るの？」

「あさりのさかむしだなあ」

「え！カレーじゃないの？」

「あさりのさかむしだなあ」

「Ｙ子さん、そのことクラスの職員に伝えてある？」

「まだだなあ、あさりのさかむし、つくれる？」

ここに彼女の葛藤がある。

『キャンプと言えばカレーでしょ』ある自閉症の方が言った名台詞である。それほど、キャンプといえば、カレーであり、焼き肉なのである。キャンプといえば<アサリの酒蒸し>では100パーセントないのである。Ｙさんもそれを経験的によく知っている。

<アサリの酒蒸し>を食べたいと言ったら職員からはどんな答えが返るだろう？

「夏の暑いときに、貝なんて持っていくと危ないよ、腐って下痢をしちゃうよ」あるいは「カレーや焼き肉を作るんだから、そんなにたくさんのは作れないよ」あるいは「カレーや焼き肉にはアサリの酒蒸しは合わないでしょ」。どうもそんなところか。いずれにしても、諸手を挙げて賛成なんていう職員はいそうもない。

ここに彼女の苦しみがある。職員に拒否されるだろうと思われる要望を言い出せないのである。言って拒否されるよりも、言わないで我慢した方が人間は傷つかないから。

さっそく、彼女にメモを持たせます。<あさりのさかむしをつくりたいです>と。

「クラスの職員にお願いしてきてごらん、きっと、いいよって言ってくれるよ。今からすぐ行っておいで。」

クラスの職員には、彼女のお願いを快諾するように連絡をつけておきます。しばらくして戻ってきた彼女、「あさりのさかむしつくるなあ」とボソボソと答えてくれます。

さて、これで「このカニ、なんメートル？」はピタッと止まるのですが…。果たしてそれは…。

古い方はご存知でしょうか？ 野坂昭如の往年のヒット曲、黒の舟歌の一節を。

男の女の間には 深くて暗い川がある 誰も渡れぬ川なれど エンヤコラ今夜も船を出す

Y子さんにとっての深い海と長いトンネル、それはあなたとわたしの間にあるコミュニケーションの深い溝のことだったんですね。きっと。そういえば、ここ何年も彼女とカニとトンネルの話をしていません。深くて、暗い川を渡れたかもしれない二人です。

【資料 21】

平成 15 年度 春 クラス新聞「とちんこ」

『父親もまた大切なもう一人の親であったということ』

Yさんの母親が入院した。およそ一ヶ月の入院加療の予定である。そのために長い間続けてきた二週間に一度の帰省が都合二回飛ばされることになった。

そしてこれがことの始まり…。

この一月中旬、母親の入院が予定されたとき、担任はいつもの手順でYさんにことの流れを説明した。

ここ何年かで彼が馴染み、獲得してきた情報処理手段、帰省日や帰園日そして外出日を伝えるカレンダー、外食でのメニュー選択のためのカード使用、帰省時、家庭での日課を伝えるためのカード使用など、それらを駆使して僕らは彼に説明を試みた。そして、培った情報処理能力からすれば、これから起こる母親と自分の身の上の変化を十分理解し、対応できると考えた。

入院がいつから始まるかということ、クラス旅行には母親と一緒にいくことができず、父親だけになること、そして母親の退院の予定、その後の一ヶ月ぶりの帰省の予定が、カレンダーにシールを貼ることで彼に伝達された。彼は、いつものようにお腹を右手でぼんぼん叩く動作で僕らに了解のサインを送ってくれた。

確かに何もかもが上手に伝わっていたはずであった。

たった一つのことを除いて…。

* * * * *

なにごともなく最初の一週間が過ぎた。

「Yさん、お母さん入院しているから今週は帰れないんだよ。お母さんが病気が治って退院したらまたたくさんお家に帰ろうね」

そんな慰めで僕らの支援は終始していた。

次の週末を前にして、彼をてんかん発作が襲った。数年ぶりの転倒を伴う発作で、頭部を裂傷し、五針を縫う大怪我を負った。しかしながら、僕らはこのてんかん発作の原因を、安易にも、その週末が母親が元気でいれば当然帰省ができただろう日程に当たっていたことで、母親の長期入院とそのために帰省が遠のいていることに求め、彼の本心を探求することを怠ったのである。

さらに次の週末は一泊二日のクラス旅行だった。入浴も食事も睡眠も僕らの心配をよそに順調すぎるほどに経過した。てんかん発作も大小便の失敗もなく、母親が行事に不参加であることが、施設入所以来二十年間で初めてであることなんか嘘であるかのような立派な態度のY

さんだった。

この旅行に引き続いて帰省した家族はクラスの三分の一、六組を数えた。

「Ｙさん、今日は家に帰れないんだよ。お母さん病気で入院しているでしょ。もう少し我慢すれば、お母さんの病気が治って、そしたら帰れるからね」

父親と別れた後、彼はフロアーのコタツに頭までもぐり込んだ。少し様子のおかしいのに気付いた職員がコタツの中を覗くと、彼は隠れるようにして涙を流して泣いているのだった。僕らが彼の涙を見たのはこの六年間で二度目、さらにこんなにさめざめ泣くのを見たのは初めてのことだった。

思い通りにことが運ばないときに地団駄を踏んで怒っていた六年前、服を脱いで真っ裸になってばかりいたその頃、自分の服も他人のおもちゃも枕やビデオテープも窓の外に放り出していたその頃、彼は怒りを通してだけしか自分の気持ちを外界へ伝えられなかった。そんな彼が今、寂しさに耐えかねて、しかもその姿を皆に見られないようにして泣いている。寂しい、辛いといって泣いている。・・・

* * * * *

ここまでされて、僕らの支援はやっと彼の心に向かい始めた。

彼は、帰省できないことだけで泣いているのか？母親が行事に参加できなかったことだけで泣いているのか？彼が見せたこの涙は、そんなことを伝えるだけのためのものなのか？

確かにＹさんは甘ちゃんだ。過去にお母さんべったりの季節を長らく送っている。六年前、毎晩のように母親に電話をして、それを子守唄のようにして眠っていたのも彼であるし、職員と一緒にないと大便を安心してできなかったのも彼だ。

しかし、今回...

帰省できないと決めたのは誰？母親が行事に参加できなかったことが寂しいことなのだと判断したのは誰？

彼は、旅行で、一泊二日の長丁場、ずっと優等生だったのだ。心配していた父親に迷惑らしい迷惑をほとんどかけていないのだ。本当に寂しかったら、そうにはならないはずだ。彼が頑張ったのは何のため？父親に「僕はもう立派なお兄さんなんだよ」と伝えるために彼は頑張ったんじゃないのか。

帰省できないと決めたのは、彼じゃない。母親がいなければ、家になんか帰りたいと思わないだろうと勝手に判断した周りの人間が、帰省を彼から取り上げたのだ。母親、そして父親、そして僕ら職員が。

Ｙさんは、「お父さん一人のお家でもいいから、帰りたいんだ」と言いたかったんじゃないのか。「お母さんばかりが親じゃない、お父さんだって僕の親じゃないか」「お父さんのことだって僕は頼りにしているんだよ」「お父さんのこと大好きさ」「お父さん一人じゃ、帰っちゃいけないの？」彼はこう言いたかったのじゃないのか。一泊二日の旅行で彼が優等生だったのは、お父さんと二人だけでもこんなにできるんだよ、家に帰ったって迷惑をかけないよというメッ

セージではなかったのか。

ここまで考えて、やっと彼の涙の理由がずっと僕らの胸に落ちた。

さっそく僕はYさんに尋ねた。

「お父さん一人でもいいから、お家に帰りたいんだよね。」

彼は勢いよく、何回も何回も右手でお腹をポンポンと叩き続けた。

今度は父親に電話である。

「そうですか、Yがそんなことを言っているんですか？私もこのところ考えていたんですよ。母親がこうして入院してみて、自分のことを全部自分でしながら、万が一の時には、Yのことを自分一人でも見るようになるようになってくちやいけないんじゃないかって。いい機会なので挑戦してみようと思います。仕事のこともあるので、もう一回、Yに気持ちを確認してもらって、Yが良いというならお父さんはOKだと伝えてください。」

もしかしたら、断られるのではないかという一抹の不安を吹き飛ばすかのような返事を頂いてことは動き出した。

もちろんYさんに異論があろうはずがない。

突然の息子の帰省の希望に、無理を押し、仕事上の社会的な信用までも犠牲にして、仕事をキャンセルしてかけつける父親、五針の傷を作ってまで伝えなかった父親への想い、コタツに頭を突っ込んで、泣き濡れるほど伝えなかった父親への想い、初めて父親への想いを伝えたYさんの勇気に、父親が誠意を持って応えている姿がここにあった。

この日からの一泊二日の帰省、父親にとっては初めて尽くしの二十四時間だった。

パジャマの着脱、オムツの交換、夜尿シーツを敷布団にかけて…。夕食の準備に朝食の準備、幸いYさんはその全部を平らげてくれて、そして拳句の果ては、小便と大便の失敗、慌ててお風呂へ駆け込んで…。

その何もかもが、初めてのお付き合いだった。

大忙しの二十四時間、最後はYさんからオシッコのサインが出て、トイレで大小便とも大成功。その後、彼は父親の手を引いて、自分の部屋に連れて行き、おもちゃと一緒に遊べと誘ったそう。

ちゃんと最後にはお返しがあるものです。そんなYさんはやっぱりやさしい心根の持ち主なのである。

【資料 22】

平成12年度 春 クラス新聞「とちんこ」

『たった一つの自己選択でさえも人生を変えることもある』

もし、僕らが僕らの人生をいとおしいものと感じているとするのなら、それはここまで歩いて来た自分の人生を、紛れもないこの自分が選び取ったものだと感じているからに違いない。そして、このことは最も重い知的障害があるといわれている方々にとっても変わらない真実であると今思う。

* * * *

Y君はその日、担任と外出をした。いつものようにディスカウントスーパーへ出かけ、ここ数年来続いている買い物のスタイル通り、お菓子売場に寄りスナック類を、そしてインスタントラーメン売場に直行していくつかのカップラーメンを矢継ぎ早にカゴに入れ、次にジュースを選び取ると真っ直ぐにレジに向かった。いつもと変わらぬ外出風景である。しかし、帰園してからがいつもと違ったのだ。弄便と着替えが止まらない。あげくの果てが断続眠、不眠である。原因は明らかに外出、買い物にあると考えられたが(だって買い物から帰って反復強迫行動が始まっている)特に有効な手が打てないままに一晚が過ぎ、そして一週間が過ぎていった。

数日後、彼は買って来たカップラーメンを食べた。しかし、好きなはずのラーメンの半分以上を残し残飯入れに捨てた。

おやつを選んでもらおうと「かっぱえびせん」と「ポテトチップス」と「おせんべい」を並べたが、どう並び換えても真ん中の位置に置かれたものしか選択しなかった。それは選ぶということが解らないというよりも、選ぶ気がないように見えた。

ここまで来て僕は気が付いた。「Y君、君の選んできたスナック類やカップラーメンやジュースは本当に君が好きなものだったの?」と。

僕たちの選択場面の設定は一から出直しだった。

スーパーに入る。今にもスナック売り場へ移動しようとするY君の体を張り合いながら止める。Y君、今日は本当に君の好きなものを、食べたいものを買おうよ。これからグルッとお店の中を回るよ、それから買いたいものを決めるんだよ。ここがお惣菜売場、コロケでしょ、とんかつでしょ... ここがおまんじゅう、カステラ...

.....彼はまんじゅうをつかんだ。

Y君のおよつのおやつは、「かっぱえびせん」と「おせんべい」と「おまんじゅう」に組み替えられた。彼は次第に、そして確実におまんじゅうを選択するようになっていく。買い置きのおまんじゅうが無くなってしまった時、彼は断続眠でそのことを職員集団に伝えた。次の買い物では、彼は初めてトマトを選択し、おいしそうにかじりついた。そして、それに並行して様々な変化が起こった。それは驚くべき変化だった。睡眠時間が安定する。少々のイレギュラーな

出来事にも反応しない。些細な嫉妬反応が激減する。自ら職員に寄って行って話しかける事が増える。等々。

たった一つの自己選択が彼の人生を変えていっているのだ。

僕らは、これで三度目だ。たった一つの些細に思えるような自己選択がその人の人生を変えていくのを見るのが。

始めはSさんの《赤いコップにお茶》と《青いお碗に味噌汁》の選択。これはもう5年も前のこと。

ほとんど目の見えないSさんは食い入るようにそのコップとお碗を見比べて、飲みたい方に手を差し出した。それができるようになったその日から、Sさんの生活は一変した。お風呂イヤ、寝るのイヤ、食事もイヤ、排泄もイヤ、イヤイヤ尽くしだった生活がみごとにひっくり返ったのである。

次は2年前。Kさんのおやつのおやつ三択である。夕方の時間に職員室に出入りすることが多いKさんに、オプションのおやつを用意することになり、「かきのたね」「かっぱえびせん」「おせんべい」が用意された。Kさんは圧倒的に「かきのたね」を選択することが多かったのだが、気が付いてみたら、何十年と続いていた窓から外へ物を放り投げる行動が全く無くなっていたのである。

ここでもたった一つの自己選択がKさんの人生を変えたのだった。

「まんじゅう」や「かきのたね」そして「お茶」か「味噌汁」か、どれも僕らにとっては取るに足らないように思える自己選択だ。しかし、その自己選択が彼らの人生を確実に変えている。

彼らは、選びたいと言っている。あらゆる場面で選べる状況を作ってくれと言っている。

言葉で選べるなら言葉で、言葉が駄目なら身振り手振りで、それでも駄目なら絵カードで、そして写真カードで。それでも駄目なら実物で。指差せないのなら、視線で、視線で難しいなら表情で。

とにかく、どんな方法でもいいから、自分の思いを確かめて欲しいのだ。そして、自分の人生を自分で選び取りたいのだ。

Y君やSさん、そしてK君が特別じゃない。もの言えぬ重い知的障害があるみんなを代表してそう言っている。

【資料 23】

平成 19 年度 冬 クラス新聞「とちんこ」

『あしたのために その 1』

明星学園 宮下 智

生まれ持った脳性麻痺という障害が故に、自分の足で歩むことがかなわない K 子さんは、母親との別れの後いつでも「オカアチャン！オカアチャン！」と玄関で連呼しては、その目はいつまでも母親の乗った車が走り去るのを追いつけていた。彼女がもし、もし歩ければ、きっと止める職員の手を払いのけて、走り去る車の後を全力で走って追いかけたらろう、そんな勢いを車椅子の彼女の乗り出した上半身が語っていた。そんな彼女ももうすでに 40 才を越え、母親も 70 才を疾うに越えていた。施設に入所して 30 有余年、いまだ上手に別れられない母と娘、幸せもここにあり、実は不幸せもここにあった。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

例えばこんなことがあった。毎年のように夏といえば、食欲不振とそれにともなう体力低下で入院騒ぎを起こしていた K 子さんが、めきめきと健康を取り戻し、無事に夏をこえ、体重が増加し始めたその頃、「重たくなると持ち上げるのが大変なのよねえ」と彼女の前で、ぼろっと本音を母親がこぼした次の日、彼女は全く食事を摂ろうとしなかった。それは過剰なまでの母親への思いやり。<食べなければ体重を減らすことができる、そうすればお母さんにこれ以上の苦勞をかけなくて済む。>命をかけた母親への奉仕の姿だった。

さっそく母親に電話をもらった。「元気で健康がなりよりよ。体重が増えることなんか全然へっちゃらよ。食べることができなくて点滴注射を打たなくてはならないことや風邪をひいてしまうことの方がおかあちゃんは心配よ。安心していっぱい食べてね。良いわよ、食べて。」これで彼女は安心して食べ始めることができた。それが 8 年前の夏の終わり。

彼女はいつでも自分の幸せが二の次だった。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

「K 子さん、絶対白が好きだと思んですけど、白い T シャツとかどうですかねえ？」そんな職員の問いかけに母親は答えた。もちろん彼女も母親の隣でこの話を聞いている。

「白ねえ、とってもいいと思うんだけど、汚れが目立ちますよねえ。私買ったことないわ」もちろん母親の言っていることは間違いじゃない。不自由な両手両足、不十分な運動能力、食する食事は、ポロポロとシャツの上に落ち、汁気はたらたらと伝わる。白い T シャツは見る間に染みだらけになってしまうだろう。

「K 子さん、今度の買い物外出で K 子さんの大好きな白い T シャツ買おうよ。」そんな職員の問いかけに彼女は即座に反応した。

「イケマセン！イケマセン！イケマセン。」必死の形相だった。ここでも彼女の幸せは二の次だった。優先順位はいつも母親の次の 2 番である。それが 3 年前の夏。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

そしてこの六月。出張中の横浜で携帯電話が鳴った。会議に向かう地下鉄の地下道の中である。

「K子さんが上半身裸で、全く服を着てくれません。」クラスの職員からのSOSだ。「先日外出で買って来た服、その前に母親と一緒に買って来た服、大好きなグレーのスウェットのパジャマ、あらゆることをやってみたんですけど、全くダメです。」「一旦は自分で選んできてくれるんですが、3分と持ちません。またすぐに真っ裸です。」「どうしたらいいでしょうか？」

どうしたらいいでしょうか？と問われても、これはもうパンザイの白旗ですよね。横浜と飯田、これではもう勝負にならない。それでも確認できることを確認しておきます。

「どんな表情でやっているの？苦しそう？怒ってる？楽しそうってことはないだと思いますけど？」

職員の答えが返ってきます。

「それが、表情はとてもいいんです。裸になってニコニコしていて、ハイなんていう職員を呼ぶ姿はいつもと同じです。」

この服脱ぎのような繰り返される行動（反復行動と呼ぶ）は、通常ネガティブな感情（本当はイヤなことなのに無理矢理やらされたとか明るく振舞っていたんだけど本当は寂しかったとか）の発露であることが多いので、表情はどちらかといえば曇りがちで、苦しそうな場合が多いのだが、表情がとてもいいという報告を聞いて、まず感じたことは、何か前向きの発信をしているのではないのかという予感だった。

【お心主義辞典 第一項、行動全ては何かを伝えようとする発信である。】

さて、彼女が裸になることで伝えようとしていることは一体何か？彼女の本当の気持ちにたどり着くための僕らの地図のない旅がまた始まった。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

重度の知的障害のある女性の方が、身を曝してまでして何かを伝えようとしている姿を前にして、<この人たちにはやっぱり恥ずかしさが発達していないんだ>と考えるのは言語道断だ。確かに定型発達の女性の方が示すような恥ずかしさと全く同じであるかどうかについては、厳密な検討が必要だろう。しかしながら、裸がいけないことであり、みんなと違った稀有な行動をとっているということについては十分な自覚があり、それを承知でこの行動を起しているのだという理解が必要だ。少なくとも彼女は二語文域の発語がある。にもかかわらず、いま彼女の発信は言語回路を経由せずに、真っ裸という極めて厳しい行動回路を通して私たちに届けられているのだ。

出張の会議の途中も、ホテルまでの地下鉄の中でも、彼女の伝えたい想いは何かと考え続けた。

<裸になるのだから>きっと発信の内容は<服>に関係したことに違いない。しかし、その内容

はととてもとても頼み難いことに違いない。…特に母親に。

……………。

…もしや スカート？…。

……………。

彼女は十年来車椅子暮らしだ。両足には全く力が入らない。そして、介護に便利なようにと、彼女は一年中ジャージにポロシャツ、トレーナー暮らしである。

知的障害者はスカートをはいてはいけないのか？肢体不自由がある障害者は、車椅子の障害者はスカートをはいてはいけないのか？おしゃれをしてはいけないのか？いや、そんなことはないはずである。でも彼女の心にはブレーキがかかってしまっている。

彼女に尋ねる。「スカートを一緒に買いに行きませんか？」彼女は「チガウ、チガウ」と連呼した。

母親に電話をする。「スカートねえ。介助大変ですよねえ。お便所でも、車椅子でも…。ただねえ、Kちゃんねえ、まだ学園に入る前の小さい頃、歩けないのに二階までよく階段のぼって行って、タンズから私のスカート出して頭から被っていることが何度もあったわ。スカート好きなのかもしれない。」

僕らは、K子さんに説得を試みる。「あなたが歩けないのは、あなたが悪いんじゃない。ましてやお父さんやお母さんが悪いのでもない。あなたは歩けなくなったのを自分の努力が足りなかったと思っているかもしれないけれど、それも違う。あなたは、くやしいかもしれないけれど、この思い通りにならない体とずっとつきあっていかなくちゃいけないんだ。でも僕らもそれにつきあうよ。職員はいつでもあなたの味方だよ。あなたがやりたいと思うことが少しでもかなうようにずっと手伝うよ。」

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

彼女は今、スカートどころか、水色のパンツにブラジャーまでつけている。さらに十年来はいていたオムツまでも取れている。

彼女にとっても僕らにとっても疾風怒濤の半年間だった。スカートを手に入れた彼女はさらに服を脱ぎ続けることで、本当にいまどきの女の子がつけているような素敵なパンツとブラジャーを手に入れた。しかもお好みの色は水色。そしてさらに、服を脱ぎ、パンツまでも脱ぎ、不自由な手でオムツを千切り、オムツを外したいことを僕らに伝えた。

気がつけば、もうそこに服を脱ぐ彼女はいない。いるのは満面の笑みをたたえて、「オネエちゃん！」と話しかけてくる彼女だけだ。先日の母親との買い物外出では、「ニカイ（二階）」と下着売場に行きたいことを健気にも教えた彼女である。もうそこには「チガウ」と「イケマセン」の彼女はいない。そして、その先には母親と「マタネ」といって笑顔で別れられる日がきつと待っている。

【資料 24】

平成 17 年度 冬 クラス新聞「とちんこ」

『私だってありがとうを伝えたい』

僕は、今僕らの仕事を、生意気にも『お心主義』なんて称したりして、毎日の毎日の支援を組み立てている。

所詮、相手の<こころ>なんてわかりゃしないよ、だって自分の<こころ>だってわかるはずがないんだからと...

ましてしゃべることができるもの同士だって、わかりあうなんていうことは至難のことなのに、しゃべることができない方の<こころ>を、本当の気持ちを知ることなんか、とても無理な話だよと...

心の底から湧き上がってくるそんな雑念に押し負かされそうになりながら、それでも僕は、この『お心主義』の道の上を歩き続けている。

* * * * *

ここに言葉を発することができない彼がいる。伝えたい思いを伝えられない彼がいる。そして、こちらに、その方の気持ちをわかろうとしながらも、それがかなわない自分がある。お互いが、お互いに伝えたい思いがかなわず、そこで立ち往生している彼と自分。何らかの手段で思いを伝えようとする彼。それをわかり得ない自分。障害者であるのは彼だけなのか、彼の思いを受け止められない自分も障害者ではないのか？お互いにコミュニケーション障害者？

これが『お心主義』

* * * * *

ここにイライラすると窓ガラスを割ってしまう彼がいる。それは例えば良くない行動である、その都度説教を繰り返す自分がある。何年も何年も窓ガラス割りという行動を変えられない彼。そして気がつけば、ここに同じように説教という行動を変えていない自分。お互いに自分から行動を変容させることができないもの同士。彼が行動障害者ならおそらく自分も行動障害者？

これもやっぱり『お心主義』

* * * * *

ある日、彼の本当の気持ちがわかる。でもその願いがほとんどかないそうもない時、絶望と無力感に襲われる彼。そして、ここに支援者として何もできない自分。だからそこにも絶望と無力感。そして自責感。彷徨う魂、寄り添う心とこころ。お互いに、思いやり、支え合う。いったいどちらが障害者？

これもやっぱり『お心主義』

* * * * *

さて...

今晚もまたK子さんが夜更けに職員室の窓をペタンペタンと叩きに来た。このところ毎晩である。夜間爆睡型の彼女がこうして寝付つくことができず、自分の居室を出て、10m以上はなれた職員室まで不自由な体をものともせずに来てくるのにはそれ相応の理由があるに違いない。(解説：彼女の一步の歩幅は僕らの1/4の20cm程度だから、彼女にとっての10mの距離は僕らの感覚では4倍の40m程の距離と考えれば彼女の気持ちが想像できる。)

K子さんは、食事も着脱も排泄も、生活のあらゆる場面でほとんど全面的な支援を受けているいわゆる最重度知的障害者であるのだが、その感覚は思いのほか鋭い(お心主義的には、当たり前のように鋭い、だって知的に障害があることで他の感覚は研ぎ澄まされるに違いない)。過去にも、担任の心理的な不調を察知して不眠に陥ったり、勤務の不連続を察知(病気かな?退職かな?)して、てんかん発作を起こしたりしている。

彼女の表情はいつでもポーカークフェイス。どちらかといえば、僕らはいつでも笑顔で誤魔化されてしまう。

戸を叩き始めてから一週間、彼女は担任と外出に出かけた。ハンバーグの夕食と服の購入、終始彼女の表情は良かった。その10日後には一泊二日の帰省。やや睡眠時間は少なかったものの安定して過ごしている。この間、彼女の表情は決して悪くない。

勤務日誌を振り返る。まず担任(Fさん)のいるときに、夜間の覚醒が多いことが確認される。

さらに調べる。職員がいる部屋を訪ねて来ては戸を叩き、いない部屋は素通りしているらしい。これで、何かを職員に伝えたいと思っていることはおそらく確実、さらに担任のFさんに対しては、その思いが強いことが推測できる。

さらに調べる。最初にK子さんが夜間覚醒したその晩、やはりFさんが夜勤の夜なのだが、ちょうどその前の日に、Fさんは他のメンバーM男さんの母親へのプレゼントの買い物に同行することを約束している。その話をK子さんはどこかで耳に挟んでいるに違いない。

さて、こうなれば戸叩き行動の理解の方法は一つである。「私もお母さんにプレゼントをしたい。Fさん、連れて行ってください。」おそらくこうだろう。

* * * * *

M男さんに遡ること1ヶ月ほど、J男さんが広告紙を片手に職員室を訪れている。その広告にはDHC(コンビニ販売の化粧品)の商品が掲載されている。J男さんの母親は前職をリストラに伴い解雇され、長い間探している就職先がなかなか決まらずに苦悶の日々を過ごしている、ちょうどそのときだったのである。職員はピンときた。「お母さんにプレゼントしたいのかな?」彼は黙って頷いた。彼は彼なりの方法で母親を元気付けようとしていたのである。だって彼は「頑張って」を言語で伝えられない。

M男さんの場合は、さらに状況は厳しい。長く闘病生活の父親を支えていた母親が今度は倒

れ、手術をしなければならなくなった。しかし、心配されていた術後をどうにか乗り越え、順調に回復の道をたどり始めたその頃に、彼はじっとファッション広告紙を眺めていたのである。眺めていたのは女性物。職員は尋ねた。「お母さんにお見舞いのプレゼントかな？」彼は一言呟いた。「マフラー。」彼の精一杯の気持ちがマフラーに込められる。

* * * * *

ところでK子さん。Fさんとお母さんとお父さんに次回の帰省でプレゼントを持って帰ることが決まって、ピタッと戸叩き行動は無くなった。戸叩き行動が始まって三週間、職員がその気持ちをわかってくれるまで、彼女は夜間覚醒をし、戸を叩き、それでも伝えられなければ、日中でも職員のいる部屋の戸を叩いて回り、本当の気持ちが伝わるまで諦めなかったということになるのです。

その後彼女はFさんと一緒に大型店に出かけ、母親にはひざ掛けと手袋、父親にはマフラーを購入してきました。

帰省したその日、父親はマフラーを巻いて、ずっとK子さんを同じ椅子で抱きかかえるようにして座っていたそうです。

そしてお母さんからは、「これからずっとK子の気持ちをしっかり受け止めていきたいと思います」とのお言葉を頂きました。

さて、K子さんの本当の気持ち？

FさんがK子さんに「戸を叩いているのは、お母さんに何かプレゼントをしたいからなの？」と聞いたとき、彼女の表情は一瞬恥らったように見えたそうです。その後はいつものポーカーフェイスです。そしていつもの屈託の無い笑顔が返ります。

もちろんK子さんには一言の発語もありません。<アーアー>と<ウーウー>の世界です。<おかあさん>とも言えず、<おとうさん>とも言えない彼女です。もちろん<ありがとう>などとは到底言えない彼女です。

だからこそ、ひざ掛けや手袋、マフラーに込められた気持ちは、父や母への感謝の気持ちに他ならないと今の僕らは信じています。

今日も彼女は、「私はそんなだいそれたことは考えていませんよ〜。」てな顔をして、ニコニコ歩いています。

【資料 25】

平成 19 年度 春 クラス新聞「とちんこ」

『あしたのために その2 - がんばらない - 』

医者のお家に生まれ、医者になることを宿命付けられ、拳句の果て、親の期待とは裏腹に、その夢をかなえることができないとわかったときに(大学の医学部にさえ合格できなかった)両親の殺害に至ってしまった子どもの気持ちを皆さんはどう考えますか？

また、弁護士一家に生まれ、弁護士になることを夢見て十数年、結局国家試験に合格することができず、弁護士になることを断念することに至った年若い青年の人生を皆さんはどう考えますか？

さらに、一流高校、一流大学、一流会社と進み、順風満帆、さあこれからというときに、たった一回の些細な業務上の失敗をきっかけにうつ病に陥り、自殺未遂を繰り返す青年の人生をどう考えますか？

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

さて....

自閉症スペクトラム Y 子さんの人生は、この十年「アパートでくらしたいんだわあ！」という大声と「グループホームにいけるう？」という弱気な小声とが交錯しながら、どうすることもできない<期待に応えられない自分>と、到底期待に応えられないとわかっていながらも、その高くて遠い頂を、目指し続けなければ、なおいっそう不安に押し潰されそうになってしまう自分とを抱え、葛藤し続けた日々であったのだろう。(と、今になってやっと思えるのです。失礼ながら彼女はもう四十代半ば、僕らは彼女とつきあい始めてから十年という月日が流れています。)

しかし、ここで誤解をしないで欲しいのですが、<アパート暮らし>や<グループホーム暮らし>を決して、高くて遠い頂なんて表現しているわけではないのです。彼女を苦しめたのは、<アパートで暮らすこと>や<グループホームへ行く>という言葉が、Y 子さんにとっては地域の、自由な、小集団生活を意味していたのではなく、<頑張っている良い子>と同義であったことなのです。

「そんなことをしているとグループホームへ行けないよ」という働きかけ全ては、「言うことをきくことができないあなたは、親や職員の期待に応えられない駄目な子ですよ」というメッセージをその言葉の裏に携えて、何回となく過去に彼女の心を傷つけたことでしょう。

「一人で何でもできなくちゃアパートでは暮らせないよ。寂しいなんてことは我慢しなくちゃ。」誰かの支援を受けなければ暮らしていくことができない Y 子さんにとって、それがどんなにか薄情な言葉であったかは今となっては簡単に想像できることです。

文頭の例で言えば、「アパートでくらしたいんだわあ！」という大声は「お医者さんになりたいんだわあ！」と同義であるし、「グループホームにいけるう？」という弱気な小声は、「弁護

士試験に受かるう？」と同義なのです。

繰り返します。

「アパートでくらしたいんだわあ！」という大声は「入所施設で小さい頃から親と離れて暮らしながら、寂しいことを我慢する私は良い子ですか？おかあさん」であるし、「グループホームにいけるう？」という弱気な小声は、「いつも強い調子の言葉で、絡みつくようにお母さんや職員に、繰り返し、できそうもないことを要求することを、ちっともやめられない私はきっと嫌われているんでよねえ？」なのです。

その言葉の裏には、もうこれ以上良い子になろうとしても、決して親や職員の期待通りには良い子になれそうもないと感じているY子さんの心の叫び声が聞こえ始めていたのです。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

そんなことに気が付き始めた私たちは、彼女に一つの提案をします。十年来、作業分担になっていた廊下の掃除を彼女の作業からはずし、割り箸の箸入れを折る仕事をやってみないかと相談したのです。

彼女は十分自立しています。ADLはほぼ自立です。洗濯機も十分使いこなしますし、洗濯物を干すこともできます。包丁も上手に扱って料理もできます。しかし、この十年間、廊下の掃除を実施できた回数は100日程度でしょう。この十年間私たちは彼女に掃除をほとんど強要していません。その中で、このできない有様は、この廊下掃除が嫌いであり、さらに苦手であり、十分な達成感がないことを、いまさらながら私たちに教えていたことにやっと気が付いたからでもあります。なにをもって汚れているのか、どうすることがきれいになることなのか、自閉症である彼女にとっては理解が難しいことであつたに違いありません。(こんなことは今になって言えることなのですが...)

彼女は、折り紙、刺しゅう、裁縫が大好きです。箸入れ折りを選んだのには、彼女のそうした趣向に合わせていくことが、彼女の余分な頑張りはずすことに繋がるのではないかと考えたからです。

彼女からはさっそく同意がもらえました。しかし同時に例のあの大声が始まったのです。

「アパートでくらしたいんだわあ！」

しかし、意味は「頑張る良い子でいたいんだわあ」です。彼女にとっては、掃除をすることが頑張る良い子なのでしょう。箸入れ折りは5枚ほどあって実質十五分程度の仕事です。これではまるで遊びだと感じたのでしょうか。

何十年も頑張ってきた自己像を捨てることは大きな勇気がいることです。挫ける自分を認めていくことは情けないことです。

職員集団は答えます。

「Y子さんは、ずっとずっと頑張ってきたんだよね。寂しい時も寂しいと言わず、家に帰りたいときも家に帰りたいとも言わず、どんなに苦手なことも、どんなにわからないことも、職員やお父さんやお母さんに怒られるのが恐くて、じっと我慢して、一人でやってきたんだよね。」

だから、これからは、できないことや苦手なことは、教えてとか手伝ってとか言いながら、職員やお母さんに助けられながらやっていこうよ。もうできないことはできないでいいじゃないか。のんびり行こうよ。職員も無理にやれなんてもう言わないよ。のんびりしているY子さんを誰も嫌いにならないよ」と。

両親にはすぐに電話して、掃除をやめたこと、でもこれからは箸入れ折りをやっていくことを報告して、認めてもらいました。

そんなおつきあいをしていく中で、職員はY子さんの新しい変化に気がつき始めます。

あれほど行事ごとに、細かい点まで強迫的に確認し、準備をしなくてはならなかったY子さんの姿が、だんだん無くなっていくのです。

そして帰省のたびごとに、あれをしる、これをしると両親に無理難題を要求していた姿もだんだん薄れていきます。

予定されていた行動が途中で変更になっても、イライラすることがめっきり少なくなってきました。

先日の総合防災訓練でも、毎年参加している、あんなに大好きだった（と思われていた）防災のビデオ放映も「行かないなあ」と言って参加しなかった彼女です。おそらく今までは、みんなが出るから頑張って参加していたのでしょう。

今になって考えてみれば、彼女には自閉症を背景として、様々な克服困難な障害特性があることがわかります。

彼女は、「ねえ」と呼びかけるつもりで肩を叩いただけでも、「なんでそんなひどいことをするんだ」と怒り出します。人間関係を想定できない彼女には、親愛の情も攻撃に感じられてしまうわけです。それを理解できない周囲の人間は、きっと彼女を何回となく叱り飛ばしたことでしょう。そんなことすらも理解できないのかと。

また、彼女は歩くスピードも、足の回転も超スローです。走るといっても、歩くスピードの二倍にも達しないでしょう。おまけに足の親指には強い力が入り常に反り返っています。しかしこれが彼女の全力の姿なのです。彼女には確実に運動障害があるのですが、機能的には二本の足には問題がない彼女は、そのことでどんなにか批判されたでしょう。「おそい」「一生懸命ではない」「やる気がない」と。

彼女が、がんばることをやめることで、これから手に入れるもの、それがきっと本当の幸せなのです。

【資料 26】

平成 15 年度 夏 クラス新聞「とちんこ」

『別れの風景に添えて』

言わずと知れた別れと出会いの季節、いつも春はほのかな苦味を伴ってやってくる。別れはいつも突然で、出会いはいつも選択を許さない。

彼らはどんな気持ちで職員の別れの言葉を聞くのだろうか？ 悲しさ、辛さ、妬みに恨み、それとも感謝？ 時には歓喜なんて方もいたりして…。(本当にイヤになってしまう。)

職員と彼らとの間には歴然とした立場の違いがある。この施設を自由な意志で辞めていくことができる職員とそんな甘っちょろい世界で生きていくことを許されていない彼ら、どんなに言い繕っても飛び立てるのは職員であり、いつもとり残されるのは彼らなのだから。

だから、施設での別れはいつも人を傷つける。そして明らかに「さよなら」を告げる側より「さよなら」を告げられる側が確実に傷つく。すぐることもできず、追うこともできず、不満を伝えることもできず、ただその現実を受け入れることしか方法が無いが故に彼らはなおさら傷つくのである。

だが、若い恋人同士の別れが「いつまでも君のことを忘れないよ」の一言でお互いを支えあうように、この重い知的障害がある方々との別れがはたして同じように支えあえるのだろうか？

実は、この春が別れの季節であることを一番知っているのは、他ならぬ彼らである。二十年、三十年の入所施設暮らしで、繰り返される単調な生活、望むと望まざるにかかわらず身につけてしまったこの別れの季節の感覚、彼らはそれをわずかずつ伸び始める陽の長さや日増しに強くなる陽だまりの心地良さ、そしてなんとなく伸びやかさを欠く職員の態度から察するのだろう。年が明け、二月の声を聞けば、そんな不安が彼らの心を一杯にする。「また、見捨てられるのではないのか」と。

* * * * *

Ｊさんは、その日、担任が退職することを知らされた。突然の伝達である。前日まで、いや、ほんのさっきまで「いつでもＪさんのこと、大切に思っているよ」と話しかけてくれていた最愛の担任からの通告である。

確かに僕ら側には僕ら側の別れについての決め事がある。それは、絶対に彼らの心を傷つけてしまうこの別れを少しでも和らげようとする試みでもあるのだが、例えばそれは次のようなことである。

退職や異動の伝達は全員同時の発表とすること、それまでは退職することや異動することは完全に伏せておき決して悟られないこと、別れを告げるときには、次の担任が決まっていて、旧担任と新担任と本人とが十分時間を費やして、その別れの辛さや寂しさ、離れていくことの

不安、放り出されてしまうのではないかという心配を抱っこ法的な雰囲気の中で話すことができるような環境を設定すること……。

「Ｊさん、大事な話があるんだけど、お部屋でお話しない？」と言われたときから薄々感じていた予感がただ的中しただけの会話の内容なのだが、言葉にされてみると「辞める」の言葉の重みは、やはりＪさんの表情を一変させていた。

担任は、すぐに言葉を継いだ。「Ｊさんといろいろなことを、一緒にできて嬉しかったよ。初めてやったことやできたことも多かったね。ヘアトニックを買ったり、キャベツやシーチキンを買ったり、お気に入りの服を買いに行ったり、電車にも乗ったね。新しいことをやる時には、いつもドキドキしたけれど、いつもＪさんが上手に教えてくれるので助かったよ。」

Ｊさんの眼差しは真剣である。「ごめんね、これでお別れだけど、Ｊさんのことはずっとずっと大好きだよ」

Ｊさんのそれまで我慢していた手がずっと伸びると、その指先は、ぎゅっと担任の腕をつねった。そしてもう一度、今度は、Ｊさんは担任の目を覗き込むようにして続けてつねった。「アウ」としか音声を作れないＪさんの声帯、「すき」とも「きらい」とも「いやだ」とも「やめないうで」とも言えないＪさんの構音器官、担任はそのＪさんの悲しみを一番知っている。担任はそれを黙って受け入れた。

「Ｊさん、ごめんね」

繰り返されるその言葉に答えるかのようにＪさんは、担任の腕をつねり返す。「イヤだ、行かないで、嘘つき、やめないうて言ったじゃないか」Ｊさんの叫び声が聞こえるようだ。差し出されたまま動かない担任の腕、Ｊさんの気持ちを精一杯受け止めているその細腕、どんなに痛くても逃げないその腕、Ｊさんの心と同じように痛むその腕、担任はどんな痛みにも耐えようと決心していた。どのくらい時間がたったんだろう。Ｊさんのつねりは止まっていた。

「Ｊさん、ありがとう。Ｊさんのおかげでとてもいい仕事が出来たよ」今度はＪさんは、そっと担任の肩に両手を回した。

* * * * *

Ｙさんは、五月を半ばを過ぎてから、引っぱり無しの鼻水塗りが始まった。様々な係わりが持たれたが、原因は解らず、状況はさらに悪化していった。解っていることはただ一つ、重い知的障害と盲という重篤な視覚障害と上下肢の運動障害というシビアな障害がある彼女にとって、顔面への鼻水塗りが「ちっとも私のこと解ってくれないじゃない！」というサインだということだけだった。

七月になって、やっと僕らは重い腰を上げた。特別な時間をとり、抱っこし担任と手を取り話した。

「Ｙさん、最近の生活どうかなあ？どう？うまくいっていないことあるよね。」

Ｙさんの表情はほとんど動かない。

「新しい担任はとうですか？前の担任と別れて寂しいですか？」

ニツと唇が動き、握り締められている手を彼女はゆっくりと振り払った。限りなく控えめに<YES>...。やっと彼女の本当の気持ちに触れた一瞬だった。

少なくとも五月の半ばまで、前担任が辞めてしまって寂しいなどというような様子を垣間見せなかった彼女、おそらくこの寂しさを一人で耐え抜いていこうと(今までと同じように)決めていたのだろう。

「ずっと一人で我慢してきたんだね。そんな寂しい気持ち誰も気付いてあげられなくてごめんね。いいんだよ、寂しければ寂しいといえいいんだよ。そんなこと我慢することじゃないんだ」

彼女の小さな胸は、この寂しさを自分ひとりではもはや支えられず破綻寸前だったのだろう。そんな彼女の想いに気付いた僕らは、まず退職した前担任に電話をした。そして僕らは電話口で次のように彼女の気持ちを代弁した。

「一生懸命頑張ろうと思ったんだけど、やっぱり駄目だった。どうしてやめちゃったの、寂しくて寂しくて。」

そして続けて母親に電話した。本人に受話器を持たせての代弁である。

「お母さん、ごめんね。わたし頑張ろうと思ったんだけど、やっぱり寂しい。それなのにこの気持ち、職員誰も解ってくれないの」

弱音と告げ口の電話だった。

今の彼女にとって弱音を吐くことも、母親に施設での居心地悪さを伝えることも勇気のいることだ。それは母親に心配をかけることであるし、何よりも頑張れなかった自分を認めることであるのだから。

しかし、一旦動き始めたものごとは次々に変転していく。彼女は次の日、一日中呟いた。「怒らないでね。怒らないでね。」と。

弱音を吐いた自分、一生懸命世話をしこそすれ、決してサボっているわけではない職員のことを悪く言ってしまった自分、その自分を責めているのだ。

「誰がYさんを責めるもんか、怒るもんか、みんな仲間じゃないか。強いところもあって、弱いところもあって、みんな支えあってるんじゃないか」

Yさんは、職員の手を取ると、そっとその手を自分の頬に導いた。それは、「わたしここに居ていいんだよ。」と言っているようだった。

【資料 27 -1】

平成 16 年度 冬 クラス新聞「とちんこ」

『解ってもらえるまで あきらめないぞ』前編

2003年、九月、Nさんが、シャツを着なくなってから、もう二週間の時間が流れようとしていた。約束された外出の話をし、予定された父や母の面会の話をし、カレンダーにそれを示すシールを貼り、それについて話しかける職員に笑顔を返すNさんに、職員はすぐにでもシャツを着てくれるのではないかと期待した。

Nさんにはもちろん発語がない。発語をコミュニケーションの手段として持たない彼が、シャツを着ないことで何かを伝えようとしているのだということは職員集団には痛いほど解っていた。ましてや数年前からは原因不明の理由で歩行という移動手段を絶たれ、車椅子生活の彼である。職員に思いの丈を伝えるその手段はそう多くはないはずだ。が、しかし…。答えはまだ霧の中だった。

* * * * *

Nさんが入所した十二年前、彼の意味は、自傷と他害と器物破損によって回りに伝達された。

「散歩に出たい」とドアを踵で蹴破った。

「オムツが濡れた」と床にニードロップをかまし、膝の骨にひびが行った。

「マイクロバスに乗りたい」と舗装道路に頭突きをした。頭が二周りも大きく腫れ上がった。

「小さい子がかわいがられる」ことが我慢できずに、その子の髪の毛を何十本も一度に引きちぎった。

「好きなメニューをおかわりしたい」と食器が宙を飛び、手首を噛んだ。彼の手首はいつも薄皮一枚で、すぐに出血した。

* * * * *

それから十二年、自傷も他害も器物破損も今の彼にはほとんど縁がない。手首を保護していたオーダーメイドのプラスチックプロテクターも頭部を保護していた金属製のヘルメットも当の昔に捨てられている。無理解と怒りの中で暮らしていた彼は、今、理解と安心の中で暮らしているのだ。服用していた向精神薬も今はない。

<扉を蹴り続ける彼に...>

「さんが散歩に出たのがうらやましかったよね。ちゃんと説明しなくて悪かったね。置いていかれたんじゃないよ。次はNさんの番だからね。」と相談と情報提供の姿勢が乏しかった状況を謝罪しながら嫉妬で怒り続ける身体を止めた。

<髪の毛を握り締めて離そうとしない彼に...>

「Nさんだけが施設で暮らしているんだよね。妹や弟はお父さんやお母さんと一緒に暮らしているんだよね。寂しいよね。こうしている今でも妹や弟がお母さんにかわいがられていると

考えるとイライラするよね。僕のこと本当に好きなのかって心配になるよね。でもここではみんなNさんのこと大好きだよ。お父さんやお母さんだって嫌いで君のことを施設に預けたんじゃないよ。」と離そうとしない指を一本一本ほぐしながら開いていった。

* * * * *

<五年ほどたったある日、彼は手首のプロテクターも頭部のヘッドギアもオムツも身につけるのを拒否し始めた。そんな彼に...。>

「僕らはまだまだ自傷も、オシッコの失敗も心配なんだけど、Nさんはもう大丈夫、プロテクターやオムツなしで頑張ってみたいと思っているんだね。もう、赤ちゃんじゃないんだ。君がそう思っているんだったら、その姿、そうだね、お兄さんになろうとする姿を僕らは応援させてもらうね。」と彼の希望通り全てをはずした。オシッコの失敗は時折見られたが、自傷の回数は彼の宣言通り激減した。僕らは彼の自傷の跡がないのを毎晩確認して、立派なお兄さんになろうとする彼の頑張りを褒め続けた。

* * * * *

彼が僕らに教えたこと、それはきっと数え上げれば限りがないほどたくさんになるのだろうが、確かにその一つには、<人にはそれぞれの頑張り方があり、そのそれぞれの頑張る姿をお互いに見つけ出し、それを認めあうこと>それこそが、生きる意欲を引き出し、よりよく生きようとするエネルギーになるのだという原則である。

そして、今回...

* * * * *

季節は秋に向かおうとしている。日に日に気温が下がっていきこうとしているのにも拘らず服を着ようとしないう彼。彼の伝えようとする決心が見て取れる。しかし、何も解決できないまま瞬く間にまた一週間の月日が流れた。そして、ちょうど全職員が集まる職員会。彼はその席に呼ばれた。

皆が見守るその真ん中で、彼はゆったりと膝枕された。彼とのやり取りが始まる。

「今日はありがとう。今日ここに来てもらったのは、Nさんの伝えたいことを聞きたいからだよ。Nさん、ずっとシャツ着ていないよね。きっと大事なことを伝えたいと思っていると思うんだけど、それがなんだかちっとも解らないんだ。いろいろ考えてみたんだけど、駄目だったんだ。そこで今日はこうしてみんなが揃っているところでNさんとお話ができればと思っているんだ。」

彼を囲む職員の顔を見渡す彼。それでも表情は動かない。

「Nさんの話したいことは、学園のことかな？お家のことかな？職員のことかなあ？お父さんやお母さんのことかな？」ゆっくりと注意深く尋ねながら、全身全霊を彼の身体の動きや表情の変化に集中する。もう一度...

「お母さんのこと？」反応がない。「お父さんのこと？」これにも反応がない。<いったい何の話がしたいんだろう？>「お家のこと？」これには、握り締めている手に少し力が入った。そ

して「学園の職員のこと？」伸ばしていた足の先にぐっと力が入る。

<彼の話したいことは、お家のこと、そして学園の職員のこと、でもそれはいったい何だろう？

>

彼がわかって欲しいというようにこちらを見つめている。

<そうだ！>...。

「Nさん、この夏には3日間しかお家に帰れなかったんだよね。みんなと同じように2週間帰りたかったのに、お父さんやお母さんの仕事の都合で短かったんだよね。それでもNさんは、怒ることもなく、職員に迷惑をかけることもなく頑張ってくれたんだよね。とてとても寂しかったのね。職員もその頑張っているのを知っていて、励ましたり、褒めてくれたりして、それで頑張ることができたんだよね。よく頑張れたって、さすがNさんって、僕たちもとてもうれしかったんだよ」

彼の口がそうなんだ、それを言いたかったんだとでも言うように閉じたり開かれたりしている。

「でも、二週間の帰省期間が終わってみんなが帰ってきて、今まで通りの普通の生活が始まったら職員みんなそんなNさんの寂しかったこと、頑張ったことすっかり忘れてしまって、帰省してきた人たちにお家での楽しい話ばかりしていたんだよね。」

Nさんは「そうだ」とも言うように「ウーッ」と唸った。

「忘れて欲しくないんだよね。Nさんの頑張り。誰だってそうだよね。頑張ってくれるのを解ってくれる人、見守ってくれる人がそばにいるから、だから頑張れるんだよね。せっかく頑張ってもみんなに忘れられるんだったら、本当にやってられないよね。」

「今日はここに星組の職員全員がいるから、Nさんの頑強りをすっかり忘れてしまっていたことをみんなに謝ってもらって、これからは絶対に忘れないことを約束してもらおうね。」

職員それぞれの精一杯の謝罪と約束が始まった。そしてそれが全員に一回りする頃、彼は横たえていた身体を起こし、いつもは閉じられがちの目をぐっと見開き、解ってくれてありがとうでも言うように職員をぐるっと見渡した。

Nさんは職員全員に抱えていた気持ちが伝わったことで三週間ぶりにシャツを着た。そして僕らには、本当の気持ちが伝わるまで絶対にシャツを着ようとしなかった彼の意思の強さが刻印された。

【資料 27-2】

平成 16 年度 春 クラス新聞「とちんこ」

『解ってもらえるまで あきらめないぞ』中編

Nさんが<ねえ、みんな、僕の頑張っていること、わかっていてくれる?>と服を脱ぎ続けることで、夏の帰省期間が他のメンバーさん方よりも短かったことの寂しさを、しかしそれをこらえて自傷もせず乗り越えてきた姿を、わかっていて欲しいことを伝えてから四ヶ月がたったこの2004年1月、彼はまたしても服を着なかった。

僕らは今、服脱ぎを初めとした様々な彼らの行動（不眠であろうが、発熱であろうが）その全てが彼らが何かを僕らに伝えようとしている姿だと理解もし確信しているので、こんなNさんの服脱ぎ行動も「今度はNさん、何を伝えようとしているのだろう?」「なかなかやるじゃん、やっぱり彼はくじけない人だね。」「去年の夏の服脱ぎの件の時、これからは何でも伝えていいよって言っちゃったものね。その通りやるところが本当にすごいよね。」なんて言いながら、これから入り込むだろう解決までの迷路に期待と不安を抱きながら（本当は不安の方が圧倒的に大きいんだけど）意気揚々だったのだ。

夏のときと同じように、帰省期間の短かった彼に、「寂しかったよね、もっと家にいたかったよね。他のメンバーさんたちはもっと長く帰っているものね。でもNさんの頑張りはみんな知っているよ。お父さんやお母さんの仕事が忙しいのを知っていて、自分のわがままや甘えで迷惑をかけてはいけないと思っているんだよね。Nさんはとても優しい人なんだよね、僕らはいつもそんなNさんのことを応援しているよ。」

Nさんは、僕らの方をしっかりと見つめ真剣に話を聞いている。僕らの話は明らかに彼の心に届いている風だった。出勤してくる職員全員が入れ替わり立ち代わり彼に話しかける。満足そうな表情を浮かべる彼。しかし、彼は夏の時のように服を着ることはなかったのである。

ここまででわかったこと、それは<服を脱ぐ>という発信の手段として以前と同じ行動が使われているにしても、伝えようとしている内容 僕らはそれを幸福の形と呼んでいるが は時々刻々と違うということである。

もう彼の求める幸福の形は九月の時点には止まっていないのである。短期間の帰省、それが寂しい、その寂しさをこらえて頑張っている自分をわかっていて欲しい、認めて欲しい、褒めて欲しい、そんなところに彼の要求はなかったのである。

僕らはしばしばこのことを忘れる。人間が、たとえそれが重篤な知的障害を抱える人間であっても、常に進化を止めない、同じ場所に止まっていない存在であることを。

脱ぎ続ける彼を前に僕らは困り果てた。<まさかこんなことは考えていないだろうな>というところから答えを引き出さなくてはならないのだから。

* * * * *

誰かが言った。

「誕生日いつだったっけ？」

急いで誕生会名簿をめくった。

「Nさんの誕生日は、1月です。1月10日です。」

「え！ホントかよ。1月なの？もう過ぎちゃっているじゃない。まさか誕生日パーティーやれって言うんじゃないよね。第一、自分の誕生日がいつだかNさんがわかっているとは思えないし...。」

僕らはこここのところ、いくつかの実践を通して、彼らにとって誕生日パーティーがいかに大切なことであるのか知っていた。彼らの誕生日パーティーの要求はこうだ。ケーキとロウソクそして誕生日プレゼント。さらにはハッピーバースデイの歌と家庭への電話、この電話では母親から「おめでとう」の言葉が届く。

口の悪い人はこういうかもしれない。彼らが誕生日パーティーを要求するのはケーキが食べたいからであり、プレゼントが欲しいからだ。つまり食欲と物欲が彼らを支配しているというわけだ。

でも私はそうは思わない。まず誕生日パーティーは誕生日を覚えていなければ祝いようもない。プレゼントだってその方の好きなことをちゃんと知っていなければ買い揃えることもできない。つまりその方にきちんと自分の心が向かっていなければできないのが誕生日パーティーなのである。

さらに誕生日パーティーは、<生まれて来て良かった>を伝えるまたとない機会になっている筈だ。

幼い頃母親の足元でよく聞いた障害児を持った母親同士の会話。

「本当にこの子が生まれてから大変で...。」

いつも疲れている母親の顔。病院、相談所を駆けずり回る母親。何かと争いが絶えない父親と母親との関係。すいませんと謝ってばかりいる母親の姿。聞かずとも聞いてしまった母親の愚痴、独り言。そしてため息。

「私なんか生まれて来なければ良かったんだ。」「私が生まれて来たばかりにお母さんに苦勞ばかりかけている。」そんな気持ちで彼らの心は満たされる。

そんな心配や誤解を払拭するのが誕生日パーティーなのである。

だって生まれてきたことを祝う日なんだから。

* * * * *

Nさんの家庭に電話した。

「今度の帰省のときに誕生日パーティーはありましたか？」

「ええ、今度の帰省はあまりNの相手はできなかつたんですよ、かわいそうだったんですけど。妹が成人式で、やれ着物だの、写真だのと忙しくて。誕生日を祝ってあげれませんでした。」

この情報を得て、僕らの支援は半信半疑ながら再スタートをした。

Nさんに話しかける。

「今度の帰省のときに、お母さん、妹さんの成人式のことばかりやっていて、Nさんの誕生日のことすっかり忘れていたんだよね。同じ兄妹なのに、一人だけお祝いして、一人はお祝いしないのは変だったよね。Nさんも誕生日、きちんとお祝いして欲しかったよね。」

なぜ重度の知的障害者のNさんが周囲の誰もが忘れていた自分の誕生日を知り得るのか、大きな疑問を残したままだったが、とにかくNさんからYESの反応が返り、支援は次に展開した。

クラスでは担任と一緒に誕生日パーティーを開催した。忙しく事を運んだのでケーキはショートケーキだった。プレゼントを次の外出で一緒に買うことを約束し、それをカレンダーに写真で掲示した。

家族とは次の面会で、ケーキを買いに行くことを約束し、同じようにカレンダーに写真を掲示した。

さて、でもまだ彼は服を着ない。

「なんだよ。やっぱりショートケーキじゃ駄目なの？きっと丸いデコレーションケーキなんだよな。」

デコレーションケーキが用意されて、何人かの職員と一緒に歌うハッピーバースデーの歌。

これで彼は服を着た。

* * * * *

今回もNさんは「誕生日パーティーをやって欲しい」という願いがかなうまで数週間服を着ていない。途中で妥協したり、諦めたりというようなことがない。それは重度の知的障害と言われる彼らにも、きちんとした具体的な想いや要求があり、それを是非ともかなえたい主体があるのを僕らに教えている。そして、その思いや要求は決して外側から与えられたものではなく、彼らの内側からふつふつと沸きあがってくるものなのである。

誕生日パーティを丸いデコレーションケーキを買ってきてやりたい、みんなでハッピーバースデーの唄を歌ってもらいたい、そして誕生日プレゼントが欲しいなあ…。これってわがままな要求ですか？

今時の家庭なら、こんなの当たり前ですよ。

そんな当たり前なことを、しゃべることができないばかりに、伝えられない人たちがいるんです。

しゃべらないってことは、考えてないってことじゃないですから！。

【資料 27-3】

平成 17年度 夏 クラス新聞「とちんこ」

『解ってもらえるまで あきらめないぞ』総集編

このところの僕らはかなり圧倒され続けている。何故って「ちっとも彼らがあきらめてくれないからだ。」

思いつくだけでも、Y子さんの不眠のこと、N男さんの服脱ぎのこと、K子さんの唾ぬりのこと、J男さんの強迫的なカード渡しのこと...とエピソードを挙げていくのにまるで苦労はいらない。よくもまあ、こう毎日毎日いろいろなことが起こるものだなあと感心するくらいメンバーさん方の何かを伝えようとする発信の嵐はクラスに渦巻いているのである。さらにこのところのメンバーさん方の変化は、その気持ちがきちんと伝わるまで決してそれをあきらめないという姿にある。つまりY子さんも、N男さんも、そしてK子さんもJ男さんも自分の気持ちがわかってもらえる最後までその発信行動(ここでは服脱ぎや不眠、唾ぬりや強迫行動のこと)を止めなかったし、それは彼らが決して自分の気持ちに妥協しない姿なのである。

* * * * *

Y子さんは偏食王(おそらく)である。僕らはそれを良く知ってははずであった。なぜなら彼女は旅行などで出される宴会メニューに全く手をつけないからである。誰もがみんな美味しくように食べる刺身やてんぷら、茶碗蒸しを断固拒否である。さらに宿泊が伴うようなときには一睡もしない。一晩中布団の上に座り込んで身体を前後にゆすり続ける。何かうまいっていいないのは事実だった。

しかし、僕らは食べなかつたり寝なかつたりする原因を、ホテルの慣れない環境や刺激の多さから来る興奮、多くの場合次の日に予定されている帰省に求めていた。(何の解決にもならなかったのであるが...)

彼女は日常的な施設の給食場面でも、生野菜や煮物などを中心に半分ほどのものを残す。冷静に客観的に観察すれば確かに(?)偏食ありなのだ。しかし僕らはそれを彼女の発信行動であるとはなかなか受け止め切れなかった。この「残す」という行動の裏にある伝えたい気持ちに配慮することができず、このくらい食べていれば健康、保健面でもさほど問題ではないだろうといかにも施設的な対応に流されていたのである。

結局僕らは彼女の偏食については知ってはいたが、それに伴う苦痛、努力、懇願については感じていなかったのである。知っていることと感じていることとは違うことである。知ることは確かに大切なことであるのだが、感じることはそれ以上に大切なことなのである。感じること 共感 なしには良質な支援は成立しない。

彼女の不眠は、特に帰省時にひどくなった。3泊帰って、全く寝ないなんてことまであって、とうとう母親が音を上げた。睡眠薬を使った方がいいのかしら? 薬が、服薬が大嫌いな娘の

ことを知っていて、そこまで考えこんでしまっている母親を前にして、僕らも目が覚めた。支援は一から出直しである。

さて、まずは想像と共感。

偏食が超強い人の食事、一日3回の苦痛の時間、本来は楽しいはずの時間が我慢の時間と成る。施設というところで、しかも給食で、どこまで食事のメニューについて好き嫌いが言えるのだろうか。しかもこの何十年かの間、練習と習慣により何とかたくさんの食材を食べられるようになってきているY子さんがいる。偏食を克服してきたY子さんがいる。いまさら食べられないとは言いにくい？

だけど、本来の食事は不味くても我慢して食べるもの？…。おそらく彼女の偏食は生半可なものじゃない。だとすれば食べていると言ったって、それは苦痛と努力の賜物以外のなにものでもないだろう。

一方、明星学園の運営方針の一番初め、具体的な実践事項の一番初め、そこに書かれている言葉、「イヤ」を受け止めて。何事もここから始まると書かれてある。

僕らの支援は、まずもって基本に戻るところから再出発だった。食事のオプションの選択は二者択一、レトルトカレーと納豆での選択である。いずれもY子さんの大好物であるのだが、味も匂いも強いメニューである。逆に言えば、カレーや納豆が好きならば他のメニューは味も匂いも薄い味気ないものに違いないのである。

彼女の選択はカレーが6で、納豆が4、順調なスタートを切った。

近づくクラス宿泊旅行で、新しいチャレンジ、他の同行のみんなはいわゆるてんぷら、刺身の宴会メニュー。彼女だけはカレーライスを中心した、豪華カレーライス膳、ホテルの好意で実現した。完食してぐっすり眠った。ホテルで寝ることができたのは初めてだった。

さて、次の帰省では外食のカレーライス、家庭では母親手作りのカレーライス、三泊四日をカレーライスづくし、納豆づくしで過ごしてきた。睡眠時間は奇跡のように夜間8時間と人並みだった。不眠に対する今までの苦勞が嘘のようだった。

僕らは、このまま彼女がカレーと納豆で何年間も過ごし続けるとは思わない。大切なことは、私には嫌いなものがいっぱいあるの、今まではなんでも食べられるようにならなくっちゃいけないと思って頑張ってきたの。でももういいよねえ。しばらくの間、好きなものをいっぱい食べさせて。と願っている彼女の存在を感じることである。そして伝えにくいであろうそのことを一生懸命伝えようとした彼女の僕らに対する信頼を裏切らないことである。

* * * * *

N男さんの思いは深かった。とても僕らの力の及ばぬところにあったのだった。

2005年、1月、冬の帰省、帰園後から始まった服脱ぎは、3月の頭になっても大きな進展がないまま時間だけが経過していた。帰省のこと、外出のこと、面会のこと、様々な仮説が立てられ、支援が組み立てられたが、その効果は一過的に過ぎなかった。行き詰った僕らは、彼の本当の気持ちへのアプローチを本格的な抱っこ法と筆談に求めた。すると、彼はなんとそ

の紙に ありがとう と書いたのだった。

その言葉はさらに僕らに大きな反省を強いたのだった。

僕らのそれまでの彼に対する支援はこうだ。

Nさんは何かして欲しいと思っていることがある。食べたいもの、行きたいところ、職員への要求、親への要求…。いつでも前提は、何かなされていないものがあるって、それを欲するNさんがいて、それを僕らは支援するという構造である。それをあまりにも強調するなら、あれをして欲しい、これをして欲しいとばかり思っているような欲求のお化けを作り出してしまっていることになるのだが、気がつかないうちに自分たちの支援は、そちらに向かっていたようなのだ。

彼の ありがとう の言葉は、それとはまるで異なる反対側のベクトルを持つものだ。

生まれながらの奇形症候群、何年もの病院通い、手術、言葉をしゃべることもかなわず、幼い頃から重篤なチック様な症状に悩まされ続け、意志とは裏腹に、他人を傷つけ、自分を傷つけ、思春期には突然下肢の運動障害にも見舞われ、踏んだり蹴ったりのこの人生を背景に、彼は ありがとう というわけだ。

職員集団は彼の言葉に頭が下がった。彼の人生の努力に比べれば自分たちの努力など恥ずかしいほどわずかなものだ。

確かに行動障害の出現は激減し、自傷や他害などもほとんどない今の姿は確かに僕らと彼の共同努力の賜物だろう。しかしながら僕らは実は障害者でもないし、障害者の親でもない。根本的には障害者の気持ちなどわからないところで暮らしているのだ。所詮、彼らの苦しみを頭の中で想像し、共感と称す気持ちの重ね合わせの上で仕事をしているだけの存在である。ところがそんな僕らに彼は ありがとう というわけだ。

僕らははずかしさいっぱいのなかで彼の ありがとう に最大限の こちらこそありがとう を送り返した。

それで彼はまた服を着だした。

【資料 28】

平成 17 年度 春 クラス新聞「とちんこ」

『ハイチューふたつ、ファンタグレープをふたつ』

まことに手前味噌な話で恐縮なのだが、宮下智著 お心主義辞典【二の法則】の項には、次のような説明がある。

『心の不全感、満たされなさを埋めるために、同じもの二つを必ずペアにして、購入したり、揃えたり、並べたり、身につけたりする行動。おそらくはペアの一方が母親を表象し、もう一方が本人の表象であると思われる。時には父親と母親との対を表現している場合もある。いずれにしても、本人が編み出した無意識的な自己治癒の方法であるので、止めたり、我慢させたりすることよりも、その気分、おそらく依存対象との一体感であると思えるのだが、十分味わうことができる環境を準備することの方が、次へのステップ（エンパワメント）のためのエネルギーを提供することになる。』

* * * * *

もう十年近く前の昔話なのだが…。

僕らは、Mさんともう二十年以上前に亡くなっているMさんの母親の墓参りに出かけた。場所は学園からおよそ一時間、高速を飛ばし、田舎道を三十分も行ったところだった。

墓参りに出かけるまでの経緯は話せば長くなるのでまた別の機会へ譲りたいのだが、ここでは次のことだけを説明すれば十分のように思える。

Mさんの母親は、Mさんの入所の後すぐに事故で亡くなっている。残念ながらMさんは、母親の愛を十分味わっていたとは言い難い。その頃Mさんは三才である。さらに皆さんは想像して欲しい。三才の子が、しかも重度の知的障害と自閉性の障害併せ持ったその子が、突然母親が目の前から消えて（亡くなって）しまったとき、それをどう受け止めるかについて。

おそらく『死』は理解できまい。とすれば、Mさんは、<母親は自分を捨ててどこかに行ってしまった>、それは<自分を嫌いだからだ>と考えてしまってもおかしくはあるまい。

そのMさん、買い物は見事な【二の法則】である。ハイチューをふたつ、ファンタグレープをふたつである。

この日、僕らは母親のお墓へのお供え物を慌てて近くのコンビニで調達した。もちろんMさんも同伴である。

「Mさん、お母さんのお墓に何をお供えしようか？」

彼は、分かったのか分からなかったのか、いつものと同じようにハイチューふたつにファンタグレープふたつ、加えてオロナミンC。さらに加えてカロリーメイト。こちらはいずれもひとつずつ。

天候は横殴りの風と雨。差した傘が吹き飛ばされそうだった。

僕らにはどうしてもMさんに分かって欲しいことがあった。おそらく二十才を疾うに過ぎた今の年令でもおそらく『死』については完全には分かるまい。だとしたら、母親は「あなたを捨ててどこかへ行ってしまったのではない、このお墓の中に、この地面の下にちゃんといるんだ」ということと、「あなたを嫌いになったのではない、この地面の下からあなたのことをずっと見守っているんだ」ということを。

仕事の合間をぬって時間を作ってくれた父親に案内されて、墓地に着いた。いずれお金に余裕ができれば立派なお墓をと、予定されている一区画には大きな御影石がどすんとひとつ。これが彼の母親の墓だった。この下に彼の母親の骨が眠っている。いつも飛んだり跳ねたり走ったり、慌ただしい彼もさすがにしんみりしている。<ちゃんとこの状況を分かってる>、彼のしんみりは、僕らにそれを伝えた。冷たい雨が頬を打ち付けている。

「Mさん、大切な話があるんだ。よく聞いて欲しいんだけど…」

「お母さん、Mさんの小さいときに、急にいなくなっちゃったんだよね。学園に入って、お母さんに会えなくなっちゃったと思っていたら、今度はお葬式だなんて言っちゃって。会いに行ったときには、もうお母さん呼んでも動かなくて。きっと僕のことを嫌いになったんだと思っちゃったよね。呼んでも返事をしてくれないんだものね。いまここで、ちょっと説明したくらいじゃ、すぐには分からないかもしれないんだけど、この石の下にお母さんは眠っているんだよ。ずっとずっと。どこかへMさんを捨てて行ってしまったのではないのだよ。この石の下で、いつでもMさんがいい子になるようにって、祈りながら、ここからMさんを見守っているんだよ。」

彼は一本のファンタグレープを石の上に置いた。

Mさんは、二番目のお母さんと全くうまくいかない。世の人はそれを彼の持つ重い知的障害のせいにするかもしれない、また自閉性の障害のせいにするかもしれない。でも、いまの僕にはそうは思えない。自分の本当のお母さん、いまは疾うにいない一番目のお母さんが大好きだから、だから二番目のお母さんとうまくいかないのである。二番目のお母さんのことだって大嫌いということではないのだろう。その証拠に義妹や義弟のことはいつも名前が出るほど大好きなのだから。

彼は僕らの話しているその横で、まずハイチューを平らげた。そしてファンタグレープを一本瞬く間に飲み干した。僕らはちょっといやな予感でドキドキした。せっかくお墓の石の上に置いたファンタグレープをいつものように飲み干してしまったらどうしようと。

彼にはすぐそこにクラス変更が待っていた。僕らとももうしばらくたてばお別れである。僕らには、この死別した母親とのお別れのことを少しでも彼の中で清算することができれば、すぐに訪れるであろうクラス変更によるお別れもうまく乗り越えられるのではないかと考えていた。

人は、たくさんの人たちに愛されたいと願うものである。でも現実的にはなかなかそうもいかない。じゃあいったい何人の人に愛されたなら、人間というものはやっていけるのであろう

か？それはたぶんひとり。この世の中にたった一人でも、自分を愛し、大切に見守っていてくれる人がいたなら、それで人間というものはやっていけるのである。辛い状況にあっても、悲しい状況に陥っても、過去に一回でも、ひとりでも、きちんと自分を大切にしてくれた人がいたなら、それで人間は挫けないのである。その一人の人間、それはここではもちろん母親である。施設でいえば、それは担任である。最愛の母親、最愛の担任である。

「ねえ、Mさん。いつまでも、Mさんのことを見守っていてくれるようにお母さんをお願いしようか。」

彼は僕らと一緒に両手を合わせ、頭を垂れた。

ますます雨と風が強くなった。「嵐を呼ぶ男だね、Mさん」担任がつぶやいた。

「さあ、行こう」

Mさんは僕らと一緒に動き始める。

彼は、お墓の石の上にポツンとひとつ置かれたファンタグレーブに手をつけようとしめない。大きな丸い御影石の上にポツンと置かれたファンタグレーブ、雨に打たれて佇んでいる。

「ジュース、お母さんにどうぞだね。Mさん、ちゃんとお母さんの分だって、分かっていたんだよね。もしかしたら飲んじゃうかもしれないなんて、僕らがMさんのこと分かってないんだよね。ごめんね、Mさん。」

二本買われたファンタグレーブ、そのうち一本は自分の分、そしてもう一本は母親の分、Mさんはちゃんと分かっていたのだ。

Mさんの物語、これからまだまだ十年以上続くのですが、なんだかんだ言って、この日から僕らは【二の法則】を強く信じている。

* * * * *

Jさんは、雑誌を必ず二冊、Yさんは必ずハンカチを二枚、Nさんは必ずダビングビデオテープを二本、Kさんは必ずコップを二つ、……。みんな二つあって安心なのだ。

さらに後日談。Mさんは悲しいとき、辛いとき必ずカロリーメイトが食べたくなるのです。心にエネルギーを。きっとそんなところなんだと思います。